

# 教化研究

2002年(平成14年)

No. 13

研究成果報告

「人材データベースの活用と  
結縁五重相伝会のあり方」

浄土宗総合研究所



# 教化研究

2002年(平成14年)

No. 13





# 目次

## 研究成果報告

人材データベースの活用と結縁五重相伝会のあり方……………現代布教研究班……………2

## 平成十三年度研究活動報告（概要）

浄土宗義と現代——浄土宗基本典籍の現代語化……………林田 康順……………30  
開教の基礎的研究……………

① 国内開教……………武田 道生……………34

② 海外開教……………水谷 浩志……………38

浄土典籍・版木の研究——浄土宗寺院所蔵文献類調査整理研究……………竹内 真道……………40  
教化儀礼の研究——伝承儀礼研究……………

礼讃声明音譜の研究（Ⅱ）……………坂上 典翁……………44

ホームページによる教化情報提供運営に関する研究

① 日本語によるホームページ……………今岡 達雄…

② 英語によるホームページ……………戸松 義晴 Jonathon Watts… 65

葬祭仏教研究——葬儀の実態的研究……………細田 芳光… 68

日常勤行式の現代語化に関する基礎的研究……………福西 賢兆… 70

研究ノート

「葬祭に関するアンケート」静岡教区アンケート第一次分析結果報告……………葬祭仏教研究班… 74

公開講座「五重相伝の基本と実践」……………上田 見宥… 108

浄土宗総合研究所所員・嘱託名簿…………… 142

浄土宗総合研究所運営委員会委員名簿…………… 147

平成十三年度 行事報告…………… 148

平成十四年度 研究課題・担当者…………… 152

編集後記…………… 154

# 研 究 成 果 報 告

「現代布教研究班」 成果報告

人材データベースの活用と結縁五重相伝会のあり方

現代布教研究班

目次

I はじめに

1 本研究の目的

(1) 人材データベースの活用

(2) 結縁五重相伝会のあり方

2 研究の方法

(1) 人材データベースの作成

(2) 結縁五重相伝会のあり方

II 研究成果報告

1. 人材情報の作成作業

(1) 人材情報収集作成作業

(2) システムの概要

2. 結縁五重相伝会のあり方

(1) 五重相伝会の実際(清水秀浩研究員講義より)

(2) 「五重相伝」の基本と実践

(上田見宥先生公開講座・別掲108ページ)

(3) 勧誡録による五重日程の考察

① 席数

② 勧誡内容ごとの席数

③ まとめ

(4) 「結縁五重相伝会についての調査」報告

① 調査表

② アンケート集計結果

イ、概要

ロ、調査結果

ハ、教示記入事例

Ⅲ 課題と提言

1 四つの課題

2 提言

(1) 組単位の開催

(2) 出張五重相伝会の試み

Ⅳ おわりに

研究会議活動報告

研究班一覧

## I はじめに

### 1 本研究の目的

#### (1) 人材データベースの活用

平成十二年度「教化研究」No・12 現代布教研究―教化活動における人材・布教情報の収集―においてすでに述べた通りであるが、本年度は「人材データベース」の作成作業をすすめて行く。

#### (2) 結縁五重相伝会のあり方

同時に、新たな研究課題の予備研究として左記の研究を進めて行きたい。

浄土宗の教えを、五つの順序にしたがって伝える法会に「結縁五重相伝会」がある。

この「結縁五重相伝会」は、全国各地で厳修されているが、構成及び内容についての実態調査を含め、『21世紀の「結縁五重相伝会」のあり方』について多面的に研究を進めてゆくための予備調査研究を行う。

## 2 研究の方法

### (1) 人材データベースの作成

### (2) 結縁五重相伝会のあり方

## II 研究成果報告

### 1 人材情報の作成作業

#### (1) 人材情報収集は 現在60名程の方々の登録記入を終えているが、システムが構築考慮中であるため収集作業は現状凍結した。

#### (2) システムの概要 (提言)

① 宗務庁の然るべき部署に「人材情報管理室」を設け、全国機関に情報網を構築する。

② 浄土宗関係諸機関より、講習会研修会の情報を収集する。

③ 情報の分類管理 (常に最新情報を維持する)。

④ 情報提供を依頼し、受理する。

⑤ 全情報より、該当情報を抽出する。

⑥ 依頼者に情報を提供する。(報告書提出を義務付ける。)

⑦ 報告書の内容を情報に追加入力する。

⑧ 「人材情報管理室」を広報する。

## 2 結縁五重相伝会のあり方

### (1) 「五重相伝」について・現状と問題点

清水秀浩研究員講義資料

① 「五重相伝の配役と手伝いの人数」 B 5

(入行式・剃度・懺悔・要偈・密室・常時法用)

② 「五重相伝日程表」 異香山法樂寺 B 5

③ 「五重相伝のしおり」 ①序説⑥第五重 B 5

④ 「道場清規」・「五重相伝出席表」 B 5

⑤ 「結縁五重の準備」 B 4×7

⑥ 「心光寺五重相伝日程」 B 4

⑦ 「道場の荘厳」 B 4×3

入行書院式・前行中の道場・剃度式・要偈道場・

密室道場と法要関係の諸準備品

⑨ 「配役表」 B 4

入行書院式・開白法要・剃度式・書院式・

要偈道場・密室道場

⑩ 「五重相伝要項」河内國異香山法樂寺 B 5×15

各法要の配役表・差定・衣帯

### (2) 「五重相伝」の基本と実践

(上田見宥先生公開講座・別掲108ページ)

### (3) 勸誠録による五重日程の考察

後述のアンケート調査と並行して、日程面の参考にもなると考え、18冊の勸誠録をスタッフで読み合わせ、勸誠内容と日程の関係を調べてみた。勸誠のすすめ方は人によって異なり興味深いものがある。以下その調査の結果を述べる。

参考にした勸誠録一覧

(順不同・書名・勸誠師名のみ記載・敬称略)

◎ 「五重講説」上下巻 岩井智海

◎ 「口述(はなしことば)五重勸誠」伊藤宏天

- ◎『浄土宗の五重説法』井川定慶
- ◎『五重法話』野島宣道
- ◎『五重講説』林靈法
- ◎『五重傳法講話』藤吉慈海
- ◎『還愚の法悦』金子真補
- ◎『浄土宗五重講録』水谷大成
- ◎『五重勸誡』藤堂俊章
- ◎『弥陀の掌(ほとけのて)』寺田定信
- ◎『五重法話』岩井信道
- ◎『南無一聲』服部法丸
- ◎『ひとすじの道』羽田恵三
- ◎『故郷への峠道』山脇秀候
- ◎『順願の聲』松島定宣
- ◎『今現在説法』有本亮啓
- ◎『歡喜の音(こゑ)』民谷隆誠

①席数

最低八席、最高二十席とばらつきがあったが、一席の時

間がわからないため、勸誡全体の所要時間は判明しない。後に述べるアンケート調査と同じく十四・十五席が主流のようである。

②勸誡内容ごとの席数は勸誡師により違いがあることは勿論だが、大体の平均を取ると左のようになる。

全体・十五席

- 前説・三席(約20%)
- 初重・四席(約25%)
- 二重・三席(約20%)
- 三重・二席(約13%)
- 四重・二席(約13%)
- 第五重・一席(約9%)

③まとめ

多くの勸誡師は前説・初重・二重に重きをおき時間を取っている。仏教概説・宗学概説・二祖三代の伝記に時間を割いている例が多い。教学的内容より、信機・信法、そして念仏行の実践へという段階の踏み方が、結縁五重相伝勸



誠の道筋であることが読み取れる。

(4) 「結縁五重相伝会についての調査」報告

浄土宗総合研究所情報研究班では、平成13年11月～12月にかけて「結縁五重相伝会についての調査」アンケートを実施した。アンケート調査の対象は、「宗報」平成10年1月号より平成12年12月号までに五重開筵報告が掲載された寺院、270ヶ寺に調査協力をご依頼した。回答期限は平成13年12月31日であったが、平成14年2月28日到着分までを集計した。

① 調査表

調査表

教区名・寺院No・寺院名・住職名(五重開筵時)

会所・伝灯師名・勸誡師名・教授師名・回向師名

1. 日程に関して

開筵期間・時間帯・勸誡の数・一席あたりの時間

2. 伝灯師、勸誡師等に関してお答え下さい。

伝灯師は①住職又は先代住職 ②本山台下

③組内住職 ④その他( )

勸誡師は①住職又は先代住職 ②本山の紹介

③住職が希望した人 ④その他( )

教授師は①住職又は先代住職 ②本山の紹介

③住職が希望した人 ④その他( )

回向師は①住職又は先代住職 ②本山の紹介

③住職が希望した人 ④その他( )

3. 受者に関してお答え下さい。

A・参加受者数 名(男性) 名(女性) 名

B・最も多い年齢層 ①40代 ②50代 ③60代

④70代 ⑤80代以上

4. 今回が初めての開筵ですか。

①今回初めて ↓ 今回、開筵された理由は何で

すか ①晋山 堂宇建立 ③その他( )

②過去にも開筵している ↓ 昭和二十年以降の

開筵数を教えてください。 過去 回

↓ それは定期的ですか、不定期ですか

① 定期的（ 年間に一度の開筵）

② 不定期

5. 出仕者に関して教えてください。

A 僧侶の人数 約 名 当てはまる全てに○を

つけてください。 ① 組内寺院 ② 法類寺院

③ 友人関係 ④ その他（ ）

B 僧侶以外の 約 名 当てはまる全てに○を

つけてください。 ① 寺院婦人 ② 檀信徒

③ その他（ ）

6. 道場の荘厳で、五重の時に必要な用具をどうしている

かお答えください。

① 寺で全て揃える ② 組内寺院で借りる

③ 本山に借りる ④ その他（ ）

7. 開筵の後、五重ざらいを行いましたか、あるいはする

予定がありますか

① はい ↓ 質問 8・9へ ② いいえ ↓ 質問 10へ

8. 五重ざらいは定期的に行っていますか

① 一度だけ ② 定期的に行っている（ 年に一度）

9. 五重ざらいの内容はどのようなものですか

① 勧誡がある（ 席）

② 勧誡がない（具体的にどのようなものですか）

10. この調査表以外で、参考になる事がございますればご

教示いただきたく存じます。（ ）

以上

② 「結縁五重相伝会についての調査」

アンケート集計結果

## イ. 概要

（1）回答数は平成十四年二月二十八日現在139通で回答率は51%、有効回答は137通であった。ただし設問によって無

記入、無回答のものを含むため、合計数は設問ごとにそれ

それぞれ違ってくる。また、82通の方から日程表、役配表他、内容に関する詳細な資料等をお送りいただいたので、それらも考慮して集計を行った。

(2) 地域分布 五重開筵の地域分布に関しては、すでに当研究所大蔵研究員の調査(平成13年「戒名 その問題点と課題」葬祭仏教研究班)で報告済みの通り、近畿地方(特に滋賀と大阪の二教区)が圧倒的に多く、全体の67%を占めている。今回の調査でも、回答137通のうち近畿地方が93通と、同様の高さを示している。これをさらに総寺院数までもっと歴然とする事であろう。

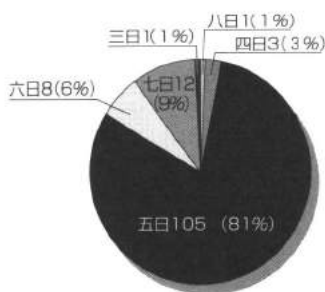
この調査は、宗報に報告された寺院のみを対象に行われたため、日程に関しても、また内容に関しても五重が頻繁に行われている地域の例が多くなり、統計的には偏った結果になった事も想定される。しかし少数ではあるが斬新的な考え方もあり、五重相伝の伝統と現代性を考える参考になると思われる。

## 1. 日程に関して

開筵日数 功績点上の規則(宗令第86号により五重相伝会は5日以上を評点)が理由の一端だろうが、宗に報告する寺院は5日間が圧倒的に多い。実際には3、4日の五重もよく耳にするが、宗に報告されている例は少なかった。6、7日間という回答には、伝統を守った昔ながらの7日五重をする他に、本行5日間の前の膝揃えとして1、2日を加えるという報告もあった。また、夜間で10日間五重をしている寺院があるという報告もあった。

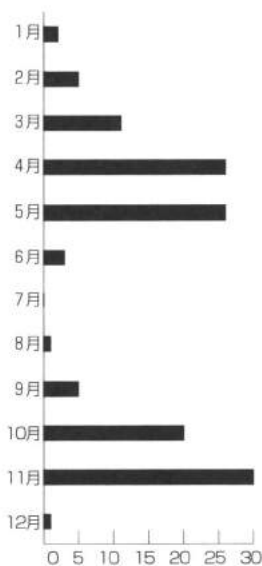
開筵日数

三日五重	1
四日五重	3
五日五重	105
六日五重	8
七日五重	12
八日五重	1
計	130



開筵の月 やはり春・秋に集中している。(4, 5, 10, 11月)但し、中には正月五重という伝統がある等、特殊な回答もあった

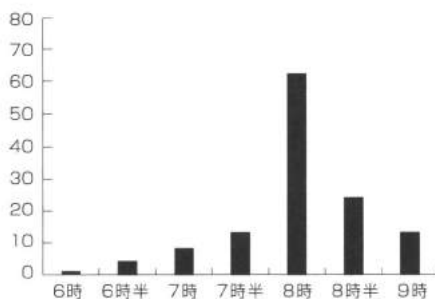
1月	2
2月	5
3月	11
4月	26
5月	26
6月	3
7月	0
8月	1
9月	5
10月	20
11月	30
12月	1
計	130



開始時間 地方寺院は8時、都市寺院は8時半・9時が多い。宿泊という調査項目がなかったために、6, 7時などの早い開始ができる理由が不明であるが、おそらく泊りでの五重と思われる。

開始時間

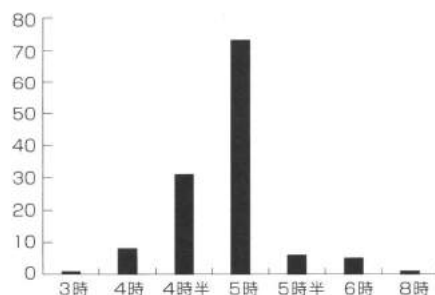
6時	1
6時半	4
7時	8
7時半	13
8時	62
8時半	24
9時	13
計	125



終了時間 夕方に終了する寺院がほとんどである。上記と同じく夜遅くまで行われているところは、泊りでの五重と思われる。

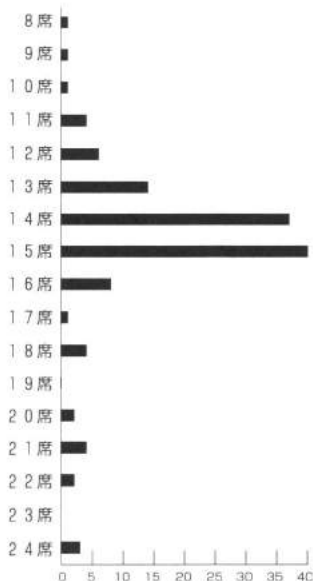
終了時間

3時	1
4時	8
4時半	31
5時	73
5時半	6
6時	5
8時	1
計	125



勸誡席数 14…15席という回答が圧倒的に多い。最大24席、最小8席であるが、90分一席としても途中で休憩が入って45分2席と考えられる等、実際の違いはそれほどではないと思われる。

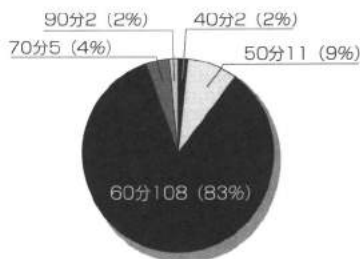
8席	1
9席	1
10席	1
11席	4
12席	6
13席	14
14席	37
15席	40
16席	8
17席	1
18席	4
19席	0
20席	2
21席	4
22席	2
23席	0
24席	3
計	128



一席あたりの時間 概ね60分。午前二席、午後二席というものが約84%であった。

一席あたりの時間 (分)

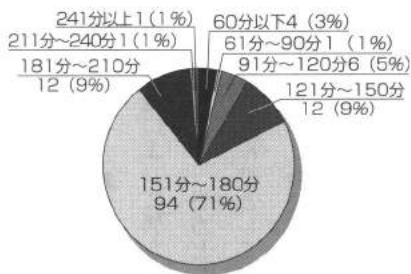
40分	2
50分	11
60分	108
70分	5
80分	0
90分	2
計	128



総勸誡時間 (分)

= 勸誡席数×一席あたりの時間

～240	7
241～480	1
481～720	14
721～960	95
961～1200	11
1201～1440	10
1441～	0
計	138



総勸誡時間 (分) 勸誡席数×一席あたりの時間  
表の通り、平均的な総勸誡時間は12～16時間であった。

一日あたりの平均勸誡時間(分) 席数×時間÷日  
 表の通り、だいたい平均化され一日あたり2時間半から3時間の勸誡となる。

## 2. 伝灯師、勸誡師、教授師、回向師に関して

「伝灯師」は、一部の例外を除きほぼ間違いないく開筵寺院の住職又は先代住職が勤めている。(94%) その他の例としては、勸誡師が兼任する、住職の代行(副住職)等であった。

「勸誡師」は住職希望という回答が約92%であった。その他としては、知人の紹介、副住職の友人、教授師の紹介、所属の会の紹介等であった。「勸誡師」は、圧倒的に住職の希望で選任されている。記名の「勸誡師」名を集計すると、同一の方が数カ寺、数十カ寺とお勤めになり、熟達の勸誡師として個人的に依頼されている例がほとんどである。137例中、実質総数は43名であり、A師(22カ寺)、B師(21カ寺)、C師(14カ寺)の3師で、全嚴修寺院の約

42%を勸誡されている。

住職	125
本山台下	4
組内長老	1
その他	3
計	133

住職	1
本山紹介	3
住職希望	123
その他	6
計	133

「教授師」は住職希望という回答が70%である。その他は、部内・門中の長老という答えがほとんどであった。他には教区長、法類総代、組の決定、組長等である。「教授師」については、その名称と実際の役割が地域によって異なる為、回答に多少の戸惑いを与える結果となった。当方としては、受者に対する道場内諸事の相談役、進行役として位置づけていたが、中には「総司」的な意味で「教授師」を配している例、「回向師」を兼ねて「教授師」とする例があり、正確さを欠いた点は残念であった。なお、「教授師」「回向師」が同一人としているのが15例、「教授師」「回向師」ともに無しが4例あった。

「回向師」も住職の希望が89%であった。その他の回答は、勸誠師の推薦、部内(門中)寺院の方々、というものが多かった。

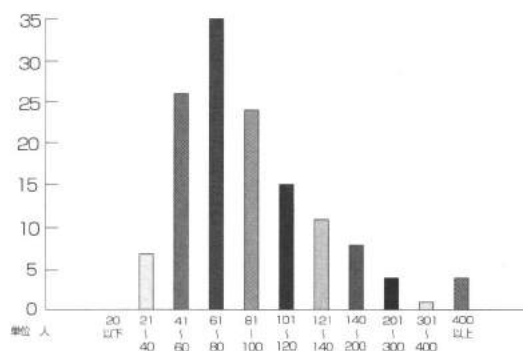
「教授師」の項と同じく、「教授師」的な意味合いで「回向師」が存在する例(この場合は「教授師」「回向師」同一人、または「教授師」無しと回答されている)と、贈り回向で受者の信仰情操を高揚させるための役割として存在する例に別れてしまった。また、後者の場合は「勸誠師」と同様、「回向師」として熟達された方に集中していた。特に回数が多い方は三名に絞られA師(11カ寺)、B師(10カ寺)、C師(8カ寺)であり、その他の方も、4ヶ寺を兼任している。また、「回向師」は無しという寺院が53例あり、この場合は「維那」が回向をすと思われる。

#### 教授師

住職	9
本山紹介	0
住職希望	59
その他	16
計	84

#### 回向師

住職	4
本山紹介	0
住職希望	111
その他	10
計	125



#### 受者に関して

20人以下	0
21~40人	7
41~60人	26
61~80人	35
81~100人	24
101~120人	15

121~140人	11
140~200	8
201~300	4
301~400	1
400人以上	4
計	135

3. 受者に関して  
A. 参加受者数  
表の通り、60名から100名あたりに平均があるが、300人を超える寺院も数件あり、それぞれの規模によってかなり幅広く開綻されている事が伺われる。東北地方は受者の数が全体的に多かった。

全体の男女比は

男性 五九三六名 (43%)

女性 七七三二名 (56%)

表の通り、各寺院における男女比(男/全体)も、40~50%であった。

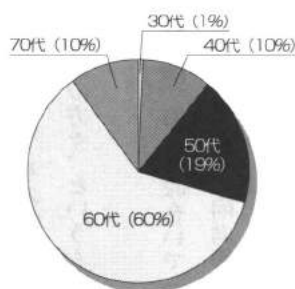
男女比	
0%	0
10%	1
20%	4
30%	15
40%	44
50%	62
60%	3
70%	1
80%	0
90%	0
100%	1
計	131

(男性数÷総数×100)

B、最も多い年齢層

60代が圧倒的に多いという結果である。

最も多い年齢層	
30代	1
40代	13
50代	24
60代	78
70代	13
80代	0
計	129



4. 今回が初めての開筵ですか

はい 12

いいえ 114

回答のあった寺院の約95%の寺院において、過去にも実績があることがわかる。

5. 今回、開筵された理由は何ですか

①晋山 5      ②堂宇建立 14      ③その他 57

この回答では、③その他の回答が多い。定期的に五重と授戒をくり返している等の記述が見られる。また、上記4の設問と重ねて見ると、初めての開催においての理由は、晋山、堂宇建立という例がほとんどだが、過去におこなわれたという寺院からも相当数理由が書かれていた。設問の不適切から、回答者自身の開筵と寺院の開筵と混同され、結果に反映されてしまったものと考えられる。

6. 昭和20年以降の開筵数を教えてください。

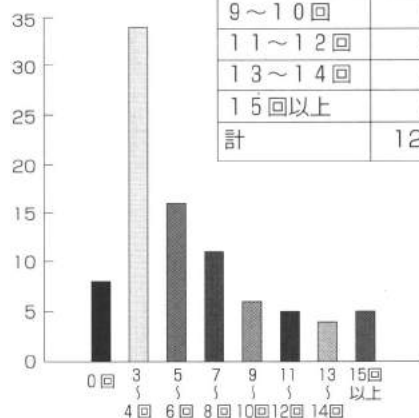
一つの区切りとして、戦後からの近代の開筵数を集計し



た。現在までの55年間の開筵を見ると、1回から4回までが最も多く、ほぼ同数で35ヶ寺前後である。

昭和20年以降の開筵数

0回	8
1～2回	34
3～4回	36
5～6回	16
7～8回	11
9～10回	6
11～12回	5
13～14回	4
15回以上	5
計	125



何年ごとに開筵されていますか

1年	0
2年	1
3年	3
4年	4
5年	6
6年	4
7～9年	2
10年	21
11～15年	13
16～20年	4
21～25年	1
26～30年	2
計	61

7. 五重は定期的ですか、不定期ですか。

定期 63 不定期 56

半数の寺院において、定期的に実施している。これを年数で見ると、10年から15年の間隔で開筵され、設問6の回答とほぼ一致している。10年ごとに開筵されている例が最も多いが、4～6年ごとという寺院も少なくない。

8. 出仕者に関して

A. 出仕僧侶の人数

この項目は、五重開筵に際して何名の僧侶が必要となるか(何名に出仕願いを出したか)を調査したかったのだが、設問不十分だったために、延べ人数を回答されたと思われる

出仕僧侶の人数

1～4人	0
5～9人	14
10～14人	35
15～19人	26
20～24人	16
25～29人	17
30～34人	11
35～39人	0
40～49人	4
50人以上	13
計	136

ものが多くみられた。よって統計的なバランスから判断し、40名以上のデータは考慮しないこととした。表より、出仕僧侶の数は10～15名前後が一般的であると思われる。次に、受者数との相関として、(受者数÷僧侶)を計算してみると、僧侶1人に対して受者5～10人が一番多いので、受者数のだいたい1割くらいの僧侶が出仕していると思われる。

またその内訳は以下の通りである。(複数回答可)

受者数 ÷ 僧侶数	
1人未満	9
1～2人未満	12
2～3人未満	11
3～5人未満	30
5～10人未満	48
10～20人未満	13
20～30人未満	3
30～40人未満	1
50人以上	1
計	128

その他の回答で見られたものは、大部分が本山の役職、回向師の推薦者、教区内寺院・浄青であった。特

どなたにお願いしているか (僧侶)

複数回答可

1. 組内寺院	124
2. 法類	94
3. 友人僧侶	70
4. その他	20

に回答1に補足して門中・部内寺院と限定して書かれている方が多かった。

B. 僧侶以外の人数

僧侶以外のお手伝い人数	
1～4人	15
5～9人	23
10～14人	26
15～19人	6
20～24人	16
25～29人	4
30～34人	10
35～39人	1
40～49人	7
50人以上	13
計	121

Aと同様に、延べ人数を答えられた方もあるが僧侶以外の出仕者数は5～15人が一番多い回答であった。受者数との相関として、(受者数÷出仕者)を計算してみると

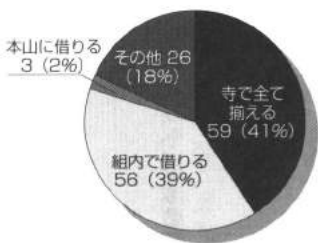
僧侶の数と同じく、出仕者1人に対して受者5～10人、受者数のだいたい1割くらいの方がお手伝いをしていると思われる。

受者数 ÷ お手伝い人数

1人未満	5
1～2人未満	12
2～3人未満	17
3～5人未満	18
5～10人未満	31
10～20人未満	20
20～30人未満	8
30～40人未満	4
50人以上	5
計	120

道場の荘厳について

1. 寺で全て揃える	59
2. 組内で借りる	56
3. 本山に借りる	3
4. その他	26



この設問も複数回答をそのままカウントしたが、項目1に関してのみ他の回答がないものを有効とさせていただいた。その他の例としては、仏具店、葬儀社に借りる(4例)、

9. 道場の荘厳で必要な用具をどうしていますか

その他の回答で見られたものは、親戚(13例)、配膳賄い人(5例)、友人知人(3例)等であった。また、2に含まれるが、特に世話人、役員、婦人会、前回受けた檀信徒、受者の家族という回答もあった。

どなたにお願いするか  
(お手伝い)

複数回答可

1 寺庭婦人	63
2 檀信徒	103
3 その他	33

五重ざらいは何年ごと

毎月	1
年に4回	1
年に2回	2
1年に一度	31
2年に一度	2
3年に一度	1
4年に一度	1
計	39

↓何年に一度五重ざらいを行いますか

1. 一度だけ 44

2. 定期的に行う 42

11. 五重ざらいは定期的に行っていますか

1. はい 88

2. いいえ 46

10. 五重ざらいを行いましたか、あるいはする予定がありますか

法類寺院に借りる(4例)、足りないものは門中、伴組で揃えている(8例)、教区に借りる(4例全て静岡教区)等であった。

12. 五重ざらいの内容はどのようなものですか

1. 勧誡がある 78

2. 勧誡はない 9

↓勧誡があると答えられた方へ、勧誡席数はいくつですか

1席	21
2席	18
3席	23
4席	11
計	73

↓五重ざらいで何をするか、具体的にお書きください  
○お別時會、念仏を称えるのが目的。勧誡を中心には考えない。

○日常勤行・礼拝&住職が法話をする。

○法要のみ 等

また五重ざらいの他に、定期的に念仏講や別時會を開くという寺院も数例回答があった。

以上

「結縁五重相伝会についての調査」アンケート集計結果

ハ、意見記入事例

また、調査表の終りに、

「10、この調査表以外で、参考になる事がございましたら、ご教示いただきたく存じます」

とお願ひしたところ、以下のような御記入をいただいた。内容が重複する部分もあるが、その主たるご教示を次に記載した。

記入事例

■(滋賀) 浄土宗寺院が多く、地域的に五重が盛んで信者同士が他寺の五重に参詣し合う習慣がある

■(滋賀) 檀信徒のすべてが五重相伝の受者となる。信衆方面はほとんどが同じ。

■(滋賀) 滋賀・甲賀地方の地域性も手伝っている。7日五重を守っている。

■(滋賀) 五重の度に前五重の方が奉仕してくれます。新五重受者の家から期間中一回は出仕してくれます。

■(滋賀) 滋賀教区では教授師は、儀式中の一役割にすぎない。九州全般では回向師の役を教授師と呼んでいる。五重ざらいは、一日五重のような形で勸誡師、回向師を招いて行う。その他に念仏講が年に2回ある。自分が勸誡をするときは近江方式で行います。

■(滋賀) 檀家数18軒では、25〜30年に一回でないと受者が揃わない。(老夫婦二人暮らし・若夫婦など入れて)

■(大阪) 昔は発起人になって金銭的負担をしてくれる人があったが、今の社会ではなく、受者に負うところが多い。故に冥加料が高くなる。

■(大阪) 成満後、お礼参りに総本山知恩院、岡山誕生寺へ。なお拙寺では再伝者はありません。

■(大阪) 主として近江方式と大和方式とに二分される五重の形態、どちらの形式でなされたかを調べるのも統計として貴重かと思われる。伝燈師・回向師の調査はあるが、伝巻係についての調査が抜けていると思われませんが如何でしょうか。また、慣例として本山への御礼参りの習慣も多いので、これも対象とされたい。

■(大阪) 本山と一般寺院での冥加料の格差がありすぎる。檀家の少ない寺では法礼・経費の面で開筵したくともできないので、宗、本山に一考をお願いしたい。

■(大阪) 住職、勸誡師の他に4名の専任スタッフで運営できる。門中寺院は儀式のみ依頼する。

■(兵庫) 普段から感じることですが、五重相伝は単なる手段に過ぎないと思います。念仏会・別時会をしないなら五重相伝はお祭りで終わってしまう。そうした意味で今一度、五重相伝のあり方を本気で考える必要があると思いま

す。問題のひとつとして、聞法会になつていないか？お念仏（念仏一会）中心の五重相伝はできないものでしょうか？もちろん勸誡と伝法儀式も必要ですが、お念仏を称えることが第二になつていることが多いと感じます。

■（奈良）もつと簡単にできないものか？期間、荘厳すべてにおいて、もつとわかりやすく受者に気軽に受けてもらえるように。費用もたいそうすぎる。本人も受者も体力的にぎりぎりです。伝灯もわかりませんが、時代にあつた考え方も必要。

■（奈良）①必要経費で法礼の率が高くなる。②五重用具を個々寺院で揃える傾向で経費が重なる。①②より受者の経費負担が高くなり、個々の寺院（檀家数少ない）では定期的に開筵しにくくなつていく。③巻物（相伝）以外の重用具は本山で容易に貸して下さるようにと願う。

\*小寺は連合して開筵すればよいが檀信徒は菩提寺での相伝を望むので連合はしにくい。

\*難しいが受者の経費負担を工夫してみることに。

■（奈良）浄土宗信仰の真髓を伝えるため習慣をつけられ、浄土宗檀信徒は五重と授戒を必ず受けるものと思つていゝ。戒名はこれで授与する。世話方、約40名皆別行に慣れているので準備は別行中すべて役割分担して手伝う。組内、門中寺院も慣れているのでスムーズに運ぶ。多少の法礼は出す。大和五重は20〜30人の受者で成り立つ。檀家10〜20軒の寺でもやっておられる。五重は後の手入れ、信仰を育てることが大切である。やりつばなしでは信の芽が枯れる。我が宗、最大の武器と言われる通り、受ければ皆感激して納得する。未開筵の地域でも最初2〜3ヶ寺連合等の方策を考えて実施されれば定着させられると思う。八百年大遠忌を機に、全宗的に勤修されることを切望する。

■（伊勢）五重相伝は受者にウエイトを置くべき、僧侶の内陣五重ではない事を認識すべし。勸誡師・伝灯師・教授師・回向師の連携は絶対的な姿と思うがそれに随喜寺院・

受者とのコミュニケーションに不備を感じる。五重は僧侶のマスターベーションではないということを中心すべし。

■(福岡) 五重相伝はすべての寺院でやらねばならないと思うが、唯、費用がかかりすぎる。本山で勸誡師を派遣するようにして、せめてお礼を30〜50万までにしてもらいたいものだ。檀信徒の感激はすごいものだ。5年から10年に一度はやりたいと思う。

■(福岡) 宗内として化他五重が開筵し易い方法や経費が多くかからない方法、さらには勸誡師の養成を考えて頂きたい。

■(和歌山) 要は五重が終わった後に、受者に教化をしていくかにあると思う。アフターケアが大事のようです。当山では具体的な方策は目下、バス旅行・観音講と称する月例会のみ。ただ特に受者を対象にしない。

■(広島) 組内浄書会で「五重の手引き」を作成してそれに基づいて勤めている。教授師・回向師等も組内寺院で互助しあっている。

■(出雲) 勸誡師・回向師その他の法礼(人件費)が嵩みである程度の受者数を賄うだけの檀家数を持たないと五重を開筵することは困難になってきている。浄土宗にとって最も重要な教化の機会がもつと気軽に実施できるように一宗を揚げて検討していかなければならないと思う。勸誡・回向などの謝礼はどの程度包むものなのでしょうか。参考になるものがあればお知らせ頂きたい。何せ当方辺地なので相場のようなものが分かりません。

■(石見) 昼食は寺院婦人を中心にお手伝いの方と精進料理を作り差し上げます。受者の皆さんには大変好評です。組内寺院の檀信徒の方々にも必ずご案内し、数名の参加が見られます。

■(長野)五重相伝の伝統がない当地で開筵することは極めて困難。(出仕寺院の未経験、この点関西中京からの経験豊富な友人に応援していただいた)当山が20年に一度開筵できるのは文政八年(一八二五)より今回で9回目の伝統に支えられていて、住職は一代に一回以上、檀信徒は一生に一度は五重相伝につかなくてはという意識があるからできたと思う。要は日常の積極的な教化である。

■(静岡)他寺院と比べて拙寺の特徴は、①最終日(五ヶ目)の早朝一時間の別時念仏を全員で行い、それから正伝法を行う。(朝食は皆で取る)。②五日五重にしては勸誡の時間が長い。(70分)60分になると18席分となります。③各々にシートを持ってきてもらい、密室道場中において大座具としてすべてのシートを使用し、終了後、別紙のような印を打って返します。(受者に対する説明用紙あり)

④毎日受付順に調読し、席が毎日変わるようにします。

■(神奈川)受者との質疑応答の時間を欲しいと思う。

■(北海道)五重相伝がもっとやりやすいようになればと思います。一宗での経済的・人的な後押しを希望します。

### III 課題と提言

まずもって、ご繁忙の中ご協力をいただいた各寺各諸上  
人方に敬意をもって心から御礼申し上げます。

すでに、Iの概要に述べた通り、おおよその現状は調査  
できたものと考えます。

しかし、予備研究とはいえ、設問用語、例えば、教授師  
と回向師の定義が地域によって違う、という点があるなど  
慎重さを欠いたことを反省している。

そうした点を踏まえながら、やはり、五重相伝会は本宗  
の檀信徒布教、念仏者の養成の重要な活動である、という  
ことを再認識した。

### I、四つの課題

本調査の現状を踏まえて、五重相伝会開筵にあたって、  
留意すべき点を次の四点にしぼってみた。



## 1、経費の問題

### 2、スタッフの問題

### 3、用具等に関する問題

### 4、五重相伝・受者のアフターケアの問題

第一点の「経費の問題」については、

受者の冥加料については、20ヶ寺から事例の回答をいた  
だいた。

データ数としては少なく、また個々のお寺の地域性や歴  
史・開筵事情が違っているので単純には比較することはできない  
が、平均的な五日間の五重相伝会で、三万五千円から十五  
万円という幅があった。

その内、七万円〜十二万円が60%、六万円以下が25%、  
十三万円以上が15%となっている。

なお、発起人は一般が十五万円の場合、三十万円。一般  
が七万円の場合十五万円という例があった。

以上は初伝の受者で、再伝の受者は、初伝十万円に対し  
て七〜九万円。十三万円に対して十万円。七万円に対して

五万円等であった。

贈り五重は、初伝六万円に対して三万円。八万円に対し  
て五万円。十万円に対して、八万円、六万円、五万円。十  
二万円に対して五万円。十三万円に対して八万円。十五万  
円に対して十万円等のデータが集まった。

その他、特別回向(礼拝回向)、常回向、日別回向等、様々  
な形式に分けられ金額が決められている例もある。

冥加料であるから、額の多寡の是非を問うつもりはな  
い。事情はそれぞれであり、堂宇の建立・修復事業や晋山  
にあわせての開筵等と、数年に一度定期的に開筵する場合  
とでは当然事情も違うであろう。

いずれにしても、前述の意見記入事例にもある通り、経  
費がかかるため、冥加料を相当額に算出しなければならな  
いという事情が見えてくる。

何が一番かかるのであろうか。考えられることは、まず  
役職、スタッフ等への法礼・人件費であり、もう一つは、  
用具調達、会所の環境整備の経費である。

次に第二点「スタッフの問題」については、

門中寺院、組内、部内で定期的に相互扶助的連携が確立されている地域は問題ないとして、新たに開筵をするとなると、五重相伝の盛んな地域でもない限り、そのスタッフがなかなか揃わないのである。

勸誡師も調査結果にある通り、現状、全厳修寺院の42%を三名の勸誡師が勤められている。開筵する会所としては、できるだけ勸誡の勝れた法将を希望するであろうし、有名な勸誡師に集中するのは、ある面でやむを得ないことかもしれない。

同様に、回向師上人はじめお手伝いいたたく出仕者・スタッフの調整等、数年前からの準備が必要とされるが、その場合「法礼」等の経費が、開筵決断をためらう重要な要素になっていないだろうか。

もっと、負担が軽減される方策はないのであろうか。

第三点の「用具等に関しての問題」については、

寺で全て揃える・組内で借りる、を合わせると全体の80%

である。特に、寺で全てを揃えるとなると、その経費は相当な高額出費となる。そうした点で、現実には、組内で足りない用具は借りて実施するということになるのである。

静岡教区の例などは、大変参考になるのではないだろうか。

第四点の「五重相伝・受者のアフターケアの問題」

現在では、五重作礼・本山参り・念仏講という形をもって、五重で培われた念仏信仰の灯火を消さぬよう、受者へアフターケアをされている寺院が多い。意見記入事例で紹介したように、五重相伝会そのものも大切であるが、むしろその後がより一層、大切になってくると考えられる。

つまり、五重相伝会に連なつた受者の信仰をどのように生活に生かし、さらに、積極的に社会に働きかけ活かしてゆくのか、という問題をはらんでいる。

当然ながら、元祖法然上人のお念仏を伝え、お念仏に生き生きと生きる信者をどのように大切に育み育ててゆくのか

か、ということが問われる。

よいお話を聞いて、「ああ、あり難い」という回心から法然上人が生き生きと生きた如くそのお寺を中心社会的に念仏の光が輝いていつてこそ五重相伝会の開筵意義が全うされるのではないであろうか。

## 2、提言

前述の四つの課題「経費の問題」「スタッフの問題」

「用具等に関する問題」「五重相伝・受者のアフターケアの問題」について、妙案はない。

しかし、参考までに二つの事例をご紹介しますと思ふ。

まず、一か寺ではできぬというお寺でも、組単位・部単位での五重開筵は可能であろう。そこで、東京教区江東組での事例を参考に御紹介しよう。

東京教区江東組・五重相伝 事例（敬称略）

●青年会主催（昭和五十九年二月一日～4日）

会所 南部 心行寺

伝灯師 鈴木在定 勸誡師 後藤真雄

教授師 福西賢兆

受者 一一四名

●江東組・教化団主催（平成二年五月三日～六日）

会所 西部 靈巖寺 正覚院 長専院

伝灯師 廣本徹隆 勸誡師 遠田弘俊

教授師 熊井康雄

※（この間に受戒会を開筵）

江東組教化団主催（平成六年五月三日～五日）

会所 本所部 靈山寺 龍興院 徳壽院 靈性院

伝灯師 大島俊雄 勸誡師 八木季生

受者 七二名

●江東組・教化団主催（平成十年五月二日～五日）

会所 東部 雲光院

伝灯師 服部光喜 勸誡師 八木季生

教授師 熊井康雄

受者 一〇六名

その他、「帰敬式」、「念仏の集い」等の開筵を、組内にある56ヶ寺の協力のもとに、教化団、寺庭婦人会、青年会が一致団結して勤めている。

また、五重のアフターケアの意味も含め、青年会主催による毎月の別時念仏会が、会所を組内寺院の持ち回りにして開筵されている。

以上

組単位、門中単位で相互に扶助しあい、できる限り人件費を節約していけるような体制に、申し合わせが可能ならば、受者への冥加料負担を軽くする第一歩になると考えられる。

次に、スタッフ・用具等の問題を解決できるとおもわれる大本山増上寺の「出張五重相伝会」の事例を紹介する。

現在、大本山増上寺においては、「五重相伝会」「授戒会」を各年交互に厳修している。その大本山増上寺では、「出張五重」というシステムがある。

基本的には、台下の御親修であり、ご依頼があれば、スタッフ・道具・伝巻等すべてワンセットで出張してくれるシステムである。それらは、教務課が窓口になって相談に応じている。

伝灯師（台下）・勸誡師（本山布教師会）・教授師

道場係（4人）・御内侍（2人）

諸道具一式・伝巻（本巻・贈り五重伝巻）・お勤め本・五重のしおり

以上について用意できる。

増上寺で準備できる品一覧

伝巻類（五重本巻《血脈・譽号》・度牒《剃度式》・贈

五重《法名》）

莊嚴類Ⅰ（山越えの弥陀《軸》・釈迦三尊図・四句偈・

二祖対面図・二河白道図・贈五重諸精霊位牌・父母尊

位牌）

莊嚴類Ⅱ（大座具）

莊嚴類Ⅲ（血脈授用手枕・受者誘導灯〔釣具ウキ〕・

植砧）

表白ほか（剃度式表白【手本あり】）

● 厳修寺院側の経費について

① 御法礼等諸費用

②（木箱1）・（ポストンバック3）宅配費用

③ 受者費用

Ⅳ おわりに

今回、「五重相伝会のあり方」について予備研究を重ねてきたが、五重相伝開筵の盛んな地区は益々盛んに、開筵の盛んでない地域では盛んになるように念願してやまない。

盛んでない地域は、何故盛んでないのか、必要性を感じないのか、幾つかのハードルの前に五重相伝会開筵の一步を踏み出せないのか。こういった方面も調査が必要と考える。

もし盛んにならないければ、法然上人の選択本願念仏のみ

教えをいただく教師も寺院も、全くその存在意義を失う事になるのではないかと考える。

もし、盛んでない地域で五重相伝会開筵に踏み出せぬハードルがあるとすれば、

一つは、経済的ハードル

二つは、人材的ハードル

の二点であろう。

例えば、勸誡や法式に堪能な人材を有する総大本山布教師会・式師会において、勸誡師・回向師等、五重相伝会スタッフの養成をお考え頂く。そして、五重相伝会の用具を貸し出すというレンタルシステム化は実現できないものであるうか。そうしたシステムが可能であるならば、一般の寺院でも五重相伝会を開筵しようという機運が次第に高まってくるであろう。

当然、五重相伝の開筵にちなんだ総大本山への団参を組み込むことよって、五重相伝会を機縁に檀信徒が旦那寺と総大本山を通じ、檀信徒同士の和をつなぐ可能性が期待される。

現代は、機構改革が叫ばれている。是非、浄土宗をあげて、結縁五重相伝会の開筵に対する骨太の改革を考えてゆきたいものである。

V 研究会会議録（人名順不同・敬称略）

- 4月2日（月）「五重相伝」研究打ち合わせ
- 4月9日（月）「人材データ」作業分担
- 5月2日（水）講義「近代から現代における五重相伝」  
講師 大蔵健司研究員  
研究課題について討議
- 5月10日（木）「おてつき運動本部」へ協力依頼
- 5月28日（月）研究打ち合わせ・連絡
- 6月11日（月）清水先生講義、打ち合わせ  
現状と問題点 列記
- 6月18日（月）清水研究員資料・日程確認
- 6月25日（月）所内研究会準備・他
- 6月28日（木）所内研究会  
\*講師 清水秀浩研究員

\*講題「五重相伝について・現状と問題点」（所内公開講座）

\*場所 明照会館3階 第2会議室

- 7月9日（月）所内研究会まとめ

五重勸誠録整理作業担当決め

- 8月6日（月）学術大会発表打ち合わせ
- 8月27日（月）学術大会発表打ち合わせ

- 9月3日（月）所内研究会打ち合わせ

- 9月11日（火）学術大会 発表

\*場所 大正大学

\*「五重勸誠における在阿法師の事跡について」 佐藤晴輝研究員

- 9月12日（水）所内研究会

\*講題「五重相伝」の基本と実践

\*講師 上田 見有 先生

\*場所 明照会館第二会議室

- 同日 公開講座

● \* 講題 「五重相伝」の基本と実践

● \* 講師 上田 見有 先生

● \* 場所 増上寺南側信徒室

● 出席79名(所内出席者含む)

● 9月13日(木) 公開講座報告書作成・他

● 9月19日(水) 五重勸誡録まとめ、読み合わせ

● 10月22日(月) アンケート内容検討

● 10月31日(水) アンケート調査表作成

● 11月5日(月) アンケート発送作業

● 11月13日(火) アンケート開封整理、礼状発送

● 11月26日(月) アンケート開封整理、礼状発送

● 11月27日(火) 報告書作成、他

● 12月11日(火) 勸誡録まとめ検討

● 12月25日(火) アンケート入力、集計

● 1月7日(月) アンケート入力、集計

● 1月9日(水) アンケート集計、考察

● 1月21日(月) アンケート集計、考察

● 1月28日(月) 次年度計画、他

● 2月6日(水) アンケート集計、考察

● 2月18日(月) アンケート集計、考察

● 3月4日(月) アンケート報告書作成

● 3月25日(月) アンケート報告書作成

現代布教研究班

● 研究代表 八木季生客員教授

● 研究主務 正村瑛明専任研究員

● 研究員 佐藤晴輝・斉藤隆尚・後藤真法

● 研究スタッフ 中野隆英

■なお、大蔵健司研究員には研究班を越えて全面的にご協力いただいた。

# 浄土宗基本典籍の現代語訳プロジェクトについて

林田康順

はじめに〜当プロジェクト編成の経緯〜

平成二十三年に厳修される宗祖法然上人八〇〇年大遠忌を控え、浄土宗ではさまざまな大遠忌記念事業が立案・計画され、順次実施されようとしている。多くの記念事業の中、宗務当局（浄土宗出版室）から総合研究所へ委託された事業の一つに、かねてよりの懸案であった「浄土宗基本典籍の現代語訳プロジェクト」があった。

〔旧〕法語研究班〕は、法然上人のご法語の抽出・現代語訳を中心に編訳作業を重ね、浄土宗出版室を通じて以下のような『法然上人のご法語』三冊の刊行を果たしてきた。

① 『法然上人のご法語・第一集〜消息編〜』

（A五版、二八八頁、定価三、〇〇〇円、平成九年三月

二五日刊）

② 『法然上人のご法語・第二集〜法語類編〜』

（同、四一六頁、定価三、五〇〇円、平成十一年三月

二五日刊）

③ 『法然上人のご法語・第三集〜対話編〜』

（同、四八八頁、定価三、六〇〇円、平成十三年六月

二五日刊）

これら三冊の『法然上人のご法語』が、布教の場を中心に僧俗を問わず広くご活用をいただいているのは、編訳者としてこの上ない喜びである。〔旧〕法語研究班〕では、今後も二年に一冊のペースで、「教書編」をはじめ「伝語編」「制誡編」「雑編」「伝法然書編」と順次「法然上人のご法語」を発刊していく予定であった。

しかし、次のような理由から、残念ながらその作業を中



断せざるを得なくなつた。それは、前述した法然上人八〇〇年大遠忌を間近に控えた浄土宗出版室との話し合いの中で、『法然上人のご法語』編集・出版を通じてこれまで積み上げてきたノウハウと成果を十分に生かして、より分かりやすく完成度の高い「浄土宗基本典籍の現代語訳」の作業および出版が、「(旧) 法語研究班」に望まれることとなつたからである。

そこで、年度途中ではあるが、「(旧) 法語研究班」を発展的に解消、新たなスタッフと共に再編成をはかり、以下のような概要で「浄土宗基本典籍の現代語訳プロジェクト」を進める運びとなつた。なお、これと平行して「浄土宗基本典籍の英訳プロジェクト」も進めることとなつたのであわせて報告したい。

### スタッフ構成

研究代表以下、平成十三・十四年度の研究所スタッフならびに浄土宗出版室編集担当者の構成は以下の通りである。なお平成十五年度以降、作業の進展状況に応じてス

タッフを増員する場合もある。

### 研究代表・副代表

研究代表 石上善応（総合研究所所長）

研究副代表 伊藤唯真（総合研究所客員教授）

A（東）チーム（浄土三部経）「和語燈録」担当

監修 石上善応

研究主務 袖山栄輝

研究員 林田康順・柴田泰山

B（西）チーム（法然上人行状絵図）担当

監修 伊藤唯真

研究主務 善 裕昭

研究員 真柄和人・千古利恵子

C チーム（英訳）

研究主務 戸松義晴

研究員 ジョナサン・ワッツ

編集担当

出版室 小村正孝・松本一浩

## 編集方針

現代語訳および英訳にあたり、その編集方針は以下の通りである。

- ① 法然上人八〇〇年大遠忌記念事業の一環とし、浄土宗出版室との共同作業とする。
- ② 現代語訳する典籍は「浄土宗聖典」全六巻（浄土宗聖典刊行委員会編）より適宜抽出する。底本も「浄土宗聖典」とする。
- ③ 現代語訳は平易を旨とし、広く一般読者にも供与できるものとする。（細かい凡例などは、「法然上人のご法語」に準じることとする。）
- ④ 出典・典拠、用語解説などを末尾に付す。
- ⑤ Aチームは「浄土三部経」「和語燈録」、Bチームは「法然上人行状絵図」をそれぞれ担当する。担当典籍の現代語訳が終了次第、順次、他の典籍の現代語訳作業へと移行する。
- ⑥ CチームはA・Bチームが訳出した現代語訳からの英

訳を担当する。

## 成果報告

現代語訳および英訳の成果報告は以下の通りである。

- ① 平成十四年度以降、単年度毎に「教化研究」ならびに総合研究所ホームページにおいて、現代語訳の成果を各チーム毎に掲載する。そして、それをご覧いただいた方々から広くご意見を賜り、それらの指摘等を勘案・推敲して、随時「浄土宗基本典籍現代語訳シリーズ」（仮称）として出版する。

② A・Bチームによる現代語訳の作業と同時にしくは次年度に、現代語訳同様、「教化研究」ならびに総合研究所ホームページにおいてCチームによる英訳の成果を掲載する。こちらにも、それをご覧いただいた方々から広くご意見を賜り、それらを基に勘案・推敲して、随時「浄土宗基本典籍英訳シリーズ」（仮称）として出版する。

③ 出版の際の体裁等については、後日、浄土宗出版室との話し合いで決定するものの、広く一般の方々にも読んで

いただけるように、できるだけ簡便なものを目指す。

おわりにくお願いにかえて

私たち「浄土宗基本典籍の現代語訳プロジェクト」ならびに「浄土宗基本典籍の英訳プロジェクト」は、次年度から現代語訳および英訳の作業の成果を『教化研究』や総合研究所ホームページを通じて掲載することとなる。その際、よりよい「現代語訳シリーズ」および「英訳シリーズ」刊行のために、大方の諸賢によるご意見・ご指摘を広く賜れるよう伏してお願ひ申し上げる次第である。あわせて当プロジェクトへのご指導・ご鞭撻をお願い申し上げ、報告にかえさせていただきます。

合掌

# 開教の基礎的研究①国内開教

武田道生

## 研究の目的

開教の基礎的研究班の「国内開教の研究」は、国内開教事務を宗務庁から浄土宗東京事務所の教学担当が扱うようにことになったことから始まった。

国内開教規定（宗規則第88号）は、国内開教の目的を、次のように規定している。

第1条 国内における地域人口の流動にともなう過疎、過密化及び社会構造の変化に対応する本宗の有機的教化方策を策定し、国内開教を推進するため、この宗規を定める。

第2条 前条の目的を達成するため国内開教委員会（以下「委員会」という。）を置く。

第3条 委員会は次に掲げる事項を処理する

1 国内開教指定地域の選定並びに寺院、教会及び教化施策の設立に関する調査・研究

2 都市圏・過疎地及び開発地域に関する開教施策の推進

3 略

このように、第1条で規定されている三つの目的、すなわち①国内開教指定地域の選定、②寺院、教会及び教化施策の設立に関する調査・研究、③都市圏・過疎地及び開発地域に関する開教施策の推進、を達成するための研究が総合研究所に委託され、共同研究が始まった。

## 研究の内容

現在、教学担当が目指している国内開教のシステムは、まず、日本国内の各地域の寺院の置かれている状況の情報収集と分析・研究がなされ、次いでそうした資料に基づいて国内開教委員会で、開教地域の候補地を選定し指定する。さらにそうした重点地域へ派遣する国内開教教師の発掘・養成を行い、平行してさまざまな情報を一般寺院にも提供していく構想を持っている。

このシステム構想から、総合研究所の「国内開教の基礎的研究」班が目指したものは、コンピュータによる国内情報ソフトの開発だった。さまざまな情報を集中収集し、分析を加えて過疎地、過密地を割り出して、効果的な開教に関する情報を抽出することを目指した。こうしたソフトは、地理情報システムと呼ばれ、たとえば、コンビニなどの新規出店の候補地選びなどにすでに用いられていたことは後で知った。もちろん仏教界では、初めてのものだと言っている。

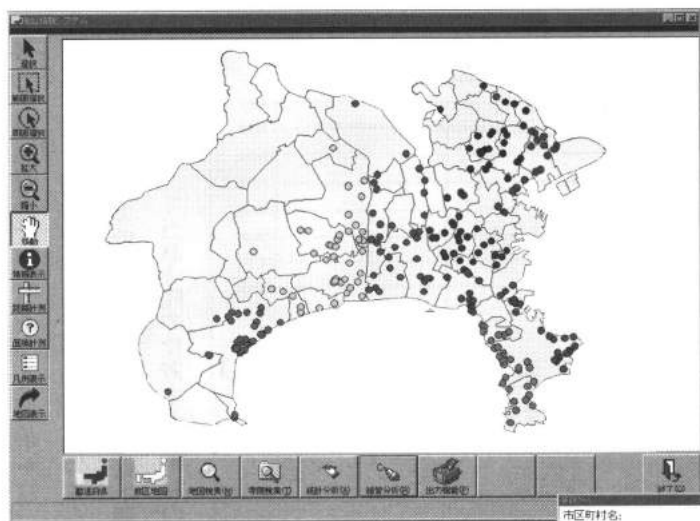


図1 神奈川県内の浄土宗寺院配置

基本ソフトは、あまり重くなく安価で加工の簡単な、ウィンドウズのエクセルを用いることにして、業者を選定し、入力する情報収集をはじめた。

いちばん初めには、視覚的に理解しやすいことを前提にして、全国の市町村地図上でどこが適正地かを図示するソフトを導入した。その地図上に基本となる情報として、全国約七万の寺院の寺院名・住所・宗派・住職名・電話番号などの情報を入力し、宗派色別の丸い点で画面に示すようにした。この点をクリックすると当該寺院の情報がプルダウンされる仕組みである。これだけでこの地域にどの宗派の寺がどういう配置状況にあるかが一目瞭然になった。ちなみに前ページ下段の図1は、神奈川県内の各市町村の浄土宗寺院配置図である。この図から浄土宗寺院が全くない地域や町村が一目瞭然に把握できる。またこの図とは別に全宗派図で見ると地域によって宗派の集中がみられ、地域内寺院の過疎・過密も明瞭となり、地域の特徴の理解がしやすくなった。

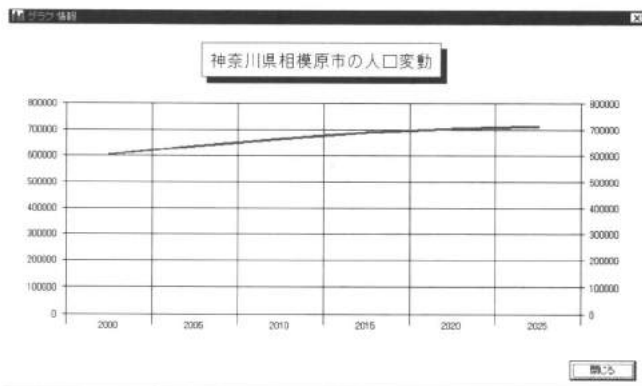


図2 神奈川県相模原市の人口変動グラフ

次いで、国勢調査が始まった一九二〇年から一九九五年までの全国の人口数を各世代別に入力した。さらに三〇年後の二〇二五年までの五年後ごとの人口変動予測数を入力した。これによって当該寺院の位置する市町村の将来の人

口推移の予測が、変動と誤差は当然ありうるものの、可能になった。図表2は神奈川県相模原市の二〇〇〇年から二〇二五年までの人口変動グラフである。これによれば、相模原市は現在の六〇万人から約七〇万人に増加することが見込まれている。また世代別グラフからは、将来高齢化と若年層の減少などの予測が可能となった。その他、人口と寺院数の割合、つまり人口に比して寺院が少ない地域、その逆、浄土宗の寺院が少ない地域と多い地域などを見分けることが実に簡単にできるようになった。こうして、最初にできなかった地理情報システムは、このような情報を分析し、全国三四〇〇あまりの市町村を、将来的に成長が期待できる比率で偏差値化して順位をつけた。

### 地図情報システム研究の成果

平成十三年、国内開教教師として、東京都の稲城・八王子地区を開教地域として指定された笠原泰淳師は、このシステムによって開教候補地を選び出し、地域の状況・将来性を開教委員会で認められ指定された。もうひとりの埼玉

県鳩山町の先光寺・小川寧山師も、鳩山町に浄土宗寺院がない状況や町の将来性から国内開教指定寺院に指定された。これら以外には、過疎化を含めた今後の寺院の運営対策の一環として、地域の置かれている状況をはつきりと理解していただくために、全国教化団長会議や各地の講習会で実演講習も行った。

来年度の課題としては、正確性を増すために、二〇〇〇年に行われた国勢調査の最新人口と三〇年後の予測人口に入れ替えるだけでなく、各市町村の世帯数を新たに入れ、世帯あたりの寺院の関係を分析することを予定している。さらには、各地域の経済や平均収入・支出、産業・文化なども入れ、いっそう充実したものにしていくつもりである。

# 開教の基礎的研究 (②海外開教) の研究活動報告 (概要)

水谷浩志

## (昨年度までの研究活動の経緯)

本年度の研究活動内容の理解を容易にするため、まずはじめに昨年度までの研究経緯を報告する。

当研究班では、過年度からの継続研究として、浄土宗教団の海外布教の方法論に関する基礎的理論の構築を目的に、これまでハワイ開教区における自教団並びに他教団の現状の分析を試みてきた。その成果の概要は、「ハワイ浄土宗寺院の現状―浄土宗ハワイ開教区研究概要報告」(教化研究第10号所収)と「ハワイにおける日系宗教の現状―浄土宗ハワイ開教区研究概要報告(その2)」(教化研究第11号所収)で報告されている。

また、既存の開教区以外の地域における浄土宗教団の新たな海外布教の可能性を検討すべく、オーストラリアを対

象とした宗教事情調査研究も行ってきた。この成果報告は、「オーストラリアにおける日系宗教の現状―オーストラリア宗教事情研究調査報告」(教化研究第12号所収)で報告されている。

さらに、平成11年度からは浄土宗ブラジル開教区の調査も行い、翌年度の浄土宗総合学術大会で左記のテーマによる現地調査の中間報告を行った。

報告①「海外布教における日系社会と寺院―ブラジルとハワイ」(担当 鷲見定信研究員)

報告②「海外布教における日系社会と寺院Ⅱ 浄土宗別院日伯寺の場合」(担当 武田道生研究員)

報告③「海外布教における日系社会と寺院Ⅲ マリンガ日伯寺の場合」(担当 水谷浩志研究員)



なお、この調査の研究成果の概要は、次回教化研究に掲載予定であるが、参考までに主な調査内容を次に紹介する。

① 南米開教区内浄土宗寺院調査対象

- ・ 南米浄土宗別院日伯寺
- ・ マリンガ日伯寺とバラナ老人福祉和順会（和順ホーム）
- ・ イベウーナ日伯寺の開基

② 他宗派仏教教団調査対象

- ・ 本派本願寺南米教団本部
- ・ 東本願寺別院
- ・ 高野山真言宗南米開教総監部
- ・ 曹洞宗別院
- ・ 日蓮宗身延山南米別院恵明寺

③ 識者によるブラジルの宗教学情調査報告

- ・ 「ブラジルにおける日系新宗教の現状」（渡辺雅子―明治学院大学教授）

・ 「ブラジルの日系宗教―エンデミック宗教とエビデミック宗教のはざま―（中牧弘允―国立民俗学博物館教授）」  
・ 「ブラジルの日系人社会」（高橋幸春―ノンフィクション作家）

（平成13年度の研究活動概要）

本年度は、このように今までに蓄積されてきたこれら海外地域の研究成果の分析に加え、国内開教担当の研究班との共同研究も視野に入れ、国内外を問わない開教に普遍的な方法論と地域ごとに有用な方法論を別々に抽出する試みを継続してきた。この成果は、ブラジル開教区の調査報告同様、次回以降の教化研究に掲載予定である。

平成14年度からは、この研究成果から抽出されてきた仮説的な開教の方法論を実際に検証する視点に立ち、今まで未調査であった浄土宗の3番目の開教区である北米開教区の現地調査を行う計画を進めている。

# 「浄土宗典籍・版木の研究―浄土宗寺院所蔵文献類調査整理研究―」

平成十二年度報告

竹内真道

## 〔目的〕

浄土宗寺院において、その寺の住職さえ自坊に何が所蔵されているのか知らないまま、また、什物帳で所蔵していることは知っていても蔵の中にあつて一度も見ることがないまま、黴や虫食いによつて損傷していく文献類がある。

また中には、本堂や庫裏の新築・改築などで、その寺院所蔵の文献類が廃品として処分されたりする例もある。しかしこれらの中には貴重な文献が存在することもあり、また学術的にはそれほどなくても、その寺院にとつてはその寺の歴史を物語る貴重な文献といえるものもある。

よつて、これらの文献類を調査整理し、各所蔵寺院にそ

の存在価値を認識してもらい、保存し後世に伝えていくことがこのプロジェクト研究の目的である。

## 〔これまでの経過〕

本プロジェクトは佛敎大学に研究室を借用している浄土宗総合研究所分室の研究員が中心となり、平成五年十月より計画され、平成六年四月より調査研究活動に入った。

まず、既存の情報を調査整理するため、浄土宗宗務庁の許可を得、「浄土宗寺院名鑑」掲載の全浄土宗寺院のデータ及び昭和四十三年の浄土宗勢調査記載の寺院什物（掛軸・古文書・記録等）を、浄土宗総合研究所分室のパソ

コンに全て入力した。これによりどの寺院にどのような文献があるかが前もって把握できることになった。(データ漏れを防ぐためこれらは厳重に分室で保管している。)

次に平成六年九月と平成八年六月に「宗報」にアンケート「〔浄土宗典籍・版木の研究〕へのご協力のお願い―お寺の古文書古書籍の保存状況をお知らせ下さい―」を載せ、回答のあった寺院及びその後研究所への依頼のあった寺院より十四箇寺を調査し、このうち二箇寺は完全に終了、四箇寺は目録作成が校正の段階であり、ほぼ完了した。またこれと平行して、古文書・掛け軸等の解説を現在も続行中である。

### 〔調査方法〕

調査依頼のあった寺院での調査は以下の手順をとる。

- ・ 保管現状の記録 (写真などで記録する)。
- ・ 全文種類の大まかな分類・並べかえ。
- ・ 上記分類に基づき、通番(仮番号)を付した付箋を全文献類に挟む。

・ 番号順にパソコンに入力(データベース化)。但し場合によってはカードでとることもある。この時、書名・著者・編者・奥付等を記録。必要あれば順番の並べかえも行う。※十四年度からは直接デジタルカメラで題名等を撮影、パソコンに入力し、研究所で整理する方法も取り入れる予定。

- ・ 再度の並べかえ。
- ・ 通番(正式なもの・目録番号)をパソコン入力。
- ・ 所蔵者の許可が得られれば、通番ラベルを添付。
- ・ 保管場所に目録番号順に収蔵。

(防虫剤を置くこともあり)

- 所蔵寺院の許可を得て、重要文献は写真・デジタルカメラに撮り、調査研究する。
- 調査対象寺院の文献類は悉皆調査を原則とし、簡易目録を作成し所蔵寺院に渡すことでその寺院の調査を一応の終了とする。

〔平成十四年三月現在までの調査状況〕

現在までに調査した寺院、また現在調査中の寺院の調査状況は以下の通りである。(寺院名などは所蔵者の管理上のこともありここでは伏せておく)

京都教区 古書籍五六七冊 調査終了 簡易目録作成完了

新潟教区 古書籍六六八冊 大藏経 古文書 調査終了

簡易目録作成完了

静岡教区 古書籍約五〇〇冊 大藏経一部 調査終了

簡易目録ほぼ完成

鳥取教区 古書籍一〇七九冊 調査終了

簡易目録ほぼ完成

富山教区 古書籍二一〇三冊 調査終了

簡易目録ほぼ完成

岐阜教区 古書籍約二四五冊 古文書 調査ほぼ終了

簡易目録ほぼ完成

埼玉教区 版木約三〇点 古文書 調査中

長野教区 古書籍約六〇〇冊 調査中

大阪教区 古書籍一八一五部 大藏経 卷子本 古軸類

古文書 十四年度内に調査終了の予定

京都教区 古書籍約四二〇冊 古軸類十點 調査中

京都教区 古書籍約一〇八二冊 調査中

滋賀教区 鎌倉期紙背文書一点 調査中

和歌山教区 古書籍約三〇〇冊 調査中

尾張教区 古書籍約七九五冊 古文書 調査中

〔今後の実施計画〕

長期にわたって続けてきたこのプロジェクト研究も一応平成十六年三月で終了することが研究所会議で決められ、運営委員会です承された。これ以上調査対象寺院はふやさず、十四年度と十五年度の二年間で対象寺院十四箇寺のうち、まだ調査の完了していない八箇寺を終了させる予定である。よって、さらに効率よく調査をすすめる必要がある。

すべての調査が終了後、その結果報告及び研究成果を所蔵寺院の許可を得て、何らかの形で発表する。その後の調査資料の保管等については平成十五年度に検討し、将来に

わたって役立つ形で残していきたい。

この調査は、一寺院文献類全調査を基本としており、対象寺院に調査した文献の簡易目録を渡して、喜ばれる結果となるよう努力していきたい。

# 『礼讚声明音譜の研究(Ⅱ)』

坂上 典翁

## (一) はじめに

昨年度の教化研究第十二号に『礼讚声明音譜の研究』と題して、研究ノートを発表させていただいた。大正十三年発行『礼讚声明音譜』(浄土宗法式会刊)に所収されている五線音譜で表記された、日常勤行と六時礼讚の音声と現行の音声と比較研究を試みるという内容であった。

前回は特に現行唱法と異なる個所をピックアップし、五線譜の表記を目安博士に変換し、現行の目安博士と並記するという方法を用いた。

目安博士による表記は、五線譜表記よりも分かりやすく、現行唱法との並記により、両者の比較が容易になされたのではないかと思われる。

さらに、昨年度の総合学術大会においては、目安博士の比較研究を発表する一方、『礼讚声明音譜』の音声と現行の音声を実唱したテープを発表し、視覚と聴覚による比較を試みた。

今回は、平成十二年度に引き続き十三年度に行われた『礼讚声明音譜』の研究会の内容を発表するものである。十二年度は日常勤行と六時礼讚の比較研究であったが、十三年度は、声明について研究会を催した。主に縁山流の声明を取り上げたが、『四智讚』に関しては、研究会当日に分室研究員の清水秀浩研究員に同席していただき、祖山、縁山、両派の『四智讚』について検討した。

また、今回、『声明』の比較研究を発表するにあたっては、声明は口伝を旨として伝承されてきているという大前

提を踏まえなければならぬ。現在、大本山増上寺式師が用いている『御忌法要集』に所収されている博士も、あくまで目安博士であり、それぞれの声明の修得は式師会での稽古で研鑽を積まなければならない。すなわち、声明は、ある一定の範囲の型を保ちつつ、伝承する声明師によって、それぞれの妙味が付加されていくという極めてデリケートな性質を持っているのである。このような要素を踏まえつつ、研究会の報告を行いたい。

尚、縁山流声明に関しては、その成立、特色、芸術性等を元研究員の中村孝之、小島伸方、渡辺俊雄の三師が教化研究第二号、三号で発表されているので参照されたい。(注1)

## (2) 研究方法・経過

既に教化研究第十二号で発表した研究方法を今回も採用した。すなわち、『礼讃声明音譜』(以後T・十三版とする)の五線譜による唱法を再現し、現行唱法との比較を試みるという方法である。十二年度の研究会同様、東京教区城西

組一行院の八百谷啓人師に五線譜を唱っていただき、現行唱法を田中勝道、廣本栄康研究員が行った。

また、今回の研究では、平成元年に大本山増上寺式師会が創立二十周年記念事業として縁山声明伝承者、津田徳翁法儀司の実唱された声明を五線譜にして出版した『縁山流声明集』(以後H・元版とする)も参考にさせていただいた。

平成十三年四月二十四日に第一回研究会を催し、平成十四年一月十六日までに七回の研究会を重ねた。原則として一回の研究会につき一つの声明をテーマに取り上げ、前述の方法で比較研究を行った。尚、この研究会に携わった研究員は、福西賢兆、田中勝道、熊井康雄、廣本栄康、西城宗隆、清水秀浩、坂上典翁の各研究員である。

### 第一回「称讃偈」(初重)

縁山流声明のいわゆる入門ともいうべき声明が「称讃偈」である。この声明は、初重、二重、三重とあるが、特に初重は一般寺院においても称えられることが多い。





「無」(図①-d)では、嬰羽を用いている。すなわち、

T・十三版は、変宮と嬰羽という半音異なる音が出現している。これは大正十三年当時の採譜の状況で、明確に変宮と嬰羽が区別されて唱われたのか、あるいは微妙な唱法の故に、より近い音の方に採譜されされたかは、不明である。しかし、このことから、声明自体の旋律が非常にデリケートであることがわかる。

## 第二回「唱札」

図②にT・十三版と法要集の五線譜を並記した。大正時代なので「和順」の大師号は、まだ無く、「法然上人」も省略されている。またT・十三版は、出音(しゅつとん)が黄鐘であるのに、現行は、双調の指定である。また現在の旋律になるまでには、多少の変遷を経ているので、今回は比較検討ではなく、五線譜による実唱を試みることにした。



## 第三回「四智讃」

T・十三版には、祖山・縁山両派の「四智讃」が所収さ



図①-b

四念仏の最後の部分

現行

陀   
仏 

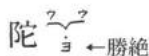
T.13年

陀   
仏 

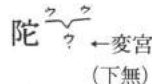
図①-a

四念仏の最初の部分

現行





陀 

T.13年

陀 

(呂音階の理論上の音である)

図①-c

清   
浄   
莊   
嚴   
全て変宮を用いている

図①-d

但し

無   
勝   
是 



れている。そこで今回は知恩院の式衆でもある清水秀浩研究員に出席いただき両派の「四智讃」について、T・十三版と現行を比較検討した。

大本山増上寺では毎年、法式修練道場が開延されている。この道場では、縁山流声明の修得も課題の一つとして、入門篇ともいふべき「唱礼・称讃偈」の稽古が行われる。しかし、「四智讃」、「伽陀」等の難度の高い声明については、道場成満後、入会が許可される式師会でのみ修得が可能になる。従って、「四智讃」以降の声明については、口伝という要素が、一層加味され、前出の『縁山流声明集』のような五線譜があるものの、声明を唱う式師によって、それぞれの妙味が付加されていくのである。

まず、縁山流「四智讃」について比較を試みた。結論からいうと、縁山流「四智讃」に関しては、五線譜に表現するのには限界があり、採譜者自身の相当苦勞した様子が見えがえた。まず、縁山流声明の最大の特徴であるユリについては、(図③-a)のようにしか表現できず、H・元版の表現(図③-b)と比較してもユリのニュアンスを伝える

図③-a



図③-b



ることが相当困難であることが分る。

また、「四智讃」の中で用いられる技法として、鶯の谷渡り、曉鳥等があるが、T・十三版にのつった(図③—c)実唱では、現行とは、かなり異質な印象を受けた。

図③—dに、現在、縁山の式師が用いる『御忌法要集』の句頭部分の博士を引用したが、この墨譜だけで、五線譜に表現しきれない技法と妙味を表しているのである。いかに、口伝の要素が強いかが分る。

次に、祖山流「四智讃」について比較を行った。八百谷師にT・十三版の五線譜を唱っていただき、清水研究員に現行と比較した意見を述べていただいた。

まず祖山流「四智讃」は、京都の四総大本山の門主・法主が遷化された際、表葬でしか唱われることはなく、いわゆる街寺ではほとんど唱われることはないのが現状であるという指摘があった。

以下は、T・十三版の「四智讃」の唱法と比較した清水研究員からの意見である。

図③—d

図③—c



2 4.3 4-3 4.3 4.3 4 4.3 4.3 4-3 4.3 4.3 4-3 4.3 4.3 4-

獨 麼 邊

3 4.3 4.3 4- 4. 5#4 4#4- 3#4 5 3#2- 3#4 3 4-#4-4 3#4.3

囉 囉 囉 囉 安

4.3 4- 3 4.3 4.3 4.3 4#4.

時

囉 賀

囉 四

囉 獨

麼

邊

囉

安

時

時

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉

囉 四

囉 四

囉

囉

囉

囉

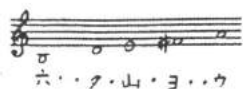
囉

囉

囉

囉

四智讃 呂黄鐘調



句頭

お 押出シ ユリニ ん ユリニ ぼ 嘯 ユリニ さ ユリニ ら ユリニ  
 庵 羅

さ ユリニ (ア) モロ下リ (ア) ユリニ た ユリニ ん ユリニ  
 陸 恒

ば ユリニ し ユリニ ぎ ユリニ ろ ユリニ (ア) フミユゲ  
 縛 僧 薬 羅

(ア) アア下リ (ア) ソリ (ア) か ユリニ (ハ) 押出シ ユリニ  
 スグーハネル 加 縛

(一) 現在、祖山のユリは、上が長く(三拍)で強め、下が短く(二拍)の気分である。

(二) モロ下りは五線譜では表現しにくい。

(三) 現行のソリは、二律を三律にして、T・十三版よりもはなやかな感じで唱う場合もある。

(四) 五線譜の六、七段目のピッチが低い。

(五) モロ下り、フミ上ゲに関しては、五線譜に若干手を入れれば現行に近くなる。

以上のような意見が出された。図―④は、T・十三版の祖山流「四智讃」の五線譜である。また図―⑤は祖山で用いられる、いわゆる回線譜の一部である。昭和二十六年に穴戸栄雄法儀司が考案し、以降、祖山の式衆が広く用いているということである。

縁山流では、このような回線譜を用いて稽古することは稀であるが、「唱礼・称讃偈」を稽古する際、使用する場合もある。縁山流に回線譜がなじまない要因の一つとして、ユリ、谷渡り、暁鳥、柳などの独特な技法が、回線譜や五線譜では表現の限界があり、修得にあたっては口伝に

よる要素が多分に強いためと思われる。

#### 第四回「光明伽陀」

T・十三版の実唱は、おおむね現行に近いという印象を受けた。「光明伽陀」は平調の曲であるが、T・十三版は下無を基音にしているのに対し、H・元版では基音が平調になっている。図―⑥

「光」の出方については、腹から絞り出すようにという口伝があり、『御忌法要集』では宮↓商の指定になっている。現行の実唱では宮よりも低い音で絞り出すように発声し、商まで上向させている。H・元版では、津田法儀司は宮(平調)まで上向させるのに、一オクターブの幅をもたせて唱われていた。(図―⑦)

また、「光」の発音には、最初に「コ」と明確に発音する「コ・オー」という方法と、絞り出すように発音する「コオー」の二通りあったようである。前者は、千葉寛定法儀司、後者は、津田徳翁法儀司が唱われていたという指摘があった。



图-6

前 伽 陀 (光明)

8 #4-4 4-4-4 0-#5-5-5-5 5-5-5  
 光 明 通 照

#5-5 5-5 5-5 5-5 5-5 #4-4-4  
 引 引 引 引 引 引 引 引

图-7

$\text{♩} = 60ca.$  光 (重)

ppp  $\text{mf}$   $\text{mf}$   $\text{p}$

明

图-8

光  
 明  
 通  
 照

前  
 伽  
 陀  
 早 詞 出 音 官

次に、「明」から「遍」への上向について譜面上では商↓呂角（鳧鐘）であるが、田中研究員より、道場の広狭、法要の内容（例えば慶事法要では多少、上向幅を広くとつて、はなやかにする）などの要素により、この部分の音幅には、若干フアジーな面があるという意見が出された。（図—⑧）

### 第五回「散華」(図—⑨)

T・十三版と現行唱法を比較してみたが、ナヤシとクイ切の部分以外は、おおむね同じであるという印象を受けた。これは、T・十三版の採譜者が、目安博士の五音をかなり意識しながら採譜したのではないかとということが一つの要因であると思われる。すなわち、現行の唱法は、五音にかなり忠実に唱っているが、ナヤシとクイ切は五線譜での表現が困難なため、この箇所だけ異なった印象を受けたようである。

ナヤシに関しては、T・十三版は、頂点音が短三度の上向であるのに対し、現行は、もう少しはなやかに表現しているという指摘があった。ちなみに津田法儀司のナヤシは

図—9

願  
我  
在  
道  
場

同音

Handwritten musical notation for the phrase '願我在道場' (I wish to be in the dojo). The notation includes pitch contours (arcs) and fingerings (numbers 1-6) for each character. The characters are arranged vertically. The word '道場' (dojo) is written in a larger, bold font. The word '同音' (same sound) is written in smaller characters to the right of '道場'.

### 散華

Musical score for '散華' (Sanwa). The score consists of five staves of musical notation. The first staff is the vocal line, and the following four staves are instrumental accompaniment. The lyrics are written below the vocal line. The notation includes various musical symbols such as clefs, notes, rests, and dynamic markings.

願 ン 我 ア  
道 場 ウ

T・十三版と同じであった。また、現行唱法の技法として、ナヤシに入る前に賓ユリをつけることもあるという指摘もあつた。

縁山流「散華」は、現在、増上寺式師が出仕する御忌会以外ではほとんど唱われることはなく、前述したように、ナヤシ自体が少しはなやかに唱っている場合が多いようである。「四智讃」の項でも述べたように、祖山でも、ソリがT・十三版より現在の方が多少、はなやかな傾向があるという指摘があつたが、このことから、声明が伝承者の口伝によつて受け継がれてきたことを強く印象づけるのである。

#### 第六回「敬礼伽陀」 第七回「我此道場」

これらの伽陀は、縁山流声明の中でも非常に高度な技法を要求される。特に句頭部分の出だしは、両伽陀ともに独特であり、五線譜、墨譜では到底、表現できない。従つて、この二回の研究会では、T・十三版、H・元版、現行をそ

れぞれ実唱し、現在の唱法と趣の違いを味わつた。

その際、八百谷師より、「我」の出について、主になる音（この場合は黄鐘）を決めて上下の音を振り分けてみるのも一つの方法ではないかという意見が出された。「此」についても同様なので、五線譜で表してみた。（図一〇）

図一〇



#### (三) むすび

昨年、本年と二回にわたり『礼讃声明音譜』を題材として研究発表をさせていただいた。また、平行した総合学術

大会においても実唱のテープを使用して、比較研究を発表させていただいた。

今回は、主に縁山流の声明を中心として、比較研究を行った訳だが、日常勤行や六時礼讃と違い、声明は東西各本山の式衆（式師）により伝承されている。大正時代の採譜状況を考慮しても、五線譜によって表現された声明を実唱して再現することは、おのずと困難な試みとなった。これは、声明独特の技法が、視覚的な要素、すなわち譜面による表現に限界があるという証明にもなった。

また、今回の発表にあたり、筆者は、先達の残された録音テープ、CDを種々聞いたが、声明そのものに、録音された時期と声明師により微妙な趣の相違があった。これは、声明が、一定の型を保持しつつ、伝承を担う声明師によって妙味が付加されていく性質に起因すると思われる。今回の研究では、計らずも声明が口伝によって伝承されてきたことを証明する結果となった。すなわち、五線譜によつてある程度平易に表現された声明でも、実際の修得にあたっては、縁山では式師会の稽古において研鑽しなくて

はならないのである。つまり、声明とは高度な技量と豊富な経験を持つ声明師が、口伝によって伝承してきたものであり、そのことにより連綿として高い芸術性を保つてきたのである。

最後に、講師として本研究に全面的にご協力いただいた東京教区城西組一行院 八百谷啓人師に深謝し本稿を閉じたい。

（注一）教化研究第二号「声明と音楽」

（一）小島伸方

（二）中村孝之

（三）渡辺俊雄

教化研究第三号

「縁山声明の芸術性」中村孝之

「縁山流伽陀の音楽論」小島伸方

「縁山流々錫杖」について」渡辺俊雄

# ホームページによる教化情報提供運営

## ①日本語によるホームページ

今岡達雄

### 一、研究目的と方法

当該研究の目的はインターネットのホームページを活用し、浄土宗の教義・教化情報の提供を行うことである。ここ数年來情報化が急速に進展し、パーソナルコンピュータやインターネット接続が各寺院・家庭に普及している。このような時代にあつては従来から行われている文書による布教伝道のみならず、電子化された情報による布教教化の方法論を確立することが必要であると考えられる。

このような状況に対応して本研究では、浄土宗教師、研究者、一般の人々に対して発信すべき情報を調査研究するとともに、平成十二年度に構築した浄土宗総合研究所のホームページの維持・更新等の運営を行った。以下、調査研究の概要を報告する。

### 二、研究経過の報告

#### ①情報化の進展について

平成十三年度の通信白書によれば、平成十二年末における我が国の十五歳以上七十九歳以下の個人におけるインターネット利用者数は四、七〇八万人と推計され、平成十一年末段階の推計値と比較すると七四・〇%増となっている。また、平成十七年（二〇〇五年）におけるインターネット利用者数は八、七二〇万人まで増加するものと推計されている。さらに、総務省が行っている通信利用動向調査によれば、平成十二年十一月におけるインターネットの世帯普及率は三四・〇%、事業所普及率は四四・八%、企業普及率では九五・八%となっており、企業のみならず家庭や一般寺院を含む中小事業所に於いてもインターネット利用

は急速に普及拡大している。

## ② インターネットの位置付けについて

インターネットの物的な仕組みは、統一されたコンピュータ相互間の情報伝達規約(TCP/IP)と、その規約によって結ばれた数千万台のサーバーと呼ばれるコンピュータとから構成されている。網の目のようにつながったサーバー(コンピュータ)に入力された情報は目的とするコンピュータに送られたり、誰もが取得可能な形態で各コンピュータに記憶される。伝達されたり記憶されたりするのは電子的な情報のみである。

ここで、私たちの日常生活を振り返り「情報のやりとり」だけで何が出来るかを考えてみよう。例えば広告や宣伝である。TV、新聞、雑誌で行われている広告や宣伝活動で私たちが受け取っているのは情報だけである。銀行での振込手続きを考えてみよう。ATMの前で行っているのは情報の入力だけであり、実際に現金を手に行っているわけではない。TVショッピングを行うとき実際に行うことは情報

を送るだけであり、その結果、商品という現物が届けられてくる。代引き宅配で品物が届けられる場合、あなたが支払った現金は宅配会社の口座に入金され、品物を売った会社には入金の情報が伝えられるだけで、あなたの支払った札が販売会社に運ばれるわけではない。このように、私たちの日常生活の大部分は情報を伝達することや情報を得ることで営まれており、その大部分はインターネットという情報伝達・記憶メディアによつての代行が可能であると考えられている。

現在、私たちの活動、日常生活、企業活動、医療福祉活動、文化活動、宗教活動すべての局面で電子的な情報伝達、情報記憶に置き換えられようとしている。その理由は、電子的な符号に置き換えられた情報は、高速で伝達可能、大量に処理が可能、必要とする人すべてに安価に複製することが可能であり、さらに加えてその技術進歩は当分の間は進展すると予測されるからである。

従来から行ってきた諸活動を情報という観点から再検討し、電子的メディアの中で再構築すること、これが現在イ

インターネット利用と称されている活動であると考えられる。つまり、電子的な情報利用という巨大な新世界が今までに作られようとしている。現在、宗教活動を行っている者として、そのインターネットという新世界に橋頭堡を築く必要がある。その活動を怠れば将来的に構築されると考えられる新世界の中での既成教団の影響力が発揮できず、インターネット内での活動を積極的に行う新たな宗教活動集団の影響力が大きくなる可能性が高い。このような観点から常にインターネットの動向をウォッチしておく事が必要である。

### ③ インターネットの利用形態について

急速に普及拡大しているインターネット利用であるがその中心は電子メールとホームページである。電子メールは、電話およびファクシミリに次ぐ第三の情報伝達手段である。その特徴は第一に非同時性、つまり電話のように同時性(情報交換を行う者同士が同一時刻に利用可能な状況にあること)が必要ではなく、情報交換を行う者はそれぞれ

の時間配分で利用できることにある。この点では会話よりも手紙に近いが、世界中どこでも瞬時に届けられることが特徴であり、同時にアクセスしていれば会話に近い情報交換も可能である。近年、携帯電話によるインターネット経由の電子メールが普及し、電子メール利用者は急増している。

もう一つのインターネット利用の中心がホームページである。ホームページとはハイパーテキスト伝送規約(Hypertext)という伝送方式に対応した情報記憶の集積である。ハイパーテキストとは、一つの文章の中に他の文章や写真・画像・映像・音声・音楽等の様々な情報を有機的に埋め込む事の出来る文章(テキスト)形式のことで、ハイパーテキスト記述言語(HTML)というコンピュータ言語で書かれている。情報の読み出しには読み出し用ソフトウェア(ブラウザ)によって行われる。HTMLはCERN(欧州合同素粒子原子核研究機構)のティム・バーナーズ・リー氏が所内の論文閲覧システムとして一九八九年三月に開発したシステムを基礎としている。このシステムは同氏に

よってワールド・ワイド・ウェブ（WWW）と名付けられた。また、読み出しソフトウェア（ブラウザ）はNCSSA（米国立スーパーコンピュータ応用研究所）のマーク・アンドリーセン氏を中心に一九九三年六月に開発された。WWWはこのブラウザの出現によって飛躍的に普及することになった。通常、種々の機関や個人は作成するWWW情報の一ページ目をホームページと呼んでいるが、このことからWWW情報そのものをホームページと呼ぶようになった。

WWWは文書閲覧システムとして始まったが、単に文章だけではなく電子化出来る情報ならば「どんな種類の情報」でも取り扱うことができ、それらの情報を「有機的に結びつけて表示したり情報の入力・伝送が出来ること、世界各地に置かれた数千万台のコンピュータを瞬時にアクセスし情報を得ることが出来るのが特徴である。また、開発された当時の目的は研究者間の共同利用であったが、このWWWは文書閲覧だけではなく様々な用途への可能性が提案され、一九九三年頃から米国でインターネットやWW

Wの商用利用が考えられるようになり、今日の隆盛に至っている。

#### ④ホームページの用途について

ホームページあるいはWWWはシステム固有の特徴を生かして様々な用途に使われているが、その用途は次の二種に大別することが出来る。

##### 第一、情報発信

##### 第二、コミュニケーション

第一の「情報発信」とは個人や企業・各種機関等が主体となってそれぞれの発信したい情報をホームページ上で公開することである。発信する情報は様々であるがこれも二種類考えられる。一つは、例えば広報（その存在、活動の方針、活動内容等を特定あるいは不特定の人々に広く知らしめること）、広告宣伝（企業の製品やサービスの報知、各種機関が行っているサービスの報知、選挙のための宣伝活動など）で、その直接的な目的は活動主体の活動の報知である。もう一つの情報発信は、ボランティア的な活動で多



くの人々が必要と考えていると思われる情報を主体的に発信する行為である。天気予報や交通情報などは多くの人が必要とする情報である。過去から蓄積されてきた情報の情報資料館や電子図書館のような機能はインターネット上ではアーカイブ（書庫）と言われている。情報作成に多大な費用が必要な場合には利用者から情報利用料を徴収する場合もあり、このような場合には第二の商用情報提供サービスと同様なものと位置づけされる。

ホームページの用途の第二は「コミュニケーション」である。これはホームページ上で双方向の情報交換を行うものである。例えばホームページ上に置かれた掲示板はその典型的な例である。ホームページを経由したコミュニケーションは現在もつとも注目されているところで、特に企業活動のツールとして重要性が高まっている。例えばBtoBとはビジネス・ツー・ビジネスを意味し、企業間の製品や部品の仕入れ・受発注・決済等の企業間取引にWWWを応用して行うものである。これまで、BtoBには汎用コンピュータを使用した特別なオンラインシステムを構築し

ていたが、最近ではインターネットやWWWを利用して安価で効率的なシステム構築が行われている。BtoCとはビジネス・ツー・コンシューマであり、消費者個人と企業間のコミュニケーションシステムである。その用途は通信販売が中心である。特に販売する製品やサービスの内容によって実に様々な取引が行われるようになってきた。この他でこれと似たものにネットオークションがある。これはCtoCともいえるべきものであるがこれもホームページのコミュニケーション機能を利用したものである。

以上のようにホームページやWWWの利用は「情報発信」のように発信主体からの一方的な情報の公開を行う方法と、「コミュニケーション」のような双方向の情報交換を行う利用法であるがある。その利用方法はホームページを作成し運営していく機関の性格（個人、営利企業、公益法人）によって内容は異なるし、どのような内容のホームページか、誰を対象にしたホームページかによって異なるものであるし、ホームページの維持・運営の方法も大きく異なってくる。

### ⑤ 宗教教団・一般寺院のホームページ利用について

宗教教団がホームページを利用して行えること、一般寺院がホームページを利用して行えることにはどのようなことがあるのだろうか。このテーマは今後の重要な研究課題である。まず「情報発信」については変数が三つある。つまり誰が、どのような対象に、いかなる情報を発信すべきかを考えてみる必要がある。第一の変数「誰が」とは情報の発信主体であり、浄土宗という教団、教団の内部組織（総合研究所、教学院）、本山寺院、一般寺院がその対象となる。第二の変数「どのような対象」とは、教団組織内職員向けなのか、教師向けなのか、家庭・寺族を含んだ関連者向けなのか、教学研究向けなのか、檀信徒向けなのか、不特定の人々なのかによって、発信すべき内容は異なると考えられる。第三の変数「いかなる情報」とは、教団や寺院の存在を示すパンフレットのような情報なのか、教団や寺院の方針や運営方法・運営結果の開示なのか、学的情報なのか、布教的情報なのか、法的情報なのか、

通仏教的情報なのか、仏教習俗的情報なのかといった情報の内容の問題である。

「コミュニケーション」利用についても同様に変数が三つある。つまり誰が、どのような対象と、いかなる情報を交換するかである。ホームページを経由して教団や一般寺院が、教師や檀信徒や一般人を相手に、相談に乗ったり、布教を行ったり、墓参・参詣をすることが本当に可能なのであろうか。こんごの研究課題である。

### 三、今後の研究計画

以上、平成十三年度の研究経過を報告したが、これまでの研究により今後の調査研究の方向性が明らかになってきた。本調査研究は継続研究であり、当面の来年度以降の目標を次の三点とした。

- ① 既設ホームページの運用
- ② 教団ホームページの可能性
- ③ 一般寺院のホームページのあり方

## ホームページによる教化情報提供運営

### ②英語によるホームページ

戸松 義晴

Jonathon Watts

#### (1) 研究目的と方法

日本語のホームページに対応した英文を掲載し、法然上人の教え・浄土宗総合研究所の存在および研究活動をインターネットをとおして世界に知らせることにある。特に世界の仏教・浄土教研究者との研究・意見交換を目的とするものである。なぜならば、世界の教育機関におけるインターネットの重要性は日ごとに増大し、将来影響力のある学者・研究者・学生に法然・浄土宗の情報を提供できる。また、世界各地の研究者との交流・意見交換の容易さにより、適宜議論して内容の向上をはかることを目的とする。浄土宗英語ホームページとの役割分担を考慮して、当該

ホームページは日本語ホームページの翻訳(概要・研究紹介・出版物・公開行事・布教情報・浄土宗リンク・研究機関リンク)だけでなく、Honen Shonin, Pure Land Buddhism, Jodo Shu Studies という項目を新たに加え、法然の生涯・教え・著作・浄土経典・浄土教の相承・浄土宗史・儀礼・浄土宗用語集・国際学会発表論文等を一五〇ページにわたって詳細に解説し、宗教・仏教・浄土教研究者の学問的な要求に対応できる内容としたものである。

#### (2) 研究経過の報告

平成13年度は、Jodo Shu Studies という新たな項目に浄土

JSRI  
Jodo Shu Research Institute 浄土宗総合研究所

THE JODO SHU RESEARCH INSTITUTE  
COMPREHENSIVE STUDIES IN PURE LAND BUDDHISM

Welcome to the Jodo Shu Research Institute homepage. Inside you will find in depth history, analysis and translations of Pure Land Buddhist resources related to Japan's first independent Pure Land denomination, Jodo Shu, founded by Honen Shonin in 1175. We have divided the materials into multiple sub-headings in order to allow for varying levels of interest, to those general readers wanting a simple overview, to students and scholars looking for detailed treatment of points and access to further sources. In addition, we have included information about our ongoing work and projects at the Research Institute.

A Statement Concerning the Terrorist Attacks on the U.S.

HONEN SHONIN  
his  
Teachings  
and  
Writings

PURE LAND BUDDHISM  
Substrata  
and  
Lineage

JODO SHU STUDIES  
(in Jogyo, Arakawa, Gomonaka, etc.)

14<sup>th</sup> (VI) International Conference "Gateways of Power: 21st Century Religion and Ritual in China, Tibet, and Japan" (March 2001)  
Translating Buddhist Traditions: Japanese Pure Land Buddhism

14<sup>th</sup> (VII) International Conference on the Lotus Sutra and Pure Land (July 2001)  
The Lotus Land and other works: the True World and a withdrawal of worldly desires: Methods of Teaching

JODO SHU  
RESEARCH INSTITUTE OF BUDDHISM


RELEASED BY: JODO SHU  
Jokes of Tenkyo  
Honen's Jogyo  
Jodo Shu Daily Life and Customs

RESEARCH ARTICLES  
NEW BOOK FROM JODO SHU PRESS  
An excellent book: [www.jsri.org](#)

**A RAFT FROM THE OTHER SHORE**  
RESEARCH ARTICLE

CONTACT  
Jodo Shu Research Institute  
Nishiku 5-10-14  
Shinjyuku-ku, Tokyo  
Japan 100-0011  
Tel: 81-3-5472-9571  
Fax: 81-3-5455-4033

E-mail  
copyright (c) by 1999-2002 Jodo Shu Research Institute  
Last Update: March 2002

 Jodo Ring Member Site  
This Jodo Ring site is managed by Jodo Ring  
Want to join the Jodo Ring?  
 Jodo Ring Member Site

浄土宗総合研究所 日本語

「宗史・儀礼、および学会の見出しをつけ、新しい研究成果を逐次公開することによって、ホームページの閲覧者にとって常に意義のあるホームページづくりを目指した。具体的には、

(1)一九九九年十一月に米国ロサンジェルス仏教大学・北米浄土宗別院で開催された仏教大学第二回国際会議「Footsteps to Enlightenment - Zen, Nenbutsu, and the Dharmal」

(2)二〇〇一年三月にサンフランシスコ大学で開催された国際会議、

(3)二〇〇一年七月の国際法華経学会での専任研究員の発表原稿を公開した。

また、対社会的メッセージとして、二〇〇一年九月の米国同時多発テロに対する宗務総長メッセージをオンラインで公開した。

### (3) 今後の研究計画

浄土宗の英語文献の少なさ(真宗 約二三〇点、浄土宗 約二十三点)が指摘されている。ネット上で Jodo 及び Pure Land を検索する (Shin) と表示され、95%以上が真宗関連の研究成果・研究機関・寺院のホームページである。これを改善するために、開教区寺院及び国内寺院による英文ホームページの検索機関への登録を推進する。

今後 Link 集を充実させ、他の研究機関との交流をとおして内容の充実をはかり。また、法然の著作、例えば『一四五箇条問答』・御法語・消息などを『法然上人のご法語』(研究所編)を定本として英訳し、順次公開して、意見交換をする。

ホームページに掲載した英訳を集めて Jodo Shu Press から出版し、

世界最大の AMAZON.COM での書籍の販売——情報提供の効率性を考慮して、海外開教・国際化への対応とする。

# 葬祭仏教研究

## — 葬儀の実態的研究

細田 芳光

「実態としての日本仏教（浄土宗）である葬祭仏教を過去・現在にわたって総合的に調査・研究し、その望ましいありようについて提言し、葬祭を踏まえた新教学が樹立できよう今日の視野で基礎研究を進める」という趣旨で行われた「葬祭仏教の総合的研究」（平成八年三月終了、同九年六月成果報告書を刊行）、またその第二次研究である「戒名—その問題点と課題」（平成十三年三月終了）に続き、平成十三年度からは時代的変遷が激しく地域的差異の大きい「葬儀」について、アンケート調査や現地調査を通して、葬送習俗および葬送儀礼の両面から実態的研究を行うことになった。こうした調査は、一宗の研究機関としては過去にあまり行われた例がなく、本宗における葬儀の実態につ

いての貴重な基礎資料になると思われる。本プロジェクトでは、葬儀における習俗と儀礼について複合的なアプローチを行うため、旧来の「葬祭仏教研究班」に「教化儀礼班」が合流して合同で調査・研究を進めることになった。

平成十三年度はまず基礎研究として、調査地区を限定し、アンケートによる調査・分析を実施した。その対象としては、都市部、農村部、漁村部といくつかのサンプルが集約されている静岡教区を取り上げ、同教区内全寺院宛に郵送によるアンケート調査を行った。その集計・分析結果については、本書別項「研究ノート」74ページに「葬祭に関するアンケート」静岡教区アンケート第一次分析結果報告として掲載した。

研究会等の活動と研究班メンバーは以下の通りである。

### 研究活動

- ・十三年四月十三日 研究会「今年度の研究活動について」
- ・七月二日 研究会「アンケート調査について」
- ・七月九日 研究会「アンケート調査方法について」
- ・七月十九日 研究会「アンケート調査票について」
- ・七月三十一日 研究会「アンケート調査票について」
- ・八月六日 研究会「アンケート調査票について」
- ・九月三日 研究会「アンケート調査票について」
- ・九月十八日 研究会「アンケート調査票について」
- ・九月二十七日 研究会「アンケート調査票について」
- ・十月二日 研究会「アンケート調査について」
- ・十月十五日 静岡教区全寺院宛「アンケート調査」発送
- ・十月―十一月 調査票回収・集計
- ・十二月三日 研究会「アンケート調査回収状況について」
- ・十四年一月二十八日 研究会「アンケート調査集計状況について」

・二月十八日 研究会「アンケート調査集計状況について」  
・二月二十五日 研究会「アンケート調査集計状況について」

・二月二十八日 研究会「アンケート調査報告について、十四年度研究計画について」（於・京都宗務庁）

・三月二十七日 研究会「アンケート調査報告について」

### 研究班メンバー

研究代表 伊藤唯真（客員教授）

研究副代表 福西賢兆（主任研究員）

研究主務 熊井康雄（専任研究員）

細田芳光（同）

研究スタッフ 今岡達雄（専任研究員）

武田道生（同）

大蔵健司（研究員）

坂上典翁（同）

佐藤良文（同）

西城宗隆（囑託研究員）

鷲見定信（同）

# 日常勤行式の現代語化に関する基礎研究

福西賢兆

はじめに

『浄土宗日常勤行式』は、音読を基本として古来から行われてきた。別けても主要経典である『浄土三部経』は、経本に四声点と一・二点、返り点を付したものが多く、それを音訓両用で読誦してきたと思うが、経典の質量を考えると音読中心で実施されたのである。

## 一、江戸末期・明治

江戸末期に三部経の校訂者として名高い大雲が、嘉永五年（一八五二）に出版した三部経の巻末に『刻訓点清濁三部経凡例』が付されているから、音訓両用の読誦を奨めていたことが判る。

大雲は仏教擁護に活躍した学僧で、『啓蒙随録』等を著

作して大いに仏教啓蒙運動を行い、訓読を推進した第一人者であるから、当時の現代語化経典を提唱されたといつてよい。

## 二、明治・大正・昭和

1. この時代に仏教啓蒙運動を行ったのは、山崎弁栄（一八五九—一九二〇）である。弁栄は仏陀禪那と号し、如来光明主義を主唱し、『如来光明礼拝式』さらに『如来光明礼拝儀』（折本）は二〇万部を刊行したという。

2. 椎尾弁匡（一八七六—一九七二）大本山増上寺八二世、近代仏教界第一の推進者で仏教学の権威である。大正年間「共生運動」「共生」を提唱した。「おつとめ」は訓読を中心とし、音楽を取り入れている。



3. 土屋観道（一八八七—一九六九）真生主義を提唱し、「真生」を刊行した。「真生礼拝儀」は、訓読を中心としたおつとめである。

4. 友松円諦（一八九五—一九七三）真理運動を提唱し、「真理」を刊行した。おつとめ、「仏教勤行式」は、漢字に分りやすい振仮名をつけた現代語訳である。

### 三、現代語訳勤行式

この研究を実施するよう宗議会に提言したのは、奈良の桂大瀛である。かれの自坊で用いている勤行式を見ると、友松師の「仏教勤行式」に酷似していた。友松円諦師の薫陶を学生時代に受けたそうである。

#### 1 研究会

第一回研究会は、平成十三年六月十八日に三康文化研究所研究室で行い、石上善應、福西賢兆、佐山哲郎、山田隆昭が出席し、研究代表に石上所長、主務に福西、研究スタッフに佐山、山田両師をお願いし、現代語訳は朗読用として一般化したい。十三年度中に試作を影像化し関係者に提供

することとした。

#### 2 現代語訳勤行式の収録

導師 西城宗隆 研究員

維那 廣本榮康 囑託研究員

式衆 坂上典翁 研究員

脚本 佐山哲郎 囑託研究員

進行 福西賢兆 主任研究員

制作 石上善應 所長

音楽、ナレーション、照明等は専門家に依頼し、ビデオテープによる収録を行った。



研  
究  
ノ  
ト

# 「葬祭に関するアンケート」

## 静岡教区アンケート第一次分析結果報告

### 葬祭仏教研究班

#### 静岡教区葬儀の実態調査アンケートの目的

今回のアンケートに関して、内容の分析に入る前に、アンケートの対象地域選定と目的を明らかにしておかなければならない。ひとつは、現代の葬儀の変化を知るために、なぜ静岡教区を対象としたのか、という問題である。もちろんどの教区にもそれぞれの地域のもつ多様性は、当然考えられるし、それを否定するものではない。しかしそうしたことを考慮しても、静岡教区は、適切だと考えられる要素をもっている。静岡教区は東西に長く、また山間農村部が北部に広がり、南部は海に面している。この教区は関東と関西の、地域ばかりか文化の中間に位置している。産業形態も農業・漁業・観光業・工業他と幅広い。また都市の

規模も、静岡市・浜松市といった大都市から農山村まで多彩である。こうした種々の要素から、現在の都市化・過疎過密化などによって生じてきている葬儀に関するさまざまな問題を多面的に捉えるのに適した教区と考えた。

ふたつめは、アンケートの目的である。このアンケートは、回答の分析だけを目的としているのではない。この回答の分析によって得られた情報をもとにした現地の実態調査や聞き取りを行うことも予定している。つまり、葬儀とその変容に関する教区の全体像を把握し、できれば、他教区との比較をも視野に入れて、日本の葬儀の各地域における比較とその特徴などとそれらの変容を明らかにすることが、本研究班の最終的な目標となっている。

## 第一次分析の報告

以上のことから、今回の報告は集計を終えた回答に関する単純集計分析を中心に行うことにする。より詳細な各項目間のクロス集計とその分析に関しては別の機会に譲りたい。今回の分析コメントは、各大項目とそのなかの質問への回答結果のグラフなどを用いた集計結果の後に、一括して掲載してある。

## 以下アンケート質問項目及び集計結果記載

平成十三年

・十月十五日 静岡教区全寺院宛「アンケート調査」発送

・十月—十一月 調査票回収・集計

貴寺院の地元（所在地近辺）で行っている

檀信徒（在家）の葬儀についてお尋ねします。

★設問中に使用している儀式の概念は次のようにご理解ください。

①枕 経 没後（納棺までの間）に死者の枕元で勤める法

要

②納棺式 死者を柩に納める際に勤める法要

③通 夜 葬儀式（又は迎接式）前夜に勤める法要

④迎接式 葬儀式当日に僧侶が自宅に向向いて勤める法要

（いわゆる迎え葬）

⑤葬儀式 寺院・自宅・斎場等で行う葬儀式法要

⑥出棺式 葬儀式（又は告別式）後に火葬場へ向かう場合

の出棺回向

⑦葬 列 迎接式・葬儀式等の後、出棺に際して一定の序

列を作って行う行列

⑧荼毘式 火葬場で勤める炉前回向

⑨収骨式 遺骨を骨壺に納める際に勤める回向

⑩灰葬式 火葬場から帰った際に勤める遺骨回向

⑪埋葬式 （当日） 葬儀式当日に遺骨（遺体）を埋葬する

際に勤める墓地回向

⑫埋葬式 （後日） 葬儀式後に日を改めて（七七日等）埋

葬する場合の墓地回向

⑬中陰法要 初日忌から七七日忌の法要（繰り上げ初七

日等を含む）

① 死亡から葬儀式当日までの葬送儀礼全体についてお尋ねします。

① 一般的な葬儀の場合、儀式の流れはどのようですか。例を参考にして番号でお答えください。

枕経、通夜を勤め、葬儀式当日は自宅へ出向いて迎接式を行う。出棺後（霊柩車まで）葬列を組み、火葬場で荼毘式のみ勤める（収骨式は勤めない）。遺骨を菩提寺本堂に安置して葬儀式を勤め、引き続き墓地にて埋葬式を行うという場合を想定すると、儀式の流れは

枕経→通夜→迎接式→葬列→荼毘式→葬儀式→埋葬式(土葬)となります。

これを番号で回答すると次のようになります。

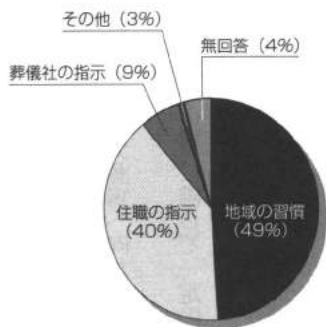
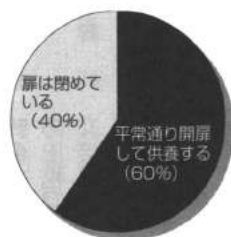
⑩ 回答例 ① → ③ → ④ → ⑦ → ⑧ → ⑤ → ⑩

上記の枠内の番号でお答え下さい

質問——— 回答省略

② 葬儀期間、喪家の仏壇はどのようになっていますか。該当する番号に「」○印をつけてください

- ① 平常どおり開扉して供養する  
 ② 扉は閉めている  
 ③ その理由をお書きください。④該当する番号に「」○印をつけてください  
 ① 地域の慣習 ② 住職の指示  
 ③ 葬儀社の指示 ④ その他



質問 1-2

①開ける	58
②閉める	38
計	96

質問 1-3

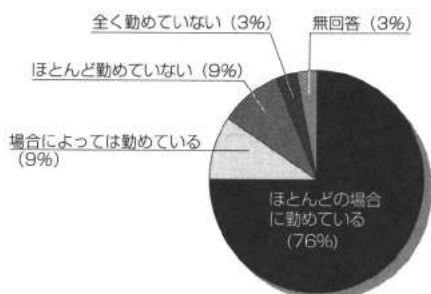
①地域の慣習	47
②住職の指示	38
③葬儀社の指示	6
④その他	1
無回答	4
計	96

質問 2-2

①地域習慣	48
②依頼による	9
③住職の考え	33
④その他	1
無回答	5
計	96

質問 2-1

①ほとんど勤める	72
②場合によって	9
③勤めていない	9
④全く勤めない	3
無回答	3
計	96



- ② 《2》 枕経についてお尋ねします。  
 (1) 枕経を勤めますか。(該当する番号に「1」に○印をつけてください)  
 ① ほとんどの場合に勤めている  
 ② 場合によっては勤めている  
 ③ ほとんど勤めていない  
 ④ 全く勤めていない  
 (2) その理由をお聞かせください。(該当する番号に「1」に○印をつけてください)  
 ① 地域の慣習  
 ② 依頼があった場合に勤める  
 ③ 住職の考え方  
 ④ その他

- ③ (3) — 2 変わったのはなぜだと思いますか。(該当する番号すべてに○印をつけてください)  
 ① 檀信徒の世代交代  
 ② 住職の世代交代

質問 2-3

①変わっていない	81
②多くなった	5
③少なくなった	5
無回答	5
計	96

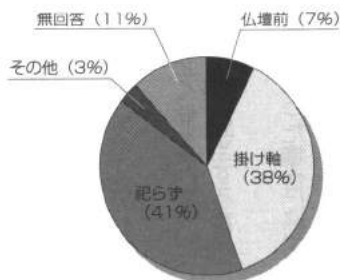
質問 2-3-1

①平成以降	4
②昭和 50 以降	4
③昭和 3・40 年	0
④昭和 20 以降	2
無回答	86
計	96

- ③ (3) 枕経を勤める頻度は以前と比べて変わりましたか。(該当する番号に「1」に○印をつけてください)  
 ① とくに変わっていない  
 ② 勤めることが多くなった  
 ③ 勤めることが少なくなった  
 ④ ③ を選択した方は次の質問にもお答えください  
 (3) — 1 変わったのはいつ頃からですか。(該当する番号に「1」に○印をつけてください)  
 ① 平成以後 (バブル崩壊後)  
 ② 昭和 50 年代以後 (オイルショック後)  
 ③ 昭和 30〜40 年代 (オイルショック前)  
 ④ 昭和 20 年代 (太平洋戦争後)

質問 2-4

①仏壇前	7
②掛け軸	36
③祀らず	39
④その他	3
無回答	11
計	96



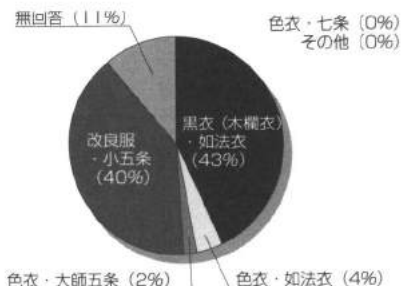
質問 2-3-2

①檀信世代交代	5
②住職世代交代	4
③都市化	4
④葬儀社進出	5
⑤人口増加	1
⑥人口減少	0
⑦その他	1

- ③ 地域の都市化 ④ 葬儀社の進出 ⑤ 人口の増加  
 ⑥ 人口の減少 ⑦ その他 )  
 (4) 枕経の本尊はどのようにしていますか。(該当する番号一つに○印をつけてください)  
 ① 仏壇前で行う  
 ② 来迎仏や名号等の掛け軸類を用いる  
 ③ 本尊はとくに祀らない ④ その他 )

質問 2-6

①黒・如	41
②色・如	4
③色・大師衣	2
④色・七条	0
⑤改良・小五	38
⑥その他	0
無回答	11
計	96



質問 2-5

①地域習慣	39
②住職指示	34
③葬儀社指示	5
④その他	5
無回答	13
計	96

- (5) その理由をお聞かせください。(該当する番号一つに○印をつけてください)  
 ① 地域の慣習 ② 住職の指示 ③ 葬儀社の指示  
 ④ その他 )  
 (6) 枕経の衣帯は何を 사용합니다か。(該当する番号一つに○印をつけてください)  
 ① 黒衣(木欄衣)・如法衣 ② 色衣・如法衣  
 ③ 色衣・大師五条 ④ 色衣・七条 ⑤ 改良服・小五条 ⑥ その他 )



(7) 次の中から枕経で行っているものをすべて挙げてください。(該当する番号すべてに○印をつけてください)

- ① 広懺悔(音読・訓読) ② 遺教経(音読・訓読)  
 ③ 報恩偈 ④ 剃髮偈 ⑤ 剃度作法  
 ⑥ 授与三帰三竟 ⑦ 授与戒名  
 ⑧ 発願文(音読・訓読) ⑨ 阿弥陀経 ⑩ 四誓偈  
 ⑪ 歎仏頌 ⑫ 光明歎徳章(音読・訓読)  
 ⑬ 讚重偈 ⑭ 真身観文 ⑮ 納棺偈 ⑯ 詠唱  
 ⑰ 法話 ⑱ その他( )

質問 2-7

① 広懺悔	48
② 遺教経	2
③ 報恩偈	36
④ 剃髮偈	65
⑤ 剃度作法	68
⑥ 授与三帰三竟	63
⑦ 授与戒名	23
⑧ 発願文	67
⑨ 阿弥陀経	4
⑩ 四誓偈	51
⑪ 歎仏頌	10
⑫ 光明歎徳章	3
⑬ 讚重偈	0
⑭ 真身観文	18
⑮ 納棺偈	9
⑯ 詠唱	3
⑰ 法話	43
⑱ その他	11

③ 納棺式についてお尋ねします。

(1) 納棺式を勤めますか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)

- ① ほとんどの場合に勤める ② 場合によっては勤める  
 ③ ほとんど勤めない ④ 全く勤めていない

(2) その理由をお聞かせください。(該当する番号に一つに○印をつけてください)

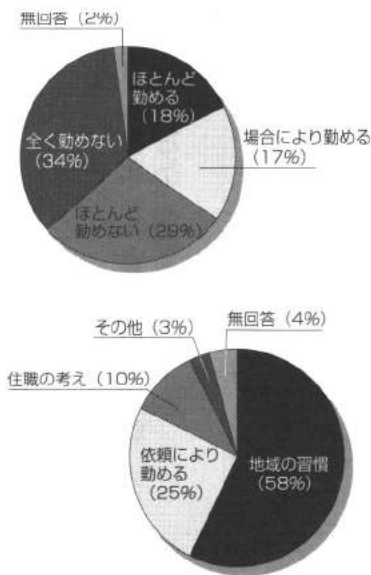
- ① 地域の慣習 ② 依頼があった場合に勤める  
 ③ 住職の考え方 ④ その他( )

質問 3-1

① ほとんど勤める	17
② 場合により勤める	16
③ ほとんど勤めない	28
④ 全く勤めない	33
無回答	2
計	96

質問 3-2

① 地域の慣習	55
② 依頼により勤める	24
③ 住職の考え	10
④ その他	3
無回答	4
計	96



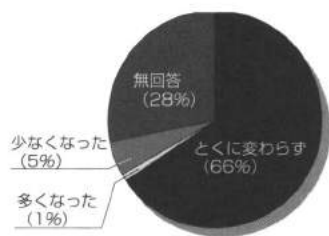
(3) 納棺式を勤める頻度は以前と比べて変わりましたか。(該当する番号に○をつけてください)

- ① とくに変わっていない 質問(4)にお進み下さい  
 ② 勤めることが多くなった  
 ③ 勤めることが少なくなった

② ③ を選択した方は次の質問にもお答えください

質問 3-3

①とくに変わらず	63
②多くなった	1
③少なくなった	5
無回答	27
計	96



(3) ー1 変わったのはいつ頃からですか。(該当する番号に○をつけてください)

- ① 平成以後(バブル崩壊後)  
 ② 昭和50年代以後(オイルシヨック後)  
 ③ 昭和30~40年代(オイルシヨック前)  
 ④ 昭和20年代(太平洋戦争後)

(3) ー2 変わったのはなぜだと思いますか。(該当する番号すべてに○をつけてください)

- ① 檀信徒の世代交代 ② 住職の世代交代  
 ③ 地域の都市化 ④ 葬儀社の進出 ⑤ 人口の増加  
 ⑥ 人口の減少 ⑦ その他 ( )

質問 3-3-1

①平成以降	2
②昭和50以降	0
③昭和3・40年	1
④昭和20以降	0
無回答	93
計	96

質問 3-3-2

①檀信世代交代	3
②住職世代交代	0
③都市化	1
④葬儀社進出	3
⑤人口増加	0
⑥人口減少	0
⑦その他	0

(4) 納棺式の本尊はどのようにしていますか。(該当する番号に○をつけてください)

- ① 仏壇前で行う  
 ② 来迎仏や名号等の掛け軸類を用いる  
 ③ 本尊はとくに祀らない ④ その他 ( )

質問 3-4

①仏壇前	7
②掛け軸	21
③祀らず	28
④その他	5
無回答	35
計	96

(5) その理由をお聞かせください。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

- ① 地域の慣習 ② 住職の指示 ③ 葬儀社の指示  
④ その他 )

質問 3-5

①地域習慣	33
②住職指示	21
③葬儀社指示	4
④その他	2
無回答	36
計	96

質問 3-6

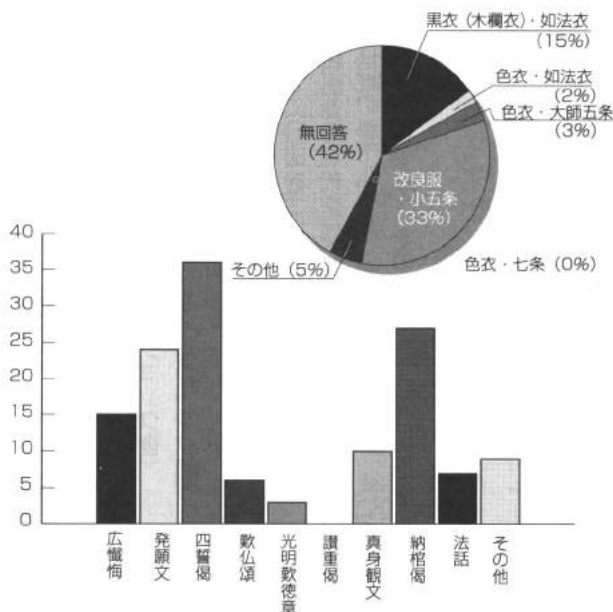
①黒・如	14
②色・如	2
③色・大師衣	3
④色・七条	0
⑤改良・小五	32
⑥その他	5
無回答	40
計	96

(6) 納棺式の衣帯は何を 사용합니다か。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

- ① 黒衣(木欄衣)・如法衣  
② 色衣・如法衣 ③ 色衣・大師五条 ④ 色衣・七条  
⑤ 改良服・小五条 ⑥ その他 )  
(7) 次の中から納棺式で行っているものをすべて挙げてください。(該当する番号すべてに○印をつけてください)
- ① 広懺悔(音読・訓読) ② 発願文(音読・訓読)  
③ 四誓偈 ④ 歎仏頌 ⑤ 光明歎徳章  
⑥ 讚重偈 ⑦ 真身観文 ⑧ 納棺偈  
⑨ 法話 ⑩ その他 )

質問 3-7

①広懺悔	15
②発願文	24
③四誓偈	34
④歎仏頌	6
⑤光明歎徳章	3
⑥讚重偈	0
⑦真身観文	10
⑧納棺偈	27
⑨法話	7
⑩その他	9



《4》通夜についてお尋ねします。

(1) 通夜はどこで行うことが多いですか。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

① 自宅 ② 集会所 ③ 斎場  
④ 本堂以外の寺の施設 ⑤ 本堂 ⑥ その他( )  
(2) 通夜を行う場所は以前と比べて変わりましたか。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

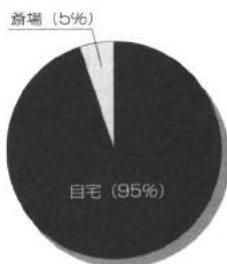
- ① とくに変わっていない 質問(3)にお進み下さい  
② 勤めることが多くなった  
③ 勤めることが少なくなった  
② ③ を選択した方は次の質問にもお答えください

質問 4-2

①変わっていない	79
②多くなった	5
③少なくなった	5
④無回答	7
計	96

質問 4-1

①自宅	91
②集会所	0
③斎場	5
④寺の施設	0
⑤本堂	0
⑥その他	0
計	96



(2) ー1変わったのはいつ頃からですか。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

① 平成以後(バブル崩壊後)  
② 昭和50年代以後(オイルショック後)  
③ 昭和30〜40年代(オイルショック前)  
④ 昭和20年代(太平洋戦争後)  
(2) ー2変わったのはなぜだと思えますか。(該当する番号すべてに○印をつけてください)

- ① 檀信徒の世代交代 ② 住職の世代交代  
③ 地域の都市化 ④ 葬儀社の進出 ⑤ 人口の増加  
⑥ 人口の減少 ⑦ その他( )

質問 4-2-1

①平成以降	10
②昭和50以降	2
③昭和3・40年	1
④昭和20以降	0
無回答	83
計	96

質問 4-2-2

①檀信世代交代	5
②住職世代交代	1
③都市化	4
④葬儀社進出	11
⑤人口増加	0
⑥人口減少	0
⑦その他	2

(3) 通夜の本尊はどのようにしていますか。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

- ① 来迎仏や名号等の掛け軸類を用いる  
② 本尊はとくに祀らない ③ その他( )

(4) その理由をお聞かせください。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

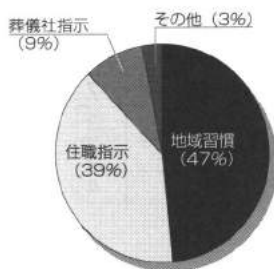
- ① 地域の慣習 ② 住職の指示  
 ③ 葬儀社の指示 ④ その他 )

質問 4-3

①掛け軸	45
②祀らず	48
③その他	3
無回答	0
計	96

質問 4-4

①地域習慣	45
②住職指示	39
③葬儀社指示	9
④その他	3
無回答	0
計	96



(5) 通夜はどのような形式で行っていますか。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

- ① 親族・近隣が中心  
 ② 告別式と同じく、一般会葬を受ける  
 ③ その他 )

(6) 通夜の形式は以前と比べて変わりましたか。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

- ① とくに変わっていない 質問(7)にお進み下さい  
 ② 一般会葬を受ける場合が増えた  
 ③ その他 )

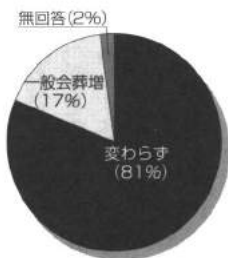
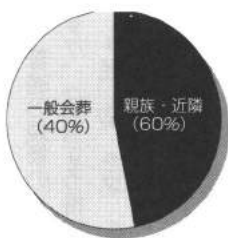
② ③ を選択した方は下記の質問にもお答えください

質問 4-5

①親族・近隣	45
②一般会葬	51
③その他	0
無回答	0
計	96

質問 4-6

①変わらず	78
②一般会葬増	16
③その他	2
無回答	0
計	96



(6) 1変ったのはいつ頃からですか。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

- ① 平成以後 (バブル崩壊後)  
 ② 昭和50年代以後 (オイルショック後)  
 ③ 昭和30～40年代 (オイルショック前)  
 ④ 昭和20年代 (太平洋戦争後)  
 (6) 1変ったのはなぜだと思いますか。(該当する番号すべてに○印をつけてください)

- ① 檀信徒の世代交代 ② 住職の世代交代  
 ③ 地域の都市化 ④ 葬儀社の進出 ⑤ 人口の増加  
 ⑥ 人口の減少 ⑦ その他 ( )

質問 4-6-1

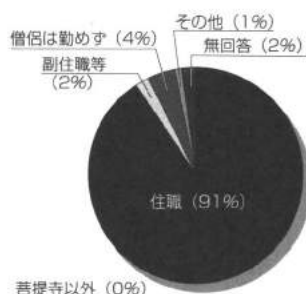
①平成以降	7
②昭和50以降	8
③昭和3・40年	2
④昭和20以降	1
無回答	78
計	96

質問 4-6-2

①檀信世代交代	2
②住職世代交代	0
③都市化	10
④葬儀社進出	7
⑤人口増加	3
⑥人口減少	0
⑦その他	4

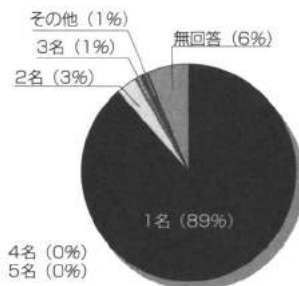
(7) 通夜の導師は主に誰が勤めますか。(該当する番号に二つに○印をつけてください)

- ① 住職が勤める  
 ② 住職は勤めずに副住職などの菩提寺の僧侶が勤める



質問 4-7

①住職	87
②副住職等	2
③菩提寺以外	0
④僧侶は勤めず	4
⑤その他	1
無回答	2
計	96



質問 4-8

①1名	85
②2名	3
③3名	1
④4名	0
⑤5名	0
⑥その他	1
無回答	6
計	96

- ③ 菩提寺以外の僧侶が勤める  
 ④ 僧侶は勤めない (在家のみで勤める)  
 ⑤ その他 ( )  
 (8) 普通の規模の通夜は何名の僧侶で勤めることが多いですか。(該当する番号に二つに○印をつけてください)  
 ① 1名 ② 2名 ③ 3名 ④ 4名 ⑤ 5名  
 ⑥ その他 ( )

(9) 僧侶の人数は以前と比べて変わりましたか。(該当する番号に○印をつけてください)

- ① とくに変わっていない 質問(10)にお進み下さい  
 ② 僧侶の人数が増えた  
 ③ 僧侶の人数が減った  
 ④ その他 )

② ③ ④ を選択した方は下記の質問にもお答えください

(9) ー1 変わったのはいつ頃からですか。(該当する番号に○印をつけてください)

- ① 平成以後 (バブル崩壊後)  
 ② 昭和50年代以後 (オイルショック後)  
 ③ 昭和30～40年代 (オイルショック前)  
 ④ 昭和20年代 (太平洋戦争後)

#### 質問 4-9

①変わらず	89
②増えた	0
③減った	2
④その他	0
無回答	5
計	96

#### 質問 4-2-1

①平成以降	4
②昭和50以降	0
③昭和3・40年	0
④昭和20以降	0
無回答	92
計	96

(9) ー2 変わったのはなぜだと思いますか。(該当する番号すべてに○印をつけてください)

- ① 檀信徒の世代交代 ② 住職の世代交代  
 ③ 地域の都市化 ④ 葬儀社の進出 ⑤ 人口の増加  
 ⑥ 人口の減少 ⑦ その他 )

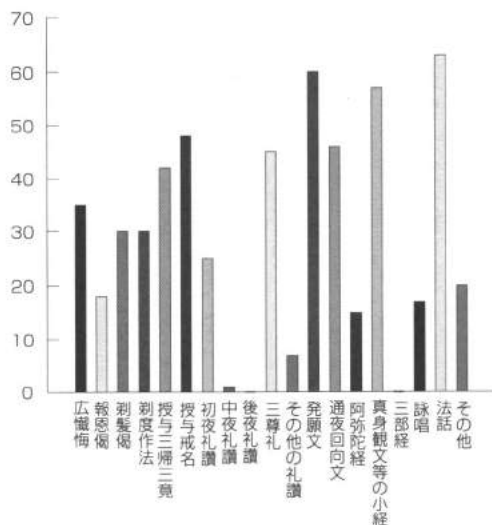
#### 質問 4-9-2

①檀信徒世代交代	1
②住職世代交代	0
③都市化	0
④葬儀社進出	0
⑤人口増加	0
⑥人口減少	0
⑦その他	0

(10) 次の中から通夜で行っているものをすべて挙げてください。(該当する番号すべてに○印をつけてください)

- ① 広懺悔(音読・訓読) ② 報恩偈 ③ 剃髪偈  
 ④ 剃度作法 ⑤ 授与三帰三竟 ⑥ 授与戒名  
 ⑦ 初夜礼讃 ⑧ 中夜礼讃 ⑨ 後夜礼讃  
 ⑩ 三尊礼 ⑪ その他の礼讃 ⑫ 発願文(音読・訓読)  
 ⑬ 通夜回向文 ⑭ 阿弥陀経 ⑮ 真身観文等の小経  
 ⑯ 三部経 ⑰ 詠唱 ⑱ 法話  
 ⑲ その他 )

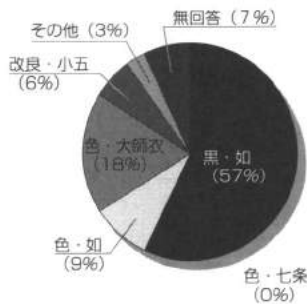
質問 4-10



①広懺悔	35
②報恩偈	18
③剃髪偈	30
④剃度作法	30
⑤授与三帰三竟	42
⑥授与戒名	48
⑦初夜礼讃	25
⑧中夜礼讃	1
⑨後夜礼讃	0
⑩三尊礼	45
⑪その他の礼讃	7
⑫発願文	60
⑬通夜回向文	46
⑭阿弥陀経	15
⑮真身観文等の小経	57
⑯三部経	0
⑰詠唱	17
⑱法話	63
⑳その他	20

質問 4-11

①黒・如	57
②色・如	9
③色・大師衣	18
④色・七条	0
⑤改良・小五	6
⑥その他	3
無回答	7
計	96



- (1) 通夜の導師の衣帯は何を用いますか。(該当する番号に○印をつけてください)
- ① 黒衣(木欄衣)・如法衣 ② 色衣・如法衣  
 ③ 色衣・大師五条 ④ 色衣・七条  
 ⑤ 改良服・小五条 ⑥ その他( )

《5》迎接式(迎え葬)についてお尋ねします。

(1) 迎接式(迎え葬)を勤めますか。(該当する番号に○印をつけてください)

① ほとんどの場合に勤めている

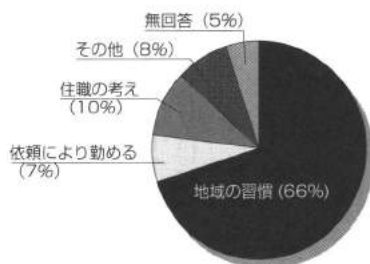
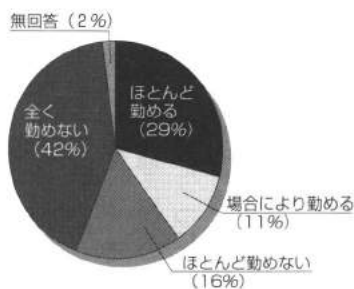
② 場合によっては勤めている

③ ほとんど勤めていない ④ 全く勤めていない

(2) その理由をお聞かせください。(該当する番号に○印をつけてください)

① 地域の慣習 ② 依頼があった場合に勤める





### 質問 5-1

①ほとんど勤める	28
②場合により勤める	11
③ほとんど勤めない	15
④全く勤めない	40
無回答	2
計	96

### 質問 5-2

①地域の習慣	66
②依頼により勤める	7
③職の考え	10
④その他	8
無回答	5
計	96

③ 住職の考え方  
④ その他

### 質問 5-3

①変わらず	64
②増えた	3
③減った	8
④その他	0
無回答	21
計	96

### 質問 5-3-1

①平成以降	5
②昭和50以降	4
③昭和3・40年	2
④昭和20以降	1
無回答	84
計	96

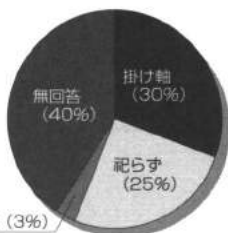
- (3) 迎接式(迎え葬)を勤める頻度は以前と比べて変わりましたか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)
- ① とくに変わっていない 質問(4)にお進み下さい  
② 勤めることが多くなった  
③ 勤めることが少なくなった  
④ を選択した方は下記の質問にもお答えください  
(3) → 変わったのはいつ頃からですか。(該当する番号一つに○印をつけてください)
- ① 平成以後(バブル崩壊後)  
② 昭和50年代以後(オイルショック後)  
③ 昭和30~40年代(オイルショック前)  
④ 昭和20年代(太平洋戦争後)

質問 5-4

①掛け軸	29
②祀らず	24
③その他	3
無回答	40
計	96

質問 5-3-2

①檀信世代交代	3
②住職世代交代	0
③都市化	3
④葬儀社進出	4
⑤人口増加	0
⑥人口減少	0
⑦その他	8



その他 (3%)

(3) 1と変わったのはなぜだと思いますか。(該当する番号すべてに○印をつけてください)

- ① 檀信徒の世代交代 ② 住職の世代交代  
 ③ 地域の都市化 ④ 葬儀社の進出 ⑤ 人口の増加  
 ⑥ 人口の減少 ⑦ その他 )  
 (4) 迎接式(迎え葬)の本尊はどのようにしていますか。  
 (該当する番号の一つに○印をつけてください)  
 ① 来迎仏や名号等の掛け軸類を用いる  
 ② 本尊はとくに祀らない  
 ③ その他 )

(5) その理由をお聞かせください。(該当する番号の一つに○印をつけてください)

- ① 地域の慣習 ② 住職の指示 ③ 葬儀社の指示  
 ④ その他 )  
 (6) 迎接式(迎え葬)の導師は主に誰が勤めますか。(該当する番号の一つに○印をつけてください)  
 ① 住職が勤める  
 ② 住職は勤めずに副住職などの菩提寺の僧侶が勤める  
 ③ 菩提寺以外の僧侶が勤める  
 ④ 僧侶は勤めない(在家のみで勤める)  
 ⑤ その他 )

質問 5-5

①地域の習慣	28
②依頼により勤める	19
③住職の考え	7
④その他	2
無回答	40
計	96

質問 5-6

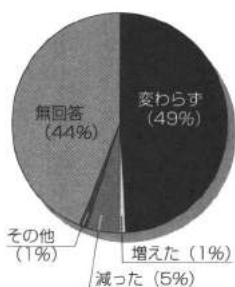
①住職	37
②副住職等	6
③菩提寺以外	9
④僧侶は勤めず	1
⑤その他	1
無回答	42
計	96

(7) 普通の規模の迎接式(迎え葬)は何名の僧侶で勤めることが多いですか。

- (該当する番号の一つに○印をつけてください)  
 ① 1名 ② 2名 ③ 3名 ④ 4名

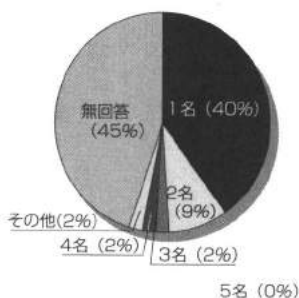
質問 5-8

①変わらず	47
②増えた	1
③減った	5
④その他	1
無回答	42
計	96



質問 5-7

① 1名	38
② 2名	9
③ 3名	2
④ 4名	2
⑤ 5名	0
⑥ その他	2
無回答	43
計	96



- ⑤ 5名 ⑥ その他 )  
 (8) 僧侶の人数は以前と比べて変わりましたか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)  
 ① とくに変わっていない 質問 (9) にお進み下さい  
 ② 僧侶の人数が増えた  
 ③ 僧侶の人数が減った  
 ④ その他 )  
 ② ③ ④ を選択した方は下記の質問にもお答えください

質問 5-8-1

①平成以降	2
②昭和50以降	2
③昭和3・40年	2
④昭和20以降	0
無回答	90
計	96

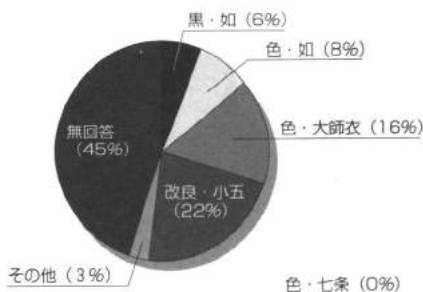
質問 5-8-2

①檀信世代交代	2
②住職世代交代	1
③都市化	4
④葬儀社進出	1
⑤人口増加	0
⑥人口減少	0
⑦その他	2

- ⑥ ③ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ )  
 (8) ー1変わったのはいつ頃からですか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)  
 ① 平成以後 (バブル崩壊後)  
 ② 昭和50年代以後 (オイルショック後)  
 ③ 昭和30~40年代 (オイルショック前)  
 ④ 昭和20年代 (太平洋戦争後)  
 (8) ー2変わったのはなぜだと思いますか。(該当する番号すべてに○印をつけてください)  
 ① 檀信徒の世代交代 ② 住職の世代交代  
 ③ 地域の都市化 ④ 葬儀社の進出 ⑤ 人口の増加  
 ⑥ 人口の減少 ⑦ その他 )

質問5-10

①黒・如	6
②色・如	8
③色・大師衣	15
④色・七条	0
⑤改良・小五	22
⑥その他	3
無回答	43
計	96



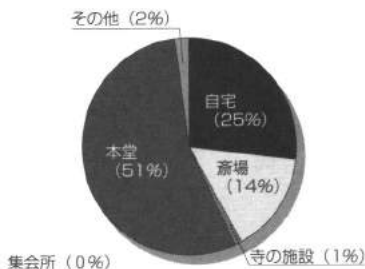
質問5-9

①三帰三竟	14
②合鉢	2
③四誓偈等	3
④根本陀羅尼	0
⑤その他	32

- (9)次の中から迎接式(迎え葬)で行っているものをすべて挙げてください。(該当する番号すべてに○印をつけてください)
- ① 授与三帰三竟 ② 合鉢 ③ 四誓偈等の小経  
 ④ 根本陀羅尼 ⑤ その他 )  
 (10)迎接式(迎え葬)の導師の衣帯は何を穿きますか。(該当する番号一つに○印をつけてください)
- ① 黒衣(木欄衣)・如法衣 ② 色衣・如法衣  
 ③ 色衣・大師五条 ④ 色衣・七条  
 ⑤ 改良服・小五条 ⑥ その他 )

質問6-2

①変わっていない	66
②多くなった	18
③少なくなった	9
無回答	3
計	96



質問6-1

①自宅	24
②集会所	0
③齋場	13
④寺の施設	1
⑤本堂	51
⑥その他	2
計	96

- 《6》葬儀式についてお尋ねします。
- (1)葬儀式はどこで行うことが多いですか。(該当する番号一つに○印をつけてください)
- ① 自宅 ② 集会所 ③ 齋場  
 ④ 本堂以外の寺の施設 ⑤ 本堂 ⑥ その他 )  
 (2)葬儀式を行う場所は以前と比べて変わりましたが。(該当する番号一つに○印をつけてください)
- ① とくに変わっていない 質問(3)にお進み下さい  
 ② 勤めることが多くなった  
 ③ 勤めることが少なくなった  
 ② ③ を選択した方は下記の質問にもお答えください

(2) ー1 変わったのはいつ頃からですか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)

- ① 平成以後(バブル崩壊後)  
 ② 昭和50年代以後(オイルショック後)  
 ③ 昭和30～40年代(オイルショック前)  
 ④ 昭和20年代(太平洋戦争後)  
 (2) ー2 変わったのはなぜだと思いますか。(該当する番号すべてに○印をつけてください)  
 ① 檀信徒の世代交代 ② 住職の世代交代  
 ③ 地域の都市化 ④ 葬儀社の進出 ⑤ 人口の増加  
 ⑥ 人口の減少 ⑦ その他)

質問 6-2-1

①平成以降	17
②昭和50以降	10
③昭和3・40年	0
④昭和20以降	0
無回答	69
計	96

質問 6-2-2

①檀信世代交代	5
②住職世代交代	0
③都市化	14
④葬儀社進出	19
⑤人口増加	1
⑥人口減少	0
⑦その他	4

- (3) 本堂で行う葬儀式の場合、祭壇はどのように飾りますか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)  
 ① 本堂では行わない 質問(4)にお進み下さい  
 ② 外陣側に本尊と向かい合わせに飾る(外陣飾り)

質問(4)にお進み下さい

③ 本尊の手前飾る(内陣飾り)

③ を選択した方は下記の(3) ー1にもお答えください

④ その他) 質問(4)にお進み下さい

(3) ー1 内陣飾りの場合、本尊はどのようにしていますか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)

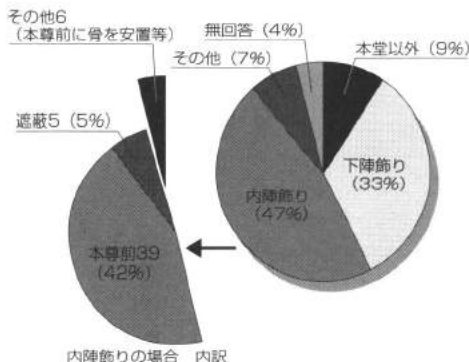
- ① 遮蔽しないで本尊前に祭壇を飾る  
 ② 遮蔽して掛け軸等を奉安する  
 ③ 遮蔽して祭壇だけを飾る  
 ④ その他)

質問 6-3-1

①本尊前	39
②遮蔽・掛け軸	0
③遮蔽	5
④その他	6
無回答	46
計	96

質問 6-3

①本堂以外	9
②下陣飾り	32
③内陣飾り	44
④その他	7
無回答	4
計	96



(4) 本堂以外の葬儀式の場合の本尊はどのようにして  
ますか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)

- ① 来迎仏や名号等の掛け軸類を用いる  
② 本尊はとくに祀らない  
③ その他 )

(5) その理由をお聞かせください。(該当する番号に一つ  
に○印をつけてください)

- ① 地域の慣習 ② 住職の指示 ③ 葬儀社の指示  
④ その他 )

質問 6-4

①掛け軸	33
②祀らず	48
③その他	6
無回答	9
計	96

質問 6-5

①地域習慣	42
②住職指示	22
③葬儀社指示	21
④その他	0
無回答	11
計	96

(6) 葬儀式の内容は以前と比べて変わりましたか。(該当  
する番号に一つに○印をつけてください)

- ① とくに変わっていない 質問(7)にお進み下さい  
② 丁重になった ③ 簡略になった  
④ その他 )

② ③ ④ を選択した方は下記の質問にもお答えください

(6) ー変わったのはいつ頃からですか。(該当する番号  
に一つに○印をつけてください)

質問 6-6-1

①平成以降	6
②昭和50以降	2
③昭和3・40年	0
④昭和20以降	0
無回答	88
計	96

質問 6-6

①変わらず	87
②丁重になる	3
③簡略になる	5
④その他	0
無回答	1
計	96

質問 6-6-2

①檀信世代交代	2
②住職世代交代	3
③都市化	1
④葬儀社進出	5
⑤人口増加	0
⑥人口減少	0
⑦その他	3

- ① 平成以後(バブル崩壊後)  
② 昭和50年代以後(オイルショック後)  
③ 昭和30〜40年代(オイルショック前)  
④ 昭和20年代(太平洋戦争後)  
(6) ー2変わったのはなぜだと思いますか。(該当する番  
号すべてに○印をつけてください)  
① 檀信徒の世代交代 ② 住職の世代交代  
③ 地域の都市化 ④ 葬儀社の進出 ⑤ 人口の増加  
⑥ 人口の減少 ⑦ その他 )

質問 6-6-3 回答 1 以上

合鉢	3
靈供	2
念誦	2
下炬・引導	1
授与三帰三竟	2
歎仏偈	1
広開偈	1
敬礼偈	1
阿弥陀経	3
詠唱	1
その他	1

- ② の丁重になったと答えた方にお聞きします  
 (6) ー3 内容が丁寧になってから用いるようになったものを次の中から選んでください。  
 (該当する番号すべてに○印をつけてください)
- 1 合鉢 2 鎖龕 3 起龕 4 奠湯 5 奠茶  
 6 靈供 7 念誦 8 下炬・引導 9 下鐙・引導  
 10 その他の引導作法 11 授与三帰三竟  
 12 日中礼讃 13 三尊礼 14 その他の礼讃  
 15 声明(讀・唄等) 16 歎仏偈 17 広開偈  
 18 敬礼偈 19 阿弥陀経 20 四誓偈 21 歎仏頌  
 22 光明歎徳章 23 讚重偈 24 眞身観文 25 詠唱  
 27 その他 )

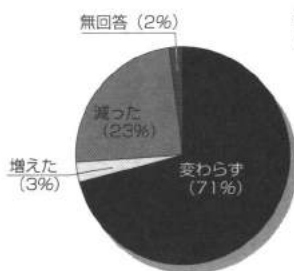
質問 6-6-4 回答 1 以上

鎖龕	1
起龕	1
奠湯	2
奠茶	2
念誦	3
下鐙・引導	1
その他の引導作法	1
授与三帰三竟	1
声明(讀・唄等)	1
広開偈	1
阿弥陀経	3
歎仏頌	1
光明歎徳章	1
讚重偈	1
詠唱	1

- ③ の簡略になったと答えた方にお聞きします  
 (6) ー4 内容が簡略になってから用いなくなったものを次の中から選んでください。  
 (該当する番号すべてに○印をつけてください)
- 1 合鉢 2 鎖龕 3 起龕 4 奠湯 5 奠茶  
 6 靈供 7 念誦 8 下炬・引導 9 下鐙・引導  
 10 その他の引導作法 11 授与三帰三竟  
 12 日中礼讃 13 三尊礼 14 その他の礼讃  
 15 声明(讀・唄等) 16 歎仏偈 17 広開偈  
 18 敬礼偈 19 阿弥陀経 20 四誓偈 21 歎仏頌  
 22 光明歎徳章 23 讚重偈 24 眞身観文 25 詠唱  
 27 その他 )

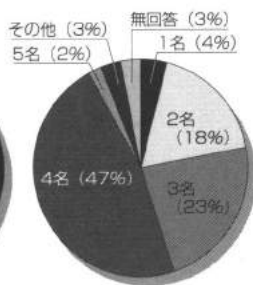
質問 6-8

①変わらず	68
②増えた	3
③減った	23
④その他	0
無回答	2
計	96



質問 6-7

① 1名	4
② 2名	17
③ 3名	22
④ 4名	45
⑤ 5名	2
⑥その他	3
無回答	3
計	96



(7) 普通の規模の葬儀式は何名の僧侶で勤めることが多いですか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)  
 ① 1名 ② 2名 ③ 3名 ④ 4名 ⑤ 5名  
 ⑥ その他 )  
 (8) 僧侶の人数は以前と比べて変わりましたか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)  
 ① とくに変わっていない  
 次ページ質問 (9) にお進み下さい

質問 6-8-1

①平成以降	23
②昭和 50 以降	5
③昭和 3・40 年	0
④昭和 20 以降	0
無回答	68
計	96

質問 6-8-2

①檀信世代交代	14
②住職世代交代	2
③都市化	6
④葬儀社進出	6
⑤人口増加	0
⑥人口減少	0
⑦その他	9

② 僧侶の人数が増えた  
 ③ 僧侶の人数が減った  
 ④ その他 )  
 ② ③ ④ を選択した方は下記の質問にもお答えください  
 (8) ー1 変わったのはいつ頃からですか。(該当する番号に一つに○印をつけてください)  
 ① 平成以後 (バブル崩壊後)  
 ② 昭和 50 年代以後 (オイルショック後)  
 ③ 昭和 30 ～ 40 年代 (オイルショック前)  
 ④ 昭和 20 年代 (太平洋戦争後)  
 (8) ー2 変わったのはなぜだと思いますか。(該当する番号すべてに○印をつけてください)  
 ① 檀信徒の世代交代 ② 住職の世代交代  
 ③ 地域の都市化 ④ 葬儀社の進出 ⑤ 人口の増加  
 ⑥ 人口の減少 ⑦ その他 )



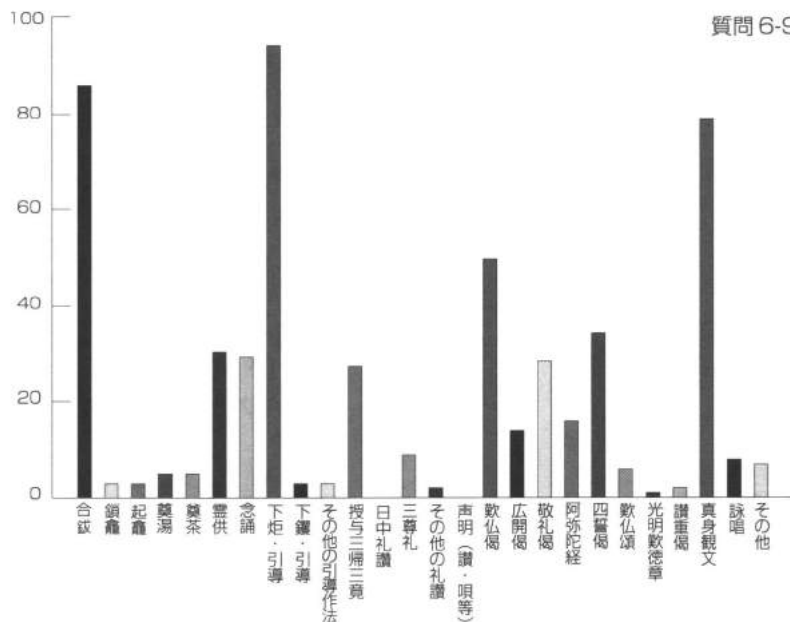
質問6-9

合鉢	86
鎖龕	3
起龕	3
奠湯	5
奠茶	5
靈供	30
念誦	29
下炬・引導	94
下鑪・引導	9
その他の引導作法	3
授与三帰三竟	27
日中礼讃	0
三尊礼	9
その他の礼讃	2
声明（讃・唄等）	0
歎仏偈	50
広開偈	14
敬礼偈	28
阿弥陀経	16
四誓偈	34
歎仏頌	6
光明歎徳章	1
讃重偈	2
真身観文	79
詠唱	8
その他	7

- (9) 次の中から普通の規模の葬儀式で行う（唱える）ものをすべて挙げてください。（該当する番号すべてに○印をつけてください）
- 1 合鉢 2 鎖龕 3 起龕 4 奠湯 5 奠茶  
 6 靈供 7 念誦 8 下炬・引導 9 下鑪・引導  
 10 その他の引導作法 11 授与三帰三竟  
 12 日中礼讃 13 三尊礼 14 その他の礼讃  
 15 声明（讃・唄等） 16 歎仏偈 17 広開偈  
 18 敬礼偈 19 阿弥陀経 20 四誓偈 21 歎仏頌  
 22 光明歎徳章 23 讃重偈 24 真身観文 25 詠唱  
 26 その他
- (10) 葬儀式の導師の衣帯は何を穿きますか。（該当する番号一つに○印をつけてください）
- ① 黒衣（木欄衣）・如法衣 ② 色衣・如法衣

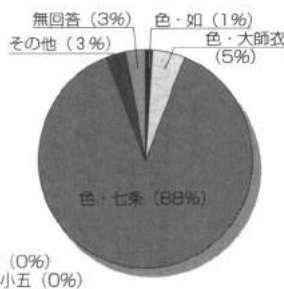
- ③ 色衣・大師五条 ④ 色衣・七条  
 ⑤ 改良服・小五条 ⑥ その他
- (11) 葬儀式の遺族の並び方には決まりがありますか。（該当する番号一つに○印をつけてください）
- ① 地域の慣習で決まっている  
 ② 住職（僧侶）が指示する ③ 葬儀社が指示する  
 ④ その他の決まりがある ⑤ とくに決まりはない  
 ⑥ その他
- (12) いわゆる告別式はどのように行うことができますか。（該当する番号一つに○印をつけてください）
- ① 葬儀式とは分けて行う ② 葬儀式に内に行う  
 ③ とくに行わない ④ その他

質問6-9



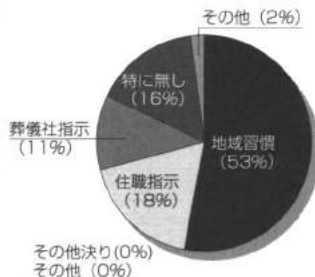
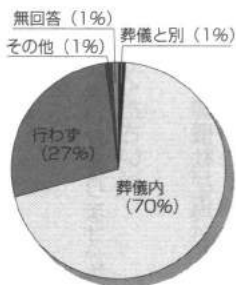
質問6-12

①葬儀と別	1
②葬儀内	67
③行わず	26
④その他	1
無回答	1
計	96



質問6-10

①黒・如	0
②色・如	1
③色・大師衣	5
④色・七条	84
⑤改良・小五	0
⑥その他	3
無回答	3
計	96



質問6-11

①地域習慣	51
②住職指示	17
③葬儀社指示	11
④その他決り	0
⑤特に無し	15
⑥その他	2
無回答	0
計	96

⑦ 出棺式（出棺回向）についてお尋ねします。

（一）遺族のお別れ場に立ち会いますか（該当する番号に一つに〇印をつけてください）

① ほとんどの場合に立ち会う

② 場合によっては立ち会う

③ ほとんど立ち会わない

④ 全く立ち会わない

⑤ 全く立ち会わない 質問（三）にお進み下さい

（二）次の中から遺族のお別れの場で行っているものをすべて挙げてください。（該当する番号すべてに〇印をつけてください）

① 根本陀羅尼 ② 舍利礼文 ③ 四誓偈等の小経

④ 念仏一会 ⑤ 合鉢 ⑥ 出棺偈

⑦ その他（ ）

#### 質問 7-1

①立ち会う	65
②場合により	14
③立ち会わない	9
④全く立ち会わない	7
無回答	1
計	96

#### 質問 7-2

根本陀羅尼	32
舍利礼文	20
四誓偈等の小経	39
念仏一会	69
合	8
出棺偈	24
その他	6

#### 質問 7-3

①僧侶が勤める	61
②念仏講が勤める	1
③僧侶は勤めない	22
無回答	12
計	96

#### 質問 7-4

根本陀羅尼	32
舍利礼文	17
四誓偈等の小経	31
念仏一会	59
合鉢	15
出棺偈	26
その他	3

（三）出棺時にはどのようなようにしていますか。（該当する番号に一つに〇印をつけてください）

① 僧侶が勤める 質問（四）にお進み下さい

② 念仏講等が行う 質問（八）にお進み下さい

③ 僧侶は特に何もしない 質問（八）にお進み下さい

（四）次の中から出棺時に行っているものをすべて挙げてください。（該当する番号すべてに〇印をつけてください）

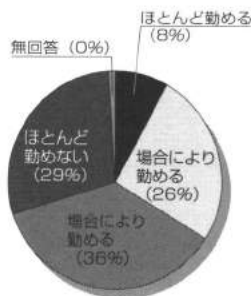
① 根本陀羅尼 ② 舍利礼文 ③ 四誓偈等の小経

④ 念仏一会 ⑤ 合鉢 ⑥ 出棺偈

⑦ その他（ ）

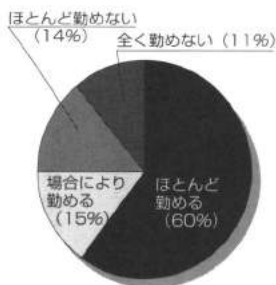
質問 8-2

①ほとんど勤める	8
②場合により勤める	25
③ほとんど勤めない	34
④全く勤めない	28
無回答	1
計	96



質問 8-1

①ほとんど勤める	58
②場合により勤める	14
③ほとんど勤めない	13
④全く勤めない	11
無回答	0
計	96



⑧ 茶毘式・収骨式についてお尋ねします。  
 (1) 茶毘式を勤めますか。(該当する番号に1つに○印をつけてください)  
 (2) 収骨式を勤めますか。(該当する番号に1つに○印をつけてください)

質問 8-3

根本陀羅尼	30
舍利礼文	58
念仏一会	75
その他	3

質問 8-4

根本陀羅尼	11
舍利礼文	47
念仏一会	49
その他	2

① ほとんどの場合に勤める ② 場合によっては勤める  
 ③ ほとんど勤めない ④ 全く勤めていない  
 (3) 茶毘式では何を唱えますか。(該当する番号すべてに○印をつけてください)  
 ① 根本陀羅尼 ② 舍利礼文 ③ 念仏一会 ④ その他 )  
 (4) 収骨式では何を唱えますか。(該当する番号すべてに○印をつけてください)  
 ① 根本陀羅尼 ② 舍利礼文 ③ 念仏一会 ④ その他 )

《9》中陰法要についてお尋ねします。

(1) 初七日忌をいつ勤めますか(該当する番号に1つに○印をつけてください)

- ① 葬儀当日繰り上げて行う 質問(2)にお進み下さい  
 ② 葬儀の翌日行う③ 初七日速夜を行う  
 ④ 初七日当日を行う⑤ その他 )  
 ②③④⑤ を選択した方は質問(3)にお進み下さい  
 (2) 初七日忌を葬儀当日に勤める場合どのように行いますか(該当する番号に1つに○印をつけてください)  
 ① 葬儀に引き続き出棺前に行く(葬儀後に火葬の場合)  
 ② 葬儀とは別に出棺前に行く(葬儀後に火葬の場合)  
 ③ 火葬場での収骨後に行く(葬儀後に火葬の場合)  
 ④ 葬儀とは別に行く(葬儀前に火葬の場合)  
 ⑤ 埋葬後に行く

質問9-1

①当日繰り上げ	71
②葬儀翌日	0
③初七日速夜	5
④初七日当日	15
⑤その他	2
無回答	3
計	96

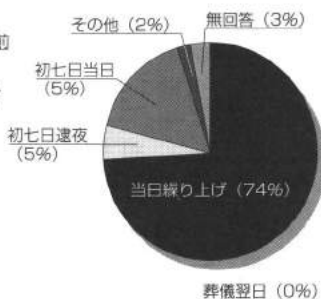
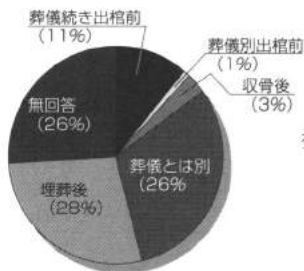
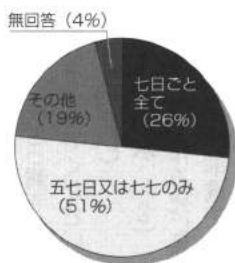
質問9-2

①葬儀続き出棺前	11
②葬儀別出棺前	1
③収骨後	3
④葬儀とは別	29
⑤埋葬後	27
無回答	25
計	96

質問9-3

①七日ごと全て	25
②五七・七七のみ	49
③その他	18
無回答	4
計	96

(3) 七日ごとの中陰法要は行いますか(該当する番号に1つに○印をつけてください)  
 ① 七日ごと全て行う ② 五七又は七七のみ行う  
 ③ その他 )



⑩ 埋葬式についてお尋ねします。

(1) 埋葬する時期はいつが多いですか。(該当する番号に一つ〇印をつけてください)

- ① 葬儀式当日 ② 初七日 ③ 初月忌 ④ 五七日  
 ⑤ 七七日 ⑥ その他 )  
 (2) 次の中から墓前で行うものを挙げてください。(該当する番号すべてに〇印をつけてください)  
 ① 四誓偈等の小経 ② 舍利礼文 ③ 根本陀羅尼  
 ④ 念仏一会 ⑤ その他 )

質問 10-1

①葬儀式当日	58
②初七日	0
③初月忌	0
④五七日	2
⑤七七日	26
⑥その他	6
無回答	4
計	96

質問 10-2

①四誓偈等の小経	65
②舍利礼文	63
③根本陀羅尼	15
④念仏一会	81
⑤その他	4

⑪ 伝統的な慣習についてお尋ねします。

(1) 次の中から貴寺院の地域で現在行われている伝統的な慣習を選んでください。(該当する番号すべてに〇印をつけてください)

- (1) 末期の水 (2) 神棚封じ (3) 仏壇封じ  
 (4) 遺族等が作る死に装束  
 (5) 葬儀社が準備する死装束  
 (6) 住職が死装束に経文を書く (7) 左前  
 (8) 逆さ足袋 (9) 逆さ着物 (10) 湯灌(逆さ水)  
 (11) 北枕 (12) 逆さ屏風 (13) 守り刀  
 (14) 枕団子 (15) 枕飯  
 (16) 三具足(一本花・一本蠟燭・一本線香)  
 (17) 野位牌 (18) 忌中札 (19) 釘打ち  
 (20) 出棺時の食い別れ (21) 玄関以外からの出棺  
 (22) 仮門 (23) 棺の三回廻し (24) 出棺時の葬列  
 (25) 埋葬時の葬列 (26) 土葬 (27) 出棺後の座敷  
 清め(具体的にお書き下さい) ( ) )  
 (28) 逆縁の葬儀の親は葬列へ参加しない  
 (29) 通常の喪服以外の白装束などの衣装(具体的にお書き下さい) ( ) )  
 (30) 三角頭巾(遺族がつける) (31) 箸渡し  
 (32) 道遣え (33) 清めの塩  
 (34) 通夜での精進料理 (35) 四十九餅 (36) 友引

質問 11-1

末期の水	62
神棚封じ	59
仏壇封じ	21
遺族等が作る死に装束	10
葬儀社が準備する死装束	70
住職が死装束に経文を書く	14
左前	46
逆さ足袋	23
逆さ着物	40
湯灌（逆さ水）	30
北枕	74
逆さ屏風	12
守り刀	81
枕団子	88
枕飯	76
三具足（一本花・一本蠟燭・一本線香）	74
野位牌	57
忌中札	50
釘打ち	77
出棺時の食い別れ	12
玄関以外からの出棺	42
仮門	14
棺の三回廻し	15
出棺時の葬列	44
埋葬時の葬列	17
土葬	0
出棺後の座敷清め	19
逆縁の葬儀の親は葬列へ参加しない	27
通常の喪服以外の白装束などの衣装	1
三角頭巾（遺族がつける）	18
箸渡し	31
道連れ	27
清めの塩	77
通夜での精進料理	16
四十九餅	84
友引の葬儀忌避	83
七七日（満中陰）以外の忌み明け日	21
香典（金銭）以外の供物	36
それ以外	5

- (38) (37) の葬儀忌避  
 (38) 香典（金銭）以外の供物（具体的にお書き下さい）  
 (38) それ以外に行われていることがあれば挙げてください

(2) かつて行われていて、近年行われなくなった伝統的な慣習があれば挙げて下さい。

質問 11・2 解答省略

質問 12-1

①白木位牌	94
②大幡	33
③小幡	24
④天蓋	23
⑤四華（紙花）	67
⑥紙蓮華	21
⑦六丁立	14
⑧六道牌（六角塔婆）	20
⑨三日塔婆	17
⑩七本塔婆	93
⑪十三仏塔婆	1
⑫六道蠟燭	43
⑬殯屋	1
⑭それ以外	3

《12》 葬儀用の法具類についてお尋ねします。

(1) 次の中から貴寺院の地域で用いているものを選んでください。(該当する番号すべてに○印をつけてください)

- ① 白木位牌 ② 大幡 ③ 小幡 ④ 天蓋  
 ⑤ 四華（紙花） ⑥ 紙蓮華 ⑦ 六丁立  
 ⑧ 六道牌（六角塔婆） ⑨ 三日塔婆 ⑩ 七本塔婆  
 ⑪ 十三仏塔婆 ⑫ 六道蠟燭 ⑬ 殯屋  
 ⑭ それ以外に用いているものがあれば挙げてください

《13》 調査の集計に必要ですので貴寺院について以下の質問にもご回答下さい。

(1) 貴寺院があるのはどの様な地域ですか。(該当する番号に一つ○印をつけてください)

- ① 大都市（人口100万人以上）部  
 ② 大都市周辺の近郊都市部  
 ③ 独立して存在する中小都市部  
 ④ 中小都市の郊外地域 ⑤ 村落・田園地域  
 (2) 貴寺院の周辺および近隣地域は最近20年間の人口増加からみてどの様な地域ですか。(該当する番号に一つ○印をつけてください)

- ① 人口が急増した地域 ② 人口が漸増・微増した地域 ③ 人口の変化がほとんどない地域  
 ④ 人口が漸減・微減した地域 ⑤ 人口が急減した地域  
 (3) 貴寺院の周辺および近隣地域は最近20年間で土地利用の形態がどの様に変化しましたか。(該当する番号に一つ○印をつけてください)

- ① 戸建て住宅・集合住宅などで住宅地化が進んだ  
 ② オフィス・商用施設などで都市化が進んだ  
 ③ 工業・流通施設などで産業化が進んだ  
 ④ 住宅地化・都市化・産業化が複合して進んだ  
 ⑤ ほとんど変化がなかった  
 以上で質問は終わります。大変有り難うございました。

質問13 解答省略



## 〈1〉 葬送儀礼全般について

葬儀の流れに関しては、いちばんはっきりとした特徴が見られるのは、葬儀式前に火葬を行う「前火葬」と式後に行う「後火葬」が、組によって大きく異なっていることである。本誌の紙面の都合上、すべての寺院の葬儀式の「流れ」を図表に掲載することができないが、東豆組、北豆組、東駿組、清水組、西駿組は前火葬を行う寺院が圧倒的に多いが、岳陽組、東遠組では後火葬が圧倒的に多い。この理由となる文化背景は今後の調査で明らかにしていきたい。仏壇の開閉とその理由に関しては、葬儀期間中「平常どおり開扉している」と回答している寺院が約六割ある。しかしこれが、地域伝統として行われてきたのか、それとも住職の意識的な指示なのか重要なところである。そこでその内容を見ると、①の地域の習慣と②の住職の指示が49%と40%と拮抗していて、(2)に回答したものが(3)でどちらに回答したかが、この単純集計結果だけでは不明である。この点は次回に明らかにしたい。

## 〈2〉 枕経について

枕経は①②を合わせて80%が勤めている。その理由は、①「地域の習慣」と②「住職の考え」に大きく分かれている。ここでも地域の習慣として行われてきているのかは、この集計結果からだけでは不明である。頻度の変化は、85%が特に以前と変わっていないと回答している。一割と少数だが、オイルショックやバブル崩壊などの経済的な変動に影響されて変わったと回答している。これらの地域と増えたか減ったかについての詳細は次回に行うこととする。枕経の本尊に関しては、約半数が地域の習慣で祀っていないと思われるが、同じ位の数の寺院では住職の指示で祀っている。わずかだが、葬儀社の指示が出てきていることに注目する必要がある。衣帯は黒衣・如法衣と改良服・小五条がほぼ同数で8割を超えている。式次第は、広懺悔、報恩偈、剃髪偈、剃度作法、授与三帰三竟、発願文、四誓偈、法話といった内容が典型である。授与戒名は三割弱である。

### 《3》 納棺式について

納棺式を勤めるかについては、①②合わせて35%寺院でしかない。質問3—2の理由と合わせ考えると、地域の慣習として、寺は関与してこなかったものと思われる。寺の関与する納棺式も、数は少ないものの、近年のバブル崩壊後減ってきており、その理由に、檀信徒の世代交代と葬儀社の進出があげられている。衣帯は改良服・小五条が六割弱と簡略である。式次第は、おもに広懺悔、発願文、四誓偈、納棺偈である。

### 《4》 通夜について

通夜は圧倒的に自宅で行われているが、近年斎場で行われ始めている。その時期は、バブル崩壊後で、理由は葬儀産業の進出だと感じているようである。内容に関しては、告別式と同じく一般会葬を受ける習慣は以前からあったようだが、昭和50年代以降、その割合は増えてきていている。その理由は、都市化と葬儀社の進出である。

本尊については、枕経の場合とほとんど同じ傾向が見え、本尊を祀る場合と祀らない場合が、地域の慣習と住職の支持でほぼ同数となっている。

通夜の導師は、僧侶が勤めない四寺を除き、住職・副住職が勤めている。僧侶の数も一名である。ただし平成以降僧侶の数が減る傾向にあるとの回答が四寺ある。衣帯は黒衣・如法衣が六割弱で、二割弱が色衣・如法衣である。式次第は、だいたいのところ、広懺悔、剃髪偈、剃度作法、授与三帰三竟、授与戒名、三尊礼、発願文、通夜回向文、真身観文等の小経、法話が行われている。

### 《5》 迎接式（迎え葬）について

迎接式は、①と②を合わせると39寺で勤め、③と④を合わせ55寺が勤めていない。これは、地域の慣習を理由に挙げた回答が約七割と高いことから、伝統的な慣習が形態的に残っていることなどの要因が複雑に絡み合っていることが伺える。注目すべきは、以前と比べて勤めることが少なくなつたという回答が8寺あり、喪家の世代交代、斎場で

の葬儀、都市化による道路事情などが影響しているよう  
だ。

導師は大体が住職・副住職が勤めるが、通夜と同様に菩提  
寺以外の僧侶が勤める地域が二割近くもある。通夜と同じ  
ように、僧侶の数が減る傾向にあり、時期も理由も通夜と  
同じである。衣帯は改良服・小五条と色衣・大師五条が七  
割を占めている。

## 《6》葬儀式について

葬儀会場は、地域の特性を反映して本堂が51%を超えて  
いる。次いで自宅が25%、斎場が14%である。この比率は、  
葬儀社の進出、都市化、喪家の世代交代に伴って、平成に  
なって変化し始めている。特に葬儀社の斎場経営、市営斎  
場の設立の影響は、葬儀場の決定に大きな影響を与えてい  
る。

本堂内の葬儀の祭壇飾りは、伝統的な外陣飾りよりも会  
葬者の利便を考えた本尊手前飾りが約半数の回答となって  
いる。本堂以外の会場での本尊は、地域の伝統として祀ら

ないことが半数を占める。しかし注目すべきは、葬儀社の  
指示で祀るという回答が二割を超えていることである。そ  
して内容は、平成になってから簡略になりつつあり、その  
理由は葬儀社の進出だと考えている。

(9) から典型的な葬儀式次第を作ると、歎仏偈、敬礼  
偈、合鉢、靈供、念誦、授与三帰三竟、下炬・引導、四誓  
偈・真身観ということになる。衣帯は色衣・七条が圧倒的  
である。式次第のなかで簡略になったものは、起籠、鎖籠、  
奠湯、奠茶、念誦、下鏝、阿弥陀経といったものである。  
これらは、僧侶の数が減ったことや葬儀時間が短くなった  
ことよって起こっていると思われる。実際、僧侶の数は  
四人から二人が一般的である。この人数については、23%  
が減ったと回答している。回答によれば、平成に入ってから  
僧侶人数の減少が起こり、それは、喪家の世代交代と都  
市化と葬儀社の進出が原因と受け止められている。告別式  
については、葬儀式のなかで行う70%と、とくに行わない  
27%からみて、葬儀式と告別式が厳密に区別されていない  
ことが伺われる。

## 《7》出棺式について

遺族のお別れ場にはほとんどの僧侶が立会い、念仏一会など何らかを行っている。その後の出棺に際しては、六割以上の僧侶が、やはり念仏一会などを行っている。

## 《8》茶毘式・収骨式について

茶毘式を勤めるのは、①と②の合計75%にのぼる。これに対して収骨式を勤めるのは、①と②の合計34%である。これはこの教区全体の特徴として、冒頭に述べたように、前火葬が多いために茶毘には立ち会うが、収骨まで立ち会わない慣習ができてきているものと思われる。

## 《9》中陰法要について

葬儀以降の法要については、教区の文化的複雑さを反映してか、非常に多様であることが大きな特徴となつている。たとえば、初七日法要は、近年の大都市の傾向と同様に当日繰上げ執行が74%を占めるが、初七日逮夜と正当日が21%も行われている。こうした期日をきちんと守ろうと

する几帳面さは、七日ごとの法要をすべて行うのが26%もあることにも表れている。また葬儀に特徴的な多様さは、「その他」が非常に多いことにも表れている。この七日法要をすべて行う地域がどういふ特徴をもっているのか興味深いところで、あらためて調査する必要があるだろう。

## 《10》埋葬式について

埋葬については、葬儀式当日の埋葬が60%を占めている。これは、明らかに土葬の名残とも考えられるし、前火葬しているために埋葬の時間的余裕があることなども考えられるだろう。いっぽう、七七日納骨は27%にもぼっている。これは土葬時代には考えられなかった新たな慣習である。どの地域にいつ頃から行われてきているのか調査の必要があるだろう。

## 《11》伝統的慣習について

伝統的慣習については、今回の分析にはなじまないこともあり、この部分に関しては別の機会に譲ることにした

い。

## 《12》全体を通じて

今回のアンケートを全体的に振り返ってみると、大きな特徴が浮かび上がってきた。それは、教区全体にわたって、変化の波が押し寄せてきていることである。数値的には一割ほどの回答ではあるが、葬儀式の全般にわたって、僧侶が肌で感じているところである。その変化は、葬儀式の簡略化・低廉化傾向である。それは昭和50年代のオイルショック期から始まり、平成のバブル崩壊を経て加速化している。さらに戦後進行してきている都市化による地域社会の絆の弱体化とそれに代わる葬儀産業の進出と公営斎場の出現が大きな影響を与えている。これらの要因が、大きな団塊の世代が主たる喪主となったとき、「葬送に関わる意識の変化を生み出していると言えよう。こうしたさまざまな状況を受けて、葬儀式そのものが葬儀産業によるパッケージ商品化されてきて、寺院もそれに組み込まれ始めているのである。もちろん葬儀産業も、地域葬儀伝統を考慮

し組み込む努力を払ってはいると思われるものの、地域伝統に根ざした葬送との微妙な意識的なずれを感じざるをえない。都市化とともに過疎化・過密化が加速されていくなかで、少子化も要因となって、葬儀式全体の変化が進んでいくのではないだろうか。今後は、クロス集計による詳細な分析と他地域との比較研究を進めていく予定である。

# 浄土宗総合研究所公開講座

## 『五重相伝の基本と実践』

講師 上田 見宥

『五重相伝の基本と実践』

平成十三年九月十二日 開催

(南無阿弥陀仏)

(同称十念)

司会 では、開会の言葉を浄土宗総合研究所専任研究員

の正村瑛明より申し上げます。

正村 大きな台風一過、すばらしい秋空となりました。

ご紹介いただきましたように、浄土宗総合研究所において、現代研究班のプロジェクトの主務を担当しております

正村と申します。

私どもでは今年度の予備研究で八木季生客員教授を研究代表とし、五重相伝の研究を進めているところでございます。そして、本日は上田見宥先生にお出ましをいただき、五重相伝についての公開講座が開かれる運びとなりました。お忙しい中、熱心なる皆さま方にご参集いただきまして、誠にありがとうございます。

それではただ今から、浄土宗総合研究所主催「五重相伝の基本と実践」の公開講座を始めさせていただきます。よろしく願いたします。

司会 続きまして、浄土宗総合研究所所長でいらつしゃ

います石上善應先生よりご挨拶がございます。

石上　ご挨拶させていただきます。今ご紹介がございましたように、研究所として一つの大きなメルクマールとして、五重相伝についての研究をこのところ続けてやってまいりました。

先回の六月二十八日には、「五重相伝について―現状と問題点」という題で、清水秀浩上人からいろいろな事例を挙げて説明をしていたいただいた経過がございます。しかし、こんなに大勢の方の前でやったわけではありませんので、むしろそれも皆様に聞かせてあげたかっと思ふ次第です。

さて、今日は「五重相伝の基本と実践」という題の下に、上田見宥上人からその最も大事なところのお話をさせていただく予定でございます。「今日のお話を基にして、あるべき五重相伝というものを検討していきたい」というのが一つの柱でございます。なにとぞよろしく皆さま方のご協力を賜りたいと思います。ありがとうございました。

司会　続きまして、当研究代表で客員教授でいらつしや

います八木先生、よろしく願ひいたします。

八木　それでは、講師の先生のご紹介をさせていただきます。今回おいでいただきました上田見宥先生は、今の石上所長のお話にもありましたように一九二九年のお生まれでございます。「一九二九年」と言われてもピンと来ないかもしれませんが、今年の年男であられます。

さて、この総合研究所は設立当初、教学・布教・法式の三部門から成る研究所でございました。先生はその設立当初の主任でいらつしやいますから、研究所には非常にご縁の深いお方であられます。

また、上田先生と言えば関西の五重の第一人者でいらつしやいます。先の総本山知恩院の布教師会の会長でもあられ、現在も顧問をなさっています。

それから、五重にお詳しいことから、布教研究所の主任でいらしたところに「結縁五重相伝」という三巻から成るご書物のご執筆もいただいております。そのように、五重相

伝には大変造形の深いお方であらられる上、経験も豊かでいらつしやるので、今日はそれを余すところなく、細かいところまで伺いたいと思います。どうぞ皆さま、ごゆっくりとご聴聞ください。

それでは上田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

上田 失礼いたします。上田でございます。それでは、最初にお十念を申し上げたいと思います。

(同称十念)

ありがとうございます。どうぞお楽になさってくださいませ。

昨夜はアメリカで「同時多発テロ」という大変な事件が起こりました。今朝のニュースでもご覧になったと思いますが、本当に恐ろしいことが起こる世の中です。それがイスラム原理主義者の犯罪であるのかどうか、はつきりいたしません。多分宗教が関係しているのではないでしょう。イスラムのもつ一面を垣間見るような気がいたしました。それにしても日本は平和でございます。経済不況などいろいろなことを申しながらも、こうして一応の平和を

保っているのは有難いことであります。

しかし、その反面「平和ボケ」という言葉がささやかれますように、あらゆる面におきましていろいろな問題が起こっております。親が子を殺し、子が親を殺すという世情一つを見ても、本当に困難な時代に直面していると言えましょう。

ただ、同じ宗教と申しましても、仏教は非常に穏やかなものでございます。ですから、この仏教の精神によって、失われた日本の心というものを、もう一度取り戻さねばならない、これが私どもの務めであると思うのでございます。

さて、昭和三十四年ごろ、この大本山増上寺にまだ旧のご本堂があつたときですが、浄土宗の布教師大会が初めて開かれました。そのとき神居・榎尾両大僧正お二方の指導講演がございました。そのときは両派分裂しておりましたので、神居大僧正が百万遍におられながら、浄土宗の管長さまであられました。私も本当に若輩でありましたが、その布教師大会に参加させていただきまして、両大僧正のお話を伺いました。



そのときの神居大僧正のご講演は「浄土宗教化の二大方針」というものでした。教化の大きな二本柱とは「一つは五重相伝であり、もう一つは授戒である。これをおいて浄土宗の教化はない」というお話でございました。このことは何でもないのでありますが非常に大切なことであります。大僧正のお話が未だに耳の底から離れないのは、私が布教師の末席に連なっているからでありましょうか。

爾来、至らぬながらに努力をいたしまして、細々と布教の道を行んでまいりました。今日も皆さま方の前でお話をさせていただくような身ではございませんが、八木先生のご「せひとも」というお言葉を頂戴しまして、厚かましくもこうして参った次第でございます。

五重のお話はいろいろございます。学問的なことから、また布教師として勸誡するに当たってどのようにするのかというお話、それから実際に自坊で五重相伝を厳修するにはどうすればいいのかということもございます。したがって、一口にはなかなか申しにくいのが今回のテーマであります。

また「五重相伝を通じてお念仏を現代にどのように弘めていくのか」というのも大きな問題ですが、そのすべてを一時間半で語り尽くすことはとてもできません。お集まりの中には五重相伝に非常に詳しいお方もいらっしゃるでしょうし、また失礼ですが全くの初心者と言われるようなお方もいらっしゃるかも知れません。そのどちらのお方に焦点を当ててお話させていただければいいのか迷うところですが、今日は初心者のお方を対象にすることを基本にさせていただきます。と思います。

そして、内容については、先ほど申し上げましたように、いろいろ考えられますが、実際の五重相伝の勸誡に役立つようなお話、あるいはこれから五重を厳修なさろうというお方にも何か参考になるようなことを、布教の立場から限られた時間の許される範囲で触れてみたいと思います。

最初に、しっかりと頂戴しておいていただかねばならない基本のところを、かいつまんでお話します。なぜなら、その基本を知った上で勸誡という問題も出てまいりましょうし、五重相伝を開筵するというお話も出てまいると

思うからでございます。

私は、かつて或る先輩から「五重相伝を實際に厳修しようとするお寺のご住職は、少なくとも『浄土傳燈輯要』というあの分厚いご本に親しんで、その内容をしっかりと頂かねばならない」と話をお聞きしたことがあります。

学者だけがそれを知っているのではなく、勸誡師は勿論のこと、自坊で五重相伝をつとめようというお方は「浄土傳燈輯要」をひもとき、伝法の何たるかをよく把握しておかなければ本当の五重にはならない。借物の伝書を棒読みし、わからずじまいにご伝法しては申し訳ないということであります。

伝灯仏子は、本来は五重の勸誡をすべきものです。しかし、伝灯仏子たる住職が五重全体を統括し、導師も勤め、尚かつ勸誡をすることは時間的にも肉体的にも不可能でありますから、勸誡師を招いて法説をしていただくのであります。

したがって伝灯仏子たる住職は、ご自分が勸誡するだけの勉強をして五重相伝を開筵せねばなりません。それが本

義であり、「勸誡は布教師に任せておけばいい」というのは真のご伝法にはならないのであります。

以上のような原点到立ちかえって考えますと、たとえ勸誡師に来ていただいで勤めようとも、五重とは一体どういうものであるのか、そしてお祖師さま方がどう説いていらっしゃるのかという基本をしつかり学んだ上で、「勸誡師が私の代説をしてきているのだ」と受け取る。このことを私たちはよく認識せねばなりません。

前置きはこれぐらいにして、五重相伝の具体的なお話に入ります。「五重相伝」と申しますと、今日では一般的に「結縁五重」のことを指すように受け取る方がおられますが、もともとは宗侶向けのものであります。私たちがご本山の加行道場で伝宗伝戒を受けましたのも勿論五重相伝であります。しかし、のちにお在家向けにこの相伝が行われるようになり、布教の上での大きな力になりました。最初に申し上げたように授戒と並んで教化のための大きな二本柱となったのであります。今回研究所がお取り上げになります五重も、教化のための「結縁五重（在家五重・化他

五重とも云う」であります。そのためにも能化の我々が充分に関心をもち、意をつくして勉強せねばならないことでございます。

関西では五重相伝が盛んに厳修されますから、宗侶の方々は若いときからそれなりの経験を積み、知らず知らずのうちにその全体像を把握している方が沢山いらっしゃる。また、他の寺院へお手伝いに来る機会が多いものです。また、「何を留意すればいいのか」或は「無い什具はどここの寺院で借りたらいい」などという手順も自然に憶えております。

さらには、いろいろな布教師の勧誡を聴聞いたします。受者の法悦の声を聞き「あ、受けてよかった。本当にありがたい」「楽しく尊いなかに五日間（または一週間）を過ごさせていただいた」というお顔を眺めながら、布教師を志す者も多く出てまいります。いわば五重相伝というものに慣れ親しみ、そのイロハが自然と身についているわけがあります。

ですから、そういう環境にあります者と、そうでないお

方とでは、必然的に大きな差ができてしまいます。五重相伝の勤まらないところでは、なかなか勧誡師も信者も育たないでしょうが、それでも何とかお念仏を弘めていかねばならないという気持ちはある筈です。それがつい空回りをしてしまう。そして、だんだんとあきらめが出てきたり、五重相伝に対する無関心が生まれてきたりする。まことに残念なことであります。

関東やその他の地方でも五重相伝が盛んでないところがあります。関東は十八檀林があつた謂わばご伝法の本場です。結縁五重が育つても不思議ではないと思いますが、私は「関東では五重があまり勤まりません」という声を聞くたびに非常に残念でならないのであります。

五重相伝以外にも伝道の途はたくさんあります。五重こそがお念仏をお伝えするのに最も適した道である」という認識を、経験した人ははつきりもっております。以前のご門主であられた高島大僧正のご自坊では、今年は五重、来年は授戒、その翌年はまた五重というふうには、毎年五重と授戒が交互に勤まりますし、或は三年ごとにお勤め

になるような寺院もございます。また私事を申すのは失礼ですが、平成二十一年の五重勸誡を約束させられているお寺があります。「生きていたら参りましょう」と言葉を濁してありますが、あと八年ほどありますから、命がもつかどうかわかりません。しかし、それだけちゃんと計画的に五重相伝が行われているということでもあります。

まさに五重と授戒は車の両輪の如く、浄土宗布教の双壁であります。まことに他宗の羨む、浄土宗のお宝であると思います。祖師方、先輩方が育ててくださったこのお宝を、いかにしてもたくさんのお寺でお勤めしていただきたい。そして勸誡師の方も育ち巣立っていただきたい、それが私の切実な願いであります。

最近私が心に暖めておりますことは、関東の布教師と関西の布教師との相互交流であります。政治の世界はともかくとして、布教の面では関東も関西もありません。尊いお念仏の道を伝えていくためにも、手に手を携えて、ともどもに協調し研鑽してその実を挙げたいと思うこととございます。

先般、総本山知恩院布教師会の中央研修会でも申したのですが、この次の活動目標は八百年御遠忌ということになっております。それは一つの目標として当然であり、非常に結構ですが、私にはどうも空回りしているように思えるのであります。

その前は選択集撰述八百年でございました。或は三上人遠忌・開宗八百年とその都度に目標を掲げ、大きな看板が出されてさまざまな記念事業・行事が計画され実行される。すべてそれなりの意義はあるのですが、その年が済めばそれで終いで、あとはもう忘れ去られてしまいます。「選択集」をご撰述になった宗祖の偉業は八百年であろうがなかるうが、平素にいつも戴いて『選択集』を学習し、そのご精神に随順してまいらねばなりません。実際のとこ、もう選択集撰述八百年のことをおっしゃる方も、三上人顕彰を叫ぶ声も殆ど聞かれません。このたびも八百年御遠忌とうたい、そのための始動が見られますが、こい希くは一発火花に終わってほしくないという思いで一杯です。宗祖や各祖師方がお念仏のみ教えを弘めてくださったご苦

勞に報いる道は、コツコツと倦むことなき布教をする以外にありません。宗侶一人一人の三業説法、もちろん大切です。その上に五重相伝を開筈してくださるお寺が一カ寺でも増えれば、どれほどか教化が進むことでしょう。我々のその熱意が、実は浄土宗の生命線であると思うことでございます。

もう一つ付け加えますと、選択集ご撰述八百年（平成十年）の前年、平成九年は法然上人が得度されて七百五十年の記念すべき年でありました。さまざまな因縁をいただかれて久安三年十一月八日に得度されたのでありますが、私はこの得度がなければ、のちの浄土開宗もない。これは当り前のことですが、非常に重い意味をもつ出来事だと思っております。その日が若き宗祖の正式の僧としての出発点でありました。たとい父上の遺言があったとは言え、色んな道を選べたはずの人生を、墨染めの衣に身を包んで出家された。孤独の中での決意が如何なるものであったのか。そのお心は私たち凡愚の計り知る由もないところでありますが、少なくともこの得度があつての開宗であり、『選択

集』撰述でありました。だから平成九年には布教の先々で、このことをお話し伝えさせていただきました。法然上人のそうしたお姿とお心を偲びながら、私たちも布教への情熱を今一度燃え立たさねばならないと思うのであります。

前置きが長くなりました。さて、五重の精髓の源は勿論宗祖の自内証に求めることができますが、その組織立てをされたのは第七代了誉聖岡上人であります。書伝などをもってされていた伝法を聖岡上人は、そのときの浄土宗の社会的立場など、いろいろなことをお考えになった上で、只今見るような五重相伝の形で示してくださいました。即ち『五重指南目録』一卷は弟子西誉聖聡に授けた「伝法口伝の簡条書き」であります。初歩的なことを申します。が、初重は『往生記』一卷、二重『末代念佛授手印』一卷、三重『領解末代念佛授手印鈔』一卷、四重『決答授手印疑問鈔』二巻、そして第五重としては『往生論』にご指南をいただきます口授心伝、こうした形を整えてくださいました。

口伝としては

初 重……………四箇条。 知り残しの伝……………一箇条

二 重……………三七箇条。 云い残しの伝……………一箇条

三 重……………一箇条。 書き残しの伝……………一箇条

四 重……………二箇条。 云い残しの伝……………一箇条

第五重……………六箇条。 書き残しの伝……………一箇条

このように本口伝として合計五十箇条、そして知り残し・云い残し・書き残しが合わせて五箇条で、総計五十五箇条の口伝を伝え残されたのであります。

また、聖阿上人は初重から四重までのそれぞれに注釈書をおつくりになりました。所謂「末書」であります。それについては後に少し触れたいと思います。

聖阿上人以後、時代によって幾多の変遷を見ましたが、この五重の精神は脈々として今日に伝わる浄土宗伝法の根幹と云えましょう。伝々相承の信行の要は悉くここに収まります。大聖釈尊の出世の本懐、善導大師の古今楷定、法然上人の念仏為先という師資一徹の流れを受けて、その法

雨に浴することは悦びの中の悦びであります。

宗脈を受けるといふことは、わが信仰の証しであり、絶対帰依の姿と申せます。浄土門の先達はその感激をもって念死念仏の用心を常とし、日課相続の不退を旨として祖意に酬い、宗風を宣揚してくださいました。私たち末流末葉もまた、仏祖直伝の伝灯仏子としての自覚と伝弘の重責に思いをいたし、「現代社会に他力の法門を開顕する最善の方途は結縁五重以外にはないのだ」という確信をもって、一層の精進をせねばならないと思うわけでございます。

その結縁五重は、ご承知のように三河大樹寺の勢誉愚底上人が松平親忠公に伝授されたのが始まりであります。愚底上人は非常に立派なお方で、後に知恩院にのぼられた程のお方です。聖阿上人が付法されて以来、宗侶を対象として口伝ならびに血脈の授与が行われてきた歴史からみると、お在家に対するご伝法は画期的なことです。しかしこれが続いた訳ではありません。例えば「元和定目」など、在家信者に対する相伝禁止のご法度がたびたび出ております。けれども裏返しにみると、実際には陰で行われて

いたと申せます。ただ資格のない者や、今道心のような者が陰にかくれてお在家に授けていたこともあったようですから、ご法度が出てお仕方のない面もあったと思われれます。そして江戸末期から明治時代に入って、ようやく各寺院で、今日見るような結縁五重が定着してきたのであります。

結縁五重の期間は、昔は一週間でした。今日では殆ど五日間ですが、滋賀県のある地方では只今も七日間です。私は今月も滋賀県にまいります。一週間で勸誡は六日、約二十二席の法説であります。その間にお経さまを読み、礼拝をし、お念仏を称え、そして勸誡を聴いていただきます。それが五種正行の実践であり、勸誡で聴く法門がそのまま至誠心、深心、廻向発願心、つまり安心の確立になります。同様に四修、即ち恭敬修、無余修といった種々のふるまいも、おのずからその期間を通じて備わってまいります。

また入行時には「道場清規」の厳守を約し、会中に剃度式を受けて仏弟子としての自覚をいただきます。お寺によつては前行最終日の夜に「懺悔道場」で業障を懺悔し、

正伝法に臨むに当たって「浄土宗白旗流義安心相承制誡（白旗式定）」の血誓を行います。しかる後の要偈・密室両道場ですから、まさに「血脈を白骨に留め、口伝を耳底におさめる」ということでございます。

伝法道場に坐るといふことは、先に申したように絶対帰依の姿でありますから、一声一声のお念仏はまた阿弥陀仏に対する絶対帰依の呼び声に他ならないのです。

では、次に伝書について少し申しあげます。ご存じの方はどうぞ聞き流していただきたいと存じます。初重は『往生記』でございます。

（資料参照）

本日は在家向きのテキストで説明させていただきます。非常に詳しいテキストを用意される勸誡師さまもいらっしゃいますが、余り詳しく書いておきますと活字のほうにばかり目が行つて、耳がお留守になってしまいます。野島宜道先生などはテキストを一切用いられず、受者の目や心をご自分の方に集中させてお聞かせになっておられました。しかし、それでは余りに分かりにくいこともございま

しようから、私は最小限に留め、後は聞いていただくようにしております。

それでは、初重の部分をご覧ください。「往生記」一卷、法然上人作。「これを機と伝える」とありますが、第一番目には「難遂往生の機」十三通り。次に「四障四機」。その次に「種々念仏往生の機」となって、これが五種二十六通りでございます。

「難遂往生」とは「往生遂げにくい」という意味です。至誠心が欠けたり、深心が欠ける、あるいは廻向発願心が欠け、また三心が全欠する。そういうお方を「難遂往生のお人柄」とされました。二番目を後回しにして第三番目には「種々念仏往生の機」、つまり往生を遂げることのできる、いろいろのお人柄を挙げておられます。一が「智行兼備念仏往生の機」で、智慧も行も整って念仏して往生なさるお人柄。二が「義解念仏往生の義」でわけがらが分かって念仏して往生する人。三が「持戒念仏往生の機」で戒をたもってお念仏を申す人。つぎの四は「破戒念仏往生の機」、戒を破ると云えば悪く聞こえますが、破る戒を一度はた

もっていたのですから、これはこれで大したお方です。例えて申しますと「財布を落とした」ということは、「落とす財布を持っていた」ということです。ですから「破戒」とは「一度は戒を守っていた」から言える言葉です。私たち愚鈍の身は、戒を破るところか、やぶるべき戒をたもつたこともない。つまり「落とす財布をもっていないかった」のです。破る戒を持っていなかった私たちは、もちろん智行兼備でもなければ、義解の人柄でなく、持戒・破戒でもない。五の「愚鈍念仏往生の機」これこそが凡夫の私が結着するべく示された救いの道であります。

今申しました「難遂往生の機」と「種々念仏往生の機」、合わせて三十九通りを、まとめてご指南くださったのが第二番目の「四障四機」とお受け取りいただきます。

四障とは往生の障りとなるものが四つ、四機とは往生を遂げさせていただく四つの条件、人柄とでも云いましょうか。疑心・懈怠・自力・高慢という四つの障りと、信心・精進・他力・卑下という四機でございます。戒定慧の三学の器でない凡夫、難行のかなわぬ愚鈍の身、その生まれつ



きのままでご本願の救いにあずかるのですが、四障の人柄にだけはならないように。どうぞ四機<sub>||</sub>阿弥陀さまの誓願を深く信じ、お念仏に精出し、お他力を喜び、慢心を慎む<sub>||</sub>これだけはしっかりお心得なさいませ、ということであります。

従って、「種々念仏往生の機」の中でも浄土宗では「愚鈍念仏往生の機」をお正客といたします。就中、その代表的なお人柄として

善知識の教えを聞いて一向に信を生じ、威儀法則を弁ぜず、行住坐臥を論ぜず、日夜念仏して、久しくその功を積んで往生する人  
とご教示であります。この辺は実際の勸誡ではもっと詳しく申すところです。

その次に「和字段」と申しまして、和語で書かれた一節がございます。それが「一紙小消息」であります。以上が『往生記』のあらましです。

次いで、二重のお書物は「末代念佛授手印」で、聖光上人の御作。行と（法とも）伝えます。法然上人滅後の邪義

の流行を嘆かれまして、安心・起行・作業などについての正しい意味合いを伝えてくださったのであります。一念義、寂光浄土義、西山義などさまさまな邪義が流行つてきたため、「これではお師匠さまの本当のお心が失われる」と二代さまは、熊本の往生院におきまして二十数名のお弟子たちと、四十八日のお別時をなされ、その間にお書きになったのが本書であります。

内容は、まず最初に「袖書き」がございます。「表紙書き」とも申しまして、ご存じの「伝法要偈」――四句の偈文であります。これにもいろいろ問題がありまして、「究竟大乘」にかぎったものではなく、他の文が袖書きされてあるものがございます。しかし、今日は時間がないのでその問題に触れることはいたしません。

その次が「序文」です。「夫れいれば九品を宿とせんにはく」という有名なご文ですが、これは「要偈道場」で拝読しますから十分に読んでおかねばなりません。

続いて「末代の念佛とは、浄土一宗の義を知って、浄土一宗の行を修する、首尾次第條の事」というご文があり

ます。これも大切な意味をもったご文です。

次がいよいよ六重二十二件五十五の法数についてのご教示です。大別して五種正行・助正分別・三心・五念門・四修・三種行儀の六つになりますから「六重」であります。それを細別しますと二十二件となります。更に細説して讚歎供養正行に二、至誠心に十二、深心に八、廻向発願心に八、それに横三心・豎三心と二、恭敬修に六、と全部併せまして法数が五十五になります。この懇切なお指図をしつかり学んだ上で、実際の勸誡では、受者に煩瑣を与えない意味で、五念門も省略し、十七件について詳説するのが常ではないでしょうか。

次が「奥図」です。「三種行儀」のすぐ後に出てまいります。この「奥図」を粗略に思われる向きがあつてはいけませんので、この機会に少しくわしく申しあげたいと思います。例えば、「三心」の横に小さい字で「南無阿弥陀佛」と書かれてあります。「至誠心」の横も、「深心」の横にも同様「南無阿弥陀佛」と記されています。これをどう読ませているのか、ということでもあります。

見菩薩悦上人の「五重始末」(『浄土傳燈輯要』207頁)には「奥図の口訣」に総・別の二種ありとして、ご教示であります。口訣のものですが、現に活字になっているのですから、ここで申しても許されることでしょう。即ち「総の口訣」としては、

念佛の為の三心なれば、三心も南無阿弥陀佛なり

念佛の為の五念なれば、五念も南無阿弥陀佛なり

念佛の為の四修なれば、四修も南無阿弥陀佛なり

念佛の為の三種なれば、三種行儀も南無阿弥陀佛なり

「別の口訣」としては、

念佛に於て偽り飾らざれば、至誠心も南無阿弥陀佛なり

り

念佛に於て深く信じて疑わざれば、深心も南無阿弥陀佛なり

なり

念佛を以て往生に廻向すれば、廻向心も南無阿弥陀佛なり

なり

念佛行に於て貴く殊勝に思えば、恭敬修も南無阿弥陀佛なり

佛なり

念佛行に於て餘を雜えざれば、無餘修も南無阿弥陀佛なり

念佛行に於て退転なく之を修すれば、長時修も南無阿弥陀佛なり

念佛行に於て隙なく之を修すれば、無間修も南無阿弥陀佛なり

五念門は省略しますが、

念佛を以て別時に之を修すれば、別時行儀も南無阿弥陀佛なり

念佛を以て常に修すれば、尋常行儀も南無阿弥陀佛なり

念佛を以て臨終に之を修すれば、臨終行儀も南無阿弥陀佛なり

源空が目には三心も四修も五念も三種行儀も皆俱に南無阿弥陀佛と見ゆるなり

奥図口傳の趣 総別十九箇條此の如き也

と「奥図」をいただくのであります。つまり「二重」の結

論は、

結歸一行三昧心存助給口称南無阿弥陀仏

と云うことです。結局は一行の三昧に帰するのである。それはどういうことかと申しますと、「心存助給口称」つまり心に助け給えと思ひ、口にお念仏を称える。ここに決着するのであります。

次に「手印」でございます。手印は一つには「証拠」のため、二つには「手次」のため、と云われています。先の「五重始末」には「授手印」について、

口傳に曰く、凡そ授手印得名の本據は、觀經（授手迎接）の言を模するなり。此の授手印の相承は佛祖代々寫瓶異途なき印治決定の手繼なり。能く能く口傳を聞くべきなり

と述べておられます。「授手」とは「觀經」の「み手を授けて迎接し給う」に依ると典據を示され、「印」とは代々相承に誤りのないあかしであり、「手繼（手次）」であるとされているのであります。参考までに申し述べておきます。

この後「裏書」などがございますが省略いたします。

ここで二代さまのご遺跡の顕彰について触れたいと思います。二代さまのご遺跡は大本山善導寺とか英彦山とか枚挙にいとまありませんが、今は「二重」のお話でございすから、往生院のことについて申し上げます。只今の往生院は熊本市池田町でありますが、もう一つ「旧の往生院」というのがございます。熊本市大江町二丁目にある「阿弥陀堂」と呼ばれているのがそれです。すぐ横には「授手印」の序に云われている白川の清流があります。こは今は浄土宗のものではありません。私も訪ねましたが、この旧跡を何とか浄土宗で復興したいものです。九州のお方に力を出していただいて、或は一宗の熱意でお守りできたら嬉しいと思います。小さなお堂が建っていて、二代さまのことが書かれてある謄写版刷りのパンフレットを下さいます。こが浄土宗のお寺であればなアと残念に思いました。

話のついでに、二代さまご誕生の地が吉祥寺となつています。そこに二代さまのご両親のお墓がございます。ご誕生の日が母上ご他界の日。まことに悲しい母子の縁であり

ます。私たち布教師は実際にそうした土地に足を運び、祖師の面影を偲び、その芳躰に触れることも大切かと考えます。

三重のお巻物は『領解末代念佛授手印鈔』で三代さま良忠上人の御作。これを「解」と伝えます。ご承知のとおり、三代さまは二代さまにお目にかかれた翌年の四月、善導寺において伝法を受けられました。七月六日には三代としての念仏弘通を付嘱され、八月一日に「授手印」を頂戴、血脈手次状を稟承され、三日後にはこの『領解鈔』をお書きになつてお師匠さまにお見せしたのです。

嘉禎三年八月三日 善導寺に於て之を草記する処なり。  
上人まのあたり之を見たまいて合点したまい畢ぬ

#### 〔領解鈔〕

上人が合点された。二代さまが「よくぞ、ここまで解つてくれた」と心底からうなずかれ喜ばれたのであります。

その内容は、『授手印』に示された六重二十二件についての、問答釈義をくわしくお述べになったものでございす。即ち、五種正行に関する問答が六つ、助正分別につい

ての問答が二つ、三心の四句分別についての問題が本末十六種・六十四句、四句の相互関係についての問答が十一、その他に五念門・四修・三種行儀の名目の典拠について述べておられます。これを要するに三代さまの結着は「三心五念四修皆是れ称名」ということになるのであります。

実際には『領解鈔』を手になされてお読みいただきたいと思いますが、なかなかこれが難しいうございます。また話が横道に逸れますが、一、二年ほど前に総本山知恩院布教師会の第四回布道場（三年間）が開催されました。そこで私が五重を担当いたしました。二年目にはこの「三巻書」の講読で、最初から一句ずつ、読んで解説させていただいたのです。こうした勉強はなかなか厄介なものです。が、その時思いました。「思う」というより「せねばならない」。「原点は原典にある」ということです。原典をしつかり読み直さねばなりません。近頃は五重のお話でも、録音テープからおこした「話言葉そのまま」の「勸誡録」がたくさん出版されています。いろいろな布教師さまのお話の仕方や教材が頂戴できて、そういう面では参考になりま

しょうが、それだけでは勸誡の勉強になりません。それによつてテクニクは覚えることができるかも知れないけれど、十四、十五席分のお話は氷山の一角です。勸誡をなさるお方は、相当地に深い勉強をしておられます。これも伝えたい、あれも説きたい、しかし席数・時間の制限があるものですから、省略して、省略してお話を進めてまいります。「勸誡録」だけを読んで「あ、こんなことを云えばよいのか」と安易にお受け取りいただくと、少々横着と云わねばなりません。私どもがお話させていただくその奥に、經典があり、祖師方の御苦勞の末の論釈・典籍があります。氷山の海の上に出た部分も大事だけれど、水中にかくれた大きな塊をそれをつかり自分のものとして頂戴するには「原典」にいつも接して、本物の栄養を吸収する必要があります。

だから我々は、お念仏の原点を知るために、さらに「原典」を読まねばなりません。そういうことで総本山の勢至堂慈教殿に籠もつての数日は有意義な日々でした。

話をもとに戻しまして「三心五念四修皆是れ称名」三

代さまのこの結論を「一枚起請文」で申せば、「但し三心四修と申すことの候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ううちにこもり候なり」。そうして「ただ申す」のであります。「唯往生極樂の爲には、南無阿弥陀仏と申して」とございますが、その「唯」の一字の中に「領解鈔」のご精神を汲み取るのであります。

ここで先ほどの二代さまと同様、三代さまのご遺跡にも足を運んでいただきたいと思ひます。お若いときに「修行なされたみ跡も数々あり、当然のことながら関東には大本山光明寺をはじめ多くのゆかりの土地がございますよ。

今日は関東のお方が大半を占めておられると思ひます。少し遠くて行きにくいでしょうが、ご誕生の地に建てられたのが「良忠寺」です。石見の国（島根県）三隅、杉の森という在所でお生まれになりました。只今の「良忠寺」は山陰線の益田から東へ四つ目の美保三隅という駅で下車いたします。島根県でいえば西部ですが、まことに静かなところですよ。やはり、実際にお寺に参つて祖師を偲んでほしいです。尚、益田から西のほうに長門「三隅（山口県）」という

駅がありますから、お間違えのないように願ひます。

三代さまの出自は名門貴族藤原氏の流れをくむお家柄です。信仰のあつたご家庭で、しばしば僧を招いて仏法を聴聞するといふ雰囲気の中でお育ちになりました。

そのせいか、十四才にして次のようなお歌を詠まれたそうですねであります。

五濁の憂世に 生まれしは うらみ かがた 多けれど

念佛往生と 聞くときは かえつて 嬉しく なりにけり

まことに「梅檀は双葉より芳し」の感を深くいたします。次に四重は「決答授手印疑問鈔」二巻で、同じく良忠上人の御作。「證」と伝えます。良忠上人が安心・起行などについての在阿の疑問にお答えになつたものでございます。

「決答」とは決定明答の意といわれています。在阿さんの質問に疑う余地のない明解な答えを出されたと云うことです。さき程は申し忘れましたが、『浄土傳燈輯要』など

を拝見しますと三重の「領解」とは「領納解知」のことであると解説されています。三代さまが『末代念佛授手印』をこのように領納解知されたというのですね。今こちらの方は「決定明答」であります。

この疑問を出されたのは周東(ストウ)の在阿という天台の僧であります。一昨日から昨日にかけての「総合学術大会」で、ここにおられる佐藤上人が在阿さんに関する研究発表をされましたから、私よりお詳しいと思いますが、『七巻書講録』に

上総国の中に周准郡(スエのコオリ)と云う有り。この郡の中 東西を分つ

とありまして、周准の郡に東と西があつたのですね。その東の方ですから、東周准、それで「周東」というわけです。今日では「ぼすたるガイド」で探しても周東という地名はございません。

そこに在阿さんがいらつしやつた。そして、他力の道を求められました。当時の関東には西山流(弘願義・長樂寺流(多念義)・九品寺流(諸行本願義)などが流行っ

ておりました。そのため『授手印』で読んだこととは違います。確かなところを誰かに教えていただいて決着をつけたい。遠江の蓮華寺の禅勝房や相模国の石川の里の渋谷道遍などを訪ねますが、納得の行く答えが得られなかったのです。

そうしたなか、ただ今関東に三代さまが居られるとわかり、「手には手印の疑問をささげて、口には口伝の決答を請う」と、結核の身で、血を吐きながらお訪ねになりました。それに対する三代さまのお答えがこのお書物であります。

三代さまは「然阿、齢い六旬に逼りて、目闇く、手振う。然りと雖も来問の志を感じ、利生の多からんことを思うて余寒の風を凌ぎ」とおつしやいました。昔は障子と襖だけで、暖房もありませんから、随分寒かったことでしょう。続いて「頽齡の筆を走らし、先聞の趣を載せて、後輩の疑問を答え畢んぬ」と。

本当に問うほうも、答えるほうも、命を掛けてのやりとりです。そういえば二重のお巻物の序文にも感激させられ

ます。また書き終わったところで聖光上人は「無からん時の形見にも」と云われました。涙がこぼれるほど有り難いお言葉であり、後世の私どもに尊いご指南を残してくださったのであります。

内容は、数える人によつて七十九とも八十とも、八十一とも云われます。なかに出てくるものを「これも質問の一つに加えよう」とすれば八十一になる。「それとこれと一緒にしよう」とすれば八十の問答です。ですから、そういう解釈は先生がたの数え方によつていろいろで、勘定の仕方によつて変わります。そこで私は、約八十の問答と申ししております。一番無難な数を取りました。私の性格そのものでございます(笑)。

お手もとの資料にありますように、上巻には、「末代念佛授手印」について「一・法然上人滅後の異議について」一・「五種正行について」五・「一心専念の文について」四・「この文に種々の義あることについて」六・「助正分別について」二となつておりまして十九の問答形式になっております。下巻では「三心について」五十六・「五念門につい

て」一・「三種行儀について」三・「奥図の疑問について」一・「善導寺上人の日課とご臨終について」一の、六十二項目。総計八十一の質疑と応答であります。

このお書物は、お念仏を実践する上で起こってくる疑問についての、明確なお導きであります。結縁五重におきましては、その中の一つだけをお取り次ぎいたします。即ち「三心処」の中の一章、「一向疑心句ノ下ノ註、一分往生ノ事」に示された問答のうち第四番目の問答で、このお書物を代表する重要な問題が含まれております。

それが二枚目のテキストに出ていきますように、何が故に三心具足の上に現世の貪瞋は強盛に起こり後世の心行は尚弱く覚えるや

という問いかけと、それに対して三代さまは、

貪瞋は無始より慣れ習いし法なり。故に強し。願生は今生に始めて励ますの心なり。故に弱し。他力の本願この時に当たつて利益を施すなり。二河の譬釈よくよく見合ふべきなり

とお答えになつておられるのであります。



「貪・瞋・煩惱をこ心配なされますな。お他力の本願は、どんな愚痴・罪惡の衆生をもお見捨てにはなりません。あなたも存じの善導さま散善義のあの二河白道のお譬えをもう一度よく思い直して「ごらんなさいませ」というご指南であります。

これはお念仏の生活をする上において起こる疑問であります。真剣に取り組めば、取り組むほど起こる疑問です。「授手印」深心の項に四句分別がありますが、その一つに「一向疑心」の問題がございます。一向疑心は「決定して往生を得ざる人」とありますが、続けて「若しはまた一分の往生あらんか」ともご指南であります。決定して往生ができないのに、一分の往生が可能である。これはどういふことかと申しますと、「諸惡の心、謝罪の念い、数々発起し、数々發動することは、本より煩惱を具するの凡夫なれば力及ばざるところ」であります。「唯仏の願力を信じて固く本願往生の念仏を憑む」とき、「一分の往生」にあらずかって「一向信心」の人と同様に往生を決定させていただく、ということであります。

私は実際の勸誡にあたり二河白道では、

(1)おのが煩惱(貪水と瞋火、黒雲に象徴される愚痴)に気付き、

(2)本願を憑んで決定の信を起こし、

(3)お念仏の白道を渡り切る、ということを強調してまいります。

四重のお巻物では最後に聖光上人より伝聞した、法然上人の次のお言葉をもって結語とされています。

まず名号を唱うれば、名号の徳として妄念も自ら止み、願心も自ら生ずるなり。いかに況んや、本願の元意は乱心とどめ難きものを化せんがためなり。妄念とどめ難きにつけても、一向に本願を仰ぐべし。散乱の静まり難きにつけても、一向に名号を唱うべきなり

この問題に関連のある法然上人のご法語は沢山ございます。

例えて申しますと、「欲界散地に生まれたるものは、みな散心あり」『明遍僧都との問答』に出てくる目鼻のお話です。この世に生まれた者は、誰でも目があり鼻があ

る、目があれば嫌でも目に見え、鼻があれば匂いがわかるし、耳があれば聞こえてくる。お念仏していても、赤ちゃんが泣いたらその声に心が乱れる、御飯が焦げていたらその匂いが気になって、なかなか一心不乱になれない、それはどうしようもできないことではないか。この源空とて同じことですよ。心が散ることなく念仏せよというのなら「目鼻を取りて念仏せよというが如し」と。

散心を捨てて往生せんといわんこと、その理(ことわり)しかるべからず

散心ながら念仏申す者が往生すればこそ、めでたき本願にてはあれ

この類のご法語は、その他に『浄土宗略抄』「百四十五箇条問答」「十六門記」「禪勝房伝説の詞」など、さまざまに出てまいります。ご参照いただきたいと思えます。

ここでまた、四重にまつわる祖師のみ跡を慕いたいと思えます。四重は関東に出られましてから、約十年を経過してのお巻物でありますが、その関東へお出ましには、どの道筋を通られたかとの思案です。こんなことは考えなくて

もよいのですが、考えてしまるのが私の癖です。京都で勢観房源智上人のお弟子さんとお話し合いをされてから伊勢へ行かれ、それから善光寺に参詣されて関東に入られます。きつと今の中山道の木曾路を通って、信濃追分あたりから善光寺へと、あらぬ想像をたくましくいたします。暇人ですね。(笑) 真実のことはわかりませんが、祖師のそうしたご苦勞の跡を辿ってみる。電車も車もない昔。トボトボ歩いてです。背に荷物もあったことでしょう。衣も破れてくるでしょう。昔の人はえらかった。大したものだと思ふのです。関東に鎮西流がひろがったのは、そのお陰です。時にはこういうことを考えるのも必要かと存じます。

第五重は「往生論註」にご指南をいただく「口授心伝」「十念の伝」であります。これは「信」と伝えます。『往生論註』は、くわしくは「無量寿経優婆提舍願生偈婆娑槃頭菩薩造娑註」と申し、略して「論註」、二巻でございます。曇鸞大師の御作です。

この伝は真の愚鈍念仏者の生まれますことを願つての最後の総仕上げであり、伝法道場(密室)において伝灯仏子

が、儀式をもって口伝し、受者の心底深くにお伝えするものであります。

これも実際に『論註』を手にしていただきたいと思えます。巻上の終わりに近いところですが、回向門（八段細釈）の第八「念数の記不記」の段にあるご指南によって口授が行われるようになりました。

問うて曰く、（前略）若し心の凝し想を注めば、復た何に依りてか念の多少を記することを得べけんや

答えていわく、経に十念と言うは、業事成辨を明かすのみ。必ずしも頭数を知ることがを須いざるなり。（中略）若し必ず知ることを須いば、亦方便あり。必ず口授を須て。之を筆点に題することを得ず

別に十声のお念仏に執らわれるわけではありませんが、『観経』に「令声不絶具足十念称」とあり、『大経』の第十八願に「乃至十念」とあって、如何なる罪悪生死の衆生も「業事成辨当果無碍の位」に救われるのですから、別して「十念」を有り難くいただくのであります。しかし、阿弥陀仏に心を集注すれば、十念の数を誤り、反対に十の數に

執らわれると、阿弥陀仏を専念できない。しからは、どうすれば十念の数を満たし、同時にみ仏を凝思できるのか。

その回答が「方便あり、必ず口授をまて」ということであります。勿論、先に申したように、阿弥陀仏の本願はお念仏の数を云々されるものではありません。従つてこの口伝を受けることによって、凡夫ながらに決定往生の信を確立することが、何より大切であります。

曇鸞大師はまた、『論註』の同じ回向門第六「善悪校量」の段で「三義校量」のご指南で、私たちが持つであろう疑問について答えておられます。これは「在心・在縁・在決定」の三義であります。時間がないので、ほとんどの勸誠では申しませんが、また申しても難しいので、受者の方々にすんなりと理解してもらえないかと思ひます。それでただ一つ「千年暗室の喩え」明来暗去」を伝えます。虚妄顛倒・造罪を重ねてきたわが心を千年の暗室に喩え、阿弥陀仏のお慈悲を受けて申す十念を闇を否定する光明に喩えて、直ちに撰取される功德を説くのであります。

以上で五重相伝のあらましを申しましたが、もう一・三

の問題について触れたいと思います。一つは後に説明を譲っておきました「末書」のこと、二つには「道右感左」について、三つには「懺悔道場」の暗説。時間の許される範囲で申し上げます。

まず「末書」ですが、末書とは浄土宗伝書の注釈書の全部を申します。けれども、ここでは「五部七卷」、所謂「七書」といわれておりますもの、こうしたお書物にも、一応ずうっと目を通していただきたいと思ふこととさせていただきます。

『往生記投機抄』一卷（聖問述） Ⅱ 『往生記』の末書です。

「我が門の意は東西を辨えず黑白を知らざる愚鈍の族を、只助給南無阿弥陀佛の口称の一行に修し入りにて、仰信の体を佛知即相の眼より見れば、当体を即本来本有の投機と之を習う」と。

『授手印傳心鈔』一卷（聖問述） Ⅱ 『授手印』の末書です。

「心とは安心なり。謂く、一宗の安心の趣を稟承するが故に、傳心と曰うなり。是れ即ち宗義の行相、悉く吉水の相傳を承つて製作する所の手印の末鈔な

り。故に傳心と云う」と。

『領解授手印徹心鈔』一卷（聖問述） Ⅱ 『領解鈔』の末書です。

「授手印相傳領解の趣、心肝骨髓に徹して、この鈔を製し給う故に……」と。

『決答授手印疑問鈔』二卷（良忠述） Ⅱ 『授手印』の末書です。四重のお巻物です。

『決答疑問銘心鈔』二卷（聖問述） Ⅱ 『疑問鈔』の末書です。

「一家相承の旨、心肝に銘じて、止むことを得ず抄する故に銘心と名付くるか、是れ則ち利劍に銘を刻するが如し。相傳は実に肝に銘ずるの謂いなり」と。

このほかにも沢山の末書がございますから、勉強の種はつきません。

次に「道右感左」について簡単に申し上げます。これは面上十念の口伝の問題です。道とは緑山九代道誉貞上人、感とは緑山十代感誉存貞上人のこととあります。道誉

流は右から、感譽流は左から、これはもうご承知のとおりです。しからば何故そうなったのか。伝法の上で、西譽聖聰上人から高弟嘆譽良肇上人に伝わった流れがありまして、その良肇上人の系統の中に道譽貞把上人がおられます。これがここで云う道譽流であります。一方で西譽聖聰上人から、同じく高弟である聰譽西仰上人に伝法された流れがあり、その系統に感譽存貞上人がいらつしやいました。ですから、同じ増上寺の九代・十代であっても、伝法の流れ・系統が違うということになります。

そこで聖聰上人から良肇上人に伝法なさるときは、『觀經』の「眉間白毫右旋婉轉」の文に典拠を得て、右から始められたということが故実になっています。

また、聖聰上人から西仰上人に伝法なさるときは、天親菩薩の『往生論』を典拠とされたようであります。『往生論』は「偈頌」と「長行」から成っていますが、偈頌の初めのほうに「宝性功德艸 柔軟左右旋（宝性功德艸は柔軟にして左右に旋れり）」とございます。これは「左右」ですから、左から始まるという古伝で、感譽上人の方の流れ

になつてゐるのであります。

しかし、「左右」のいずれが勝れ、或は劣つてゐる、というものではないと思ひます。順阿隆田上人の「吉水瀉瓶訣」第三、宗脈分第四の総口伝の段に

五重の十念は既に十念相統の為にこの方便を設く。故に知んぬ。口称名号を正と爲し、擬思相好を助と爲す。助正異なると雖も、終に一意を成す。何を以ての故に。名体離れざるの故に。

また『同書』第四の用心念仏の段にも

即ち口称の爲にして相好を縁ず。故に称名を正と爲し、擬思を助と爲す。

とあるように、五重の安心が肝要であり、口称名号の相統が究極であります。従つてご自分の授かつたご伝法に随順して、一向専念することが大切であります。

続いて「懺悔道場」の暗説についてお話いたします。懺悔道場に関心のある方が二・三おられるようです。殊に勸誠師は「暗説も頼みます」と依頼されることが多いですから、その覚悟で参らねばなりません。懺悔道場にもいろいろ

ろあって道場の様子も一樣ではありません。ある地方では、導師は内陣から外陣向き、勸誡師は下陣で受者の後ろから暗説します。また、ある地方では内陣から外陣に向けて暗説いたします。いずれにしても受者より先に入堂して、受者の入りおわるのをお待ちします。真の暗闇で「座見」の僧が受者を誘導し、全員着座すると「以上、座見終わる」と合図がありますから、割笏を一下し、暗説を始めるのであります。約十五分くらいで終わるのがよいと思います。今日はもう持ち時間がありませんから、簡単ですが実演の真似ごとをしてみましょう。

— ● 印は割笏 —

● 諸衆等、まなこをとじて心静かに聴き給え。普く現前の善男子善女人の三障を断除して、同じく阿弥陀仏国に往生を得せしめんが為に、今懺悔道場の要諦を説かん●

衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心●

この道場に三つの伝あり

第一 無明長夜 六道輪廻の表示●

付けたり金打のこと

第二 二河白道 二尊遣迎の表示●

第三 懺悔細釈●

第一 無明長夜 六道輪廻の表示●

日は暮れて 月もまだ出ぬ 闇の夜に 宿も定めぬ

身こそつられ

もうお日さまも西に落ちて、辺りは暗いというのに、まだお月さまも出ていらつしやらない。誠に心細い限りでございますが、その暗闇の中に、今宵泊まる宿もまだ決まっていないという、不安で、心の定まらぬ状態。それが只今の我々、皆さま方凡夫の姿であります。無明長夜とは明るくない、暗くてしかも長い夜。すでに勸誡で申しましたように、愚痴の心を無明とも云います。暗い心—何が暗いかと云いますと「ものの道理に暗い」のであります。たくさんある煩惱の中でこの愚痴—無明が根本です。その煩惱に振り回されて今日まで過ごしてまいりました。その姿を昔から六道輪廻と云うのであります。六道とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上です。迷いや悩みの中で、六道を輪廻して五十年、六十年、思えばまことに恥ずかしい限り

であります。しかしながら、この度は五重の勝縁に違ひ、尊い四日間の前行を積んで、只今この道場にお入りになりました。暗闇の中をお手引きくださいました僧の方を菩薩といただきます。手にした一本のお線香の明かりは、かそけき光ではありますが、この度やつと我が心に宿ったお念仏の信心であります。難しい言葉では「能生清淨願往生心」と申しますが、憂世の濁りに汚されない、清らかな願心、往生を願う心であります。お線香の小さな光に表象される信心——しかし乍らその光は、阿弥陀仏の大慈悲のみ光であり、お念仏が進むにつれて、もっと大きな光明をいただく身となるのであります。

或はまた、み仏さまの光明に照されることによって、ますます我が業障に気付かせていただけます。「松影の黒きは月の 光かな」。月の光で黒い影ができるように、み仏の光明によって我が影（煩惱）の醜さに気付きます。そして、いよいよお念仏に励むのであります●

金打は、阿弥陀さまとのお約束のしるしであります。昔、武士と武士の約束には、金打をもっていたしました。

それになぞらえて鉦鉦を打ってもらいました。一つには書院式でお読みしました「白旗流安心制誠」を守る約束、二つには「常懺悔」の約束、三つには退転することなく「お念仏を相続」する約束であります●

### 第二 二河白道 二尊遣迎の表示●

（時間の都合で省略しますが、四重の勸誡でお話しした一河の警えを、軽く再説。今この道場も、導師と勸誡師が二尊遣迎の形をとっていることを説明 等々）●

——但し、二尊遣迎を説示できない道場のしつらえもあることに注意——

### 第三 懺悔細積●

（これも省略しますが、教材をすこし列挙しておきます）  
「一人一日の中に八億四千の念あり。念々の中の所作皆三途の業なり」

「三障」 業障・罪障・煩惱障

「人にこそ 包みながらも 省みて うら恥ずかしき わが心かな」

「自ら罪ありと知らば 当に懺悔すべし 懺悔すれば

即ち安楽なり 懺悔せざれば 罪ますます探し」

「罪ある者は懺悔せよ 懺悔すれば即ち清浄なり」

「念々の称名とは 常の懺悔なり」

暗説のあらましは、このようであります。真つ暗闇の道場に入つて、足もともおぼつかない不安な気持、しかも一切無言の中で着座、暗説を待ちます。これは「独生・独死」  
「つまり「生まれてくるときも一人、死んでいくときも一人」という心です。暗説が終わると、勸誡師はソツと退堂します。（このため予め退堂のための打ち合わせをしておかねばなりません）退堂する頃に燭をともし、「光明道場」にかかります。

尚、勸誡についてですが、資料に時間表のサンプルと、私の使っているテキストを添えておきました。勸誡を志す方は、必ずご自分なりのカリキュラムを作ってください。一週間の五重で二十二席ぐらい、五日では十四・五席です。

中には無理をおつしやるご寺院があり、「三日で五重を

したいから、六席で」と申されます。忙しい現代社会ですから、その気持ちは分からぬではありませんが、それでは骨ばかりの話になってしまいます。勸誡は仏教のイロハから、あれこれ譬え話や因縁話の中に、ぼちぼち受者の心を解きほぐしていかねばなりません。初心の方を、先ず掌を合わすことから導いていかなければならないのです。五・六席のお話では、受者に法悦を与えることはまず不可能と思えます。五重相伝を開こうとご希望の寺院は、どうぞその辺もご理解くださって、より多くの席数を我々にお与えくださるようお願いいたします。

お話がまとまらず、お恥ずかしい限りですが、限られた時間内に五重相伝のあらましから、勸誡・懺悔道場などで触れようと思われましたら、このような大雑把な内容になつてしまいました。皆さまにお許しをいただきまして、お話を終わりたいと存じます。終わる時間だけはジャストございました。（笑） ありがとうございます。

（同称十念）

司会 どうもありがとうございます。それでは、どな



たかご質問はございますか。ないようでございますので、総合研究所の主任研究員でいらっしやいます福西賢兆先生から、ご挨拶をお願いいたします。

**福西** 本日、当研究所の公開講座を催しましたところ、大変大勢の方々を集まっていたにつきまして本当にありがとうございますございました。

特に、上田先生はご遠方のところからお出ましいたゞき、我々に懇切丁寧に五重相伝の根本、また実際についてお示しいただきました。短い時間でこのような実のあるお話を頂戴できるというのは、本当にありがたいことでございます。

この研究会といたしましてはまだ継続的にこの講座がございますので、次回改めて皆さま方においでいただくことがあるかと思いますが、本日はこれをもちまして会合を終了させていただきます。ありがとうございます。（拍手）

**司会** それでは、同称十念でもって先生に感謝の意を込めたいと思います。

（同称十念）

どうも長時間ありがとうございました。

五重講説

(無常不遷)

五重相傳の意義と内容  
五重の名目(みょうもく)  
化他五重のはじまり  
前行と正傳法  
人生の真意義  
物質生活と精神生活

(無常觀)  
罪惡觀

◎初重「往生記」 法然上人作

伝機

第一、難達往生機 (不具三心)

13

第二、四障四機

疑心 懈怠 自力 高慢  
信心 精進 他力 卑下

第三、種々念佛往生機

26

1、智行兼備念佛往生機

2、義解念佛往生機

3、持戒念佛往生機

4、破戒念佛往生機

5、愚鈍念佛往生機

(單直仰信の機)

16

2

2

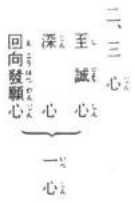
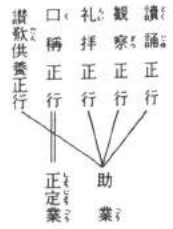
3

◎二重「末代念佛授手印」 聖光上人作

伝行

安心と起行と作業

一、五種正行(正行と雜行)



三、四修

恭敬修

無余修

無間修

長時修

四、三種行儀

尋常行儀

別時行儀

臨終行儀

結縛一行三昧心存助給口稱

◎三重「續解末代念佛授手印鈔」 良忠上人作

伝解

◎四重「決答授手印疑問鈔」 良忠上人作

伝証

問う、何が故に三心具足の上に現世の貪瞋は強盛に起り、後世の心行は尚弱く覺ゆるや。

答う、貪瞋は無始よりなれ習いし法なり。故に強し。願生は今生に始めて勵すの心なり。故に弱し。

他力の本願この時に當って利益を施すなり。

二河の譬歎よくよく見合わすべきなり。

二河白道のたとえ(水・火)

◎第五重「往生論註」 曇鸞大師作

伝信

十念の傳

聖道門—自力—難行道

淨土門—他力—易行道

南無—彌命—彌依

阿弥陀—無量壽

—無量光

助正分別についての問答	2
三心の四句分別について	本末16種・64句
四句の相互関係などについての問答	11
五念門・四修・三種行儀の名目の典拠について	
<結論> 三心五念四修皆是れ称名	

\* 決答授手印疑問鈔（傳証）

上巻

末代念佛授手印について	1
法然上人滅後の異義について	1
五種正行について	5
一心専念の文について	4
この文に種々の義あることについて	6
助正分別について	2

下巻

三心について	56
五念門について	1
三種行儀について	3
奥図の疑問について	1
善導寺聖人の日課とご臨終について	1

\* 下巻「三心處」の中の一章、「一向疑心句ノ下ノ註、一分往生ノ事」に示された問答のうち、第四番目の問答でこの書を代表する重要な問題あり。

\* 往生論註（傳信）＝ 口授心傳・凝思十念

巻上の末尾、回向門（八段細釈）第八「念数の記不記」の段にあるご指南によって口授が行われる。

同じく回向門第六「善悪校量」の段で三義校量のご指南あり。

（在心・在縁・在決定）

4. 末書について
5. 剃度式、懺悔道場
6. 正傳法（要偈・密室）
7. 勤誠について（時間表・席数・テキスト）
8. 巖修寺院の準備について

## 1. はじめに

## 2. 五重の基本

\* 『五重指南目録』

\* 三卷七書

『往生記』 1巻(法然) ..... 『往生記投機鈔』 1巻(聖問)  
 『末代念佛授手印』 1巻(聖光) ..... 『授手印傳心鈔』 1巻(聖問)  
 『領解末代念佛授手印鈔』 1巻(良忠) ..... 『領解授手印徹心鈔』 1巻(聖問)

『決答授手印疑問鈔』 2巻(良忠) ..... 『決答疑問銘心鈔』 2巻(聖問)

\* 五重相傳は浄土宗傳法の体系である

## 3. 傳書細釈

\* 往生記(傳機)

難遂往生の機

四障四機

種々念佛往生の機 ① 智行兼備念佛往生機 ② 義解念佛往生機

③ 持戒念佛往生機 ④ 破戒念佛往生機 ⑤ 愚鈍念佛往生機(單直仰信)

和字段(一紙小消息)

\* 末代念佛授手印(傳行 or 傳法)

袖書き(表紙書き)

序文

末代の念佛とは浄土一宗の義を知って浄土一宗の行を修する首尾次第條々行の事

六重二十二件五十五の法数

五種正行..... (法数 6) 觀經正行 供養正行に分ける

助正二業分別..... ( " 2) 正定業1 助業1

三 心..... ( " 3 0) 至誠心12 深心8 願心願心8 信心1 堅心1

五念門..... ( " 5)

四 修..... ( " 9) 誦經6

三種行儀..... ( " 3)

奥 図

述作年月日

授手印

血脈相傳手次

裏 書

&lt;結論&gt; 結歸一行三昧心存助給口稱南無阿彌陀佛

\* 領解末代念佛授手印鈔(傳解) = 問答釈義形式

五種正行についての問答..... 6

## 〇〇寺五重相傳会時間表 (七日五重)

	1日目 10月7日 (日)	2日目 10月8日 (月)	3日目 10月9日 (火)	中 日 10月10日 (水)	5日目 10月11日 (木)	6日目 10月12日 (金)	正傳法 10月13日 (土)
7:30	集合、調統	集合、調統	集合、調統	集合、調統	集合、調統	集合、調統	集合、調統
7:50		展朝法要	展朝法要	展朝法要 諸回向	展朝法要	展朝法要	8:00 ↓ 10:00 (要得連絡)
8:30	開白法要	勤 誠	勤 誠	勤 誠	勤 誠	勤 誠	
9:30	休 憩	休 憩	休 憩	休 憩	休 憩	休 憩	
10:00	贈五重礼拝	贈五重礼拝	贈五重礼拝	剃度式 (おかみそり) 日中法要 半齋	贈五重礼拝	贈五重礼拝	休 憩
10:30	勤 誠	勤 誠	勤 誠		勤 誠	勤 誠	10:30 ↓ 12:00 (要得連絡)
11:30	日中法要 半齋	日中法要 半齋	日中法要 半齋	記念撮影	日中法要 半齋	日中法要 半齋	
12:00	昼 食	昼 食	昼 食	昼 食	昼 食	昼 食	昼 食
12:50	諸回向	諸回向	諸回向	贈五重礼拝	諸回向	諸回向	
13:30	勤 誠	勤 誠	勤 誠	勤 誠	勤 誠	勤 誠	清掃、整頓
14:30	休 憩	休 憩	休 憩	休 憩	休 憩	休 憩	
15:00	勤 誠	勤 誠	勤 誠	勤 誠	勤 誠	日没法要 諸回向	お札、礼拝
16:00	日没法要 諸回向	日没法要 諸回向	日没法要 諸回向	日没法要 諸回向	日没法要 諸回向	帰 宅	鎮守法衆 16:00 ↓ 17:30
17:00	解 散	解 散	解 散	解 散	解 散		
18:00						集合、調統	解 散
18:30							
20:00						饗 待 式	
21:30						退 堂	

(五日五重)

## 〇〇寺五重相傳会時間表

月 日 時 間	初 日	第 2 日	第 3 日	第 4 日	第 5 日
	10月7日 (水曜日)	10月8日 (木曜日)	10月9日 (金曜日)	10月10日 (土曜日)	10月11日 (日曜日)
8:00	受 付	受 付	受 付	受 付	受 付
30		集合・調讀	集合・調讀	集合・調讀	集合・調讀
9:00	入行書院式	晨 朝	晨 朝	晨 朝	要偈道場
30		勸 誠	勸 誠	勸 誠	
10:00	開白法要	休 憩	休 憩	休 憩	
30	贈五重	贈五重	贈五重	贈五重	記念撮影
11:00	勸 誠	勸 誠	勸 誠	勸 誠	密室道場
30	日中(半齋)	日中(半齋)	日中(半齋)	日中(半齋)	
12:00	昼 食	昼 食	昼 食	昼 食	お札礼拝
13:00	諸回向	諸回向	諸回向	諸回向	法 衆
30	勸 誠	勸 誠	勸 誠	勸 誠	
14:00	休 憩	休 憩	日没(回向)	休 憩	
15:00	勸 誠	勸 誠	休 憩	勸 誠	
16:00	日別(回向)	日別(回向)	剃 度 式	日別(回向)	
30				菜石(軽食)	
17:00				血誓書院式	
30				懺悔道場	

※ 上記時間割は、都合で変更することがあります



## 浄土宗総合研究所所員・嘱託名簿

(平成14年7月1日現在)

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-5472-6571 (代表)

FAX 03-3438-4033

<分室> 〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96 佛教大学内

電話 075-495-8143

FAX 075-495-8193

ホームページアドレス <http://www.jsri.jp/>

所 長	石 上 善 応	〒272-0823 市川市東菅野2-7-1	0473-24-0330
主 任 研究員 (副所長)	福 西 賢 兆	〒105-0001 東京都港区虎の門3-11-7	栄立院 03-3431-0257
専 任 研究員 (分室主幹)	竹 内 真 道	〒522-0064 滋賀県彦根市本町2-3-7	宗安寺 0749-22-0801
専 任 研究員	今 岡 達 雄	〒272-0131 千葉県市川市湊18-20	善照寺 0473-57-2232
	大 蔵 健 司	〒193-0082 東京都八王子市式分方町179	不断院 0426-52-2524
	武 田 道 生	〒193-0824 東京都八王子市長房町16	龍泉寺 0426-64-0865
	戸 松 義 晴	〒152-0003 東京都目黒区碑文谷3-6-9-301 〒106-0044 東京都港区東麻布1-1-5	03-3723-7707 心光院 03-3583-4766
	林 田 康 順	〒230-0052 神奈川県横浜市鶴見区生麦5-13-61	慶岸寺 045-501-2816
	正 村 瑛 明	〒114-0023 東京都北区滝野川2-49-5	正受院 03-3910-1778



研究員

- 伊藤茂樹**  
〒 637-0042 奈良県五條市五條1-1-6 称念寺 07472-2-3885
- 上田千年**  
〒 617-0827 京都市長岡京市竹の台2 D1-502 075-955-7323
- 後藤眞法**  
〒 135-0022 東京都江東区三好1-3-3 圓通寺 03-3641-7518
- 佐藤晴輝**  
〒 292-0008 千葉県木更津市中島2209 正行寺 0438-41-0041
- 坂上典翁**  
〒 111-0024 東京都台東区今戸2-23-6 勝運寺 03-3872-7242
- 西城宗隆**  
〒 132-0015 江戸川区西瑞江2-38-7 大雲寺 03-3679-5748
- 斉藤隆尚**  
〒 130-0003 墨田区横川1-3-20 靈性院 03-3622-7829  
自宅 03-5689-5634
- 齋藤舜健**  
〒 615-8017 京都市西京区桂河田町12-2 セジュール87 202号 075-394-6173  
〒 692-0011 島根県安来市安来町1927 西方寺 0854-22-3572
- 柴田泰山**  
〒 172-0022 板橋区仲町22-14-204 03-3959-2746  
〒 806-0049 福岡県北九州市八幡西区穴生2-5-1 弘善寺 093-621-5953
- 善裕昭**  
〒 602-0802 京都市上京区寺町通今出川上る鶴山町14 阿弥陀寺内 075-231-3538  
〒 847-0017 佐賀県唐津市東唐津2-8-23 安養寺 0955-72-5327
- 曾田俊弘**  
〒 528-0057 甲賀郡水口町北脇557 淨福寺 0748-62-1932
- 袖山栄輝**  
〒 380-0845 長野市西後町1568 十念寺 0262-33-2449
- 水谷浩志**  
〒 471-0842 豊田市土橋町8-6 法雲寺 0565-28-3965

小澤憲雄	〒192-0062 東京都八王子市大横町7-1	極楽寺 0426-22-3609
熊井康雄	〒135-0022 東京都江東区三好2-7-5	龍光院 03-3642-3437
佐藤良文	〒112-0002 東京都文京区小石川4-12-8	光圓寺 03-3811-1307 自宅 03-5689-5634
坂上雅翁	〒174-0076 東京都練馬区土支田4-21-20	03-5905-5012
真柄和人	〒528-0041 滋賀県甲賀郡水口町虫生野320	永福寺 0748-62-2657
清水秀浩	〒573-0132 枚方市野村元町21-20	法楽寺 0720-58-8542
千古理恵子	〒658-0044 兵庫県神戸市東灘区御影塚町4-14-21	078-7821-1689
田中勝道	〒306-0023 茨城県古河市本町1-1-7	宝輪寺 0280-32-3467
中野隆英	〒111-0022 台東区清川1-2-5	念仏院 03-3873-0642
廣本榮康	〒135-0022 東京都江東区三好1-2-8	法性寺 03-3641-1356
細田芳光	〒135-0022 東京都江東区三好1-4-5	勢至院 03-3641-5780
村田洋一	〒105-0011 東京都港区芝公園2-11-25	最勝院 03-3434-6611
鷺見定信	〒253-0087 神奈川県茅ヶ崎市下町屋2-14-15	梅雲寺 0467-82-6060

石川 琢道

〒 250-0874 小田原市鴨宮 4 4 6

春光院 0465-48-5161

吉田 淳雄

〒 175-0093 東京都板橋区赤塚新町 2 -12-12

03-5997-9868

〒 299-1621 千葉県富津市竹岡 349-1

松翁院 0439-67-8354

和田 典善

〒 170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4-6-7 グレース西巣鴨 201

03-3910-8030

〒 381-0101 長野県長野市若穂綿内 8585-1

正満寺 026-282-2012

---

伊藤唯真	〒520-3101 滋賀県甲賀郡石部町石部中央 2-5-46	善隆寺 0748-77-2347
梶村昇	〒157-0066 東京都世田谷区成城 4-21-2	03-3483-1025
田丸徳善	〒145-0071 東京都大田区田園調布 5-3-4	照善寺 03-3721-3148
長谷川匡俊	〒260-0812 千葉県千葉市中央区大巖寺町 180	大巖寺 043-261-2917
八木季生	〒112-0011 東京都文京区千石 1-14-11	一行院 03-3941-2035

# 総合研究所運営委員会委員名簿

(平成14年7月1日現在)

委員 (役職)	水谷 幸正 (宗務総長)		
	小林 昭五 (教学局長)		
	曾和 義雄 (財務局長)		
	大島 良彦 (社会局長)		
	袖山 榮眞 (東京事務所長)		
	小林 正道 (出版室長)		
	石上 善應 (総合研究所長)		
福西 賢兆 (総合研究所主任研究員)			
委員 (総長 委嘱)	香川 孝雄		
	〒 543-0017 大阪府大阪市天王寺区城南寺町 5-16	蓮生寺	06-6761-0710
	梶村 昇		
	〒 157-0066 東京都世田谷区成城 4-21-2		03-3483-1025
	中井 眞孝		
	〒 600-8087 京都府京都市下京区高倉通松原下ル樋之下町 37-5	長香寺	075-351-1754
	花園 宗善		
	〒 612-8304 京都府京都市伏見区榎町 713	悟真寺	075-621-2229
	藤本 浄彦		
	〒 742-2107 山口県大島郡大島町東屋代 944	西蓮寺	0820-74-2662
	牧 達雄		
	〒 525-0041 滋賀県草津市青地町 1146	西方寺	0775-64-2277
丸山 博正			
〒 113-0021 東京都文京区本駒込 1-1-5	潮泉寺	03-3813-2314	
八木 季生			
〒 112-0011 東京都文京区千石 1-14-11	一行院	03-3941-2035	
山下 法文			
〒 515-0075 三重県松阪市新町 874	樹敬寺	0598-23-9680	

## 平成十三年度活動報告

▼平成十三年

四月二日

・「法語集」編集会議（研究所）

・大正大学フレックスコース研修員辞令伝達式（東京事務所）

四月九日

・「法語集」編集会議（研究所）

・平成十三年度第一回所内連絡会（研究所）

・「現代布教」研究会（研究所）

四月十三日

・「葬祭仏教」研究会（研究所）

四月十六日

・第一回所内連絡会（研究所）

・「法語集」編集会議（東京事務所）

・専任研究員会議（東京事務所）

四月十七日

・分室会議（京都分室）

四月二十三日

・「法語集」編集会議（東京事務所）

・第三回所内連絡会（研究所）

四月二十四日

・「法語集」編集会議（東京事務所）

・「伝承儀礼」十三年度第一回研究会（研究所）

講師 八百谷啓人師

五月二日

・「現代布教」研究会（研究所）

五月七日

・「法語集」編集会議（東京事務所）

・第四回所内連絡会（研究所）

・専任研究員会議（研究所）

五月九日

・講座「浄土宗実践僧侶学」大正大学

講師 坂上・西城

五月十日

・「基本典籍の現代語訳」編集会議（研究所）

五月十四日

・第五回所内連絡会（研究所）

五月十五日

・分室会議（京都分室）

五月十六日

・「法語集」編集会議（東京事務所）

・「基本典籍の現代語訳」編集会議（研究所）

五月十七日

・「法語集」編集会議（研究所）

・分室会議（京都分室）

五月十八日

・「法語集」編集会議（研究所）

・「国際交流に関する基礎的研究」第一回合同会議（東京事務所）

五月二十一日

・第六回所内連絡会（研究所）

五月二十三日

・講座「浄土宗実践僧侶学」（大正大学）

講師 袖山・村田

五月二十八日

・「法語集」編集会議（研究所）

・第七回所内連絡会（研究所）

・「現代布教」研究会（研究所）

五月三十日

・「伝承儀礼」第二回研究会（研究所）

六月四日

・専任研究員会議（研究所）

・第八回所内連絡会（研究所）

六月十一日

・第九回所内連絡会（研究所）

六月十二日

・「伝承儀礼」第三回研究会（研究所）

・「基本典籍の現代語訳」編集会議（研究所）

・講座「浄土宗実践僧侶学」（大正大学）

講師（正村・斎藤・ジョナサンワッツ）

六月十八日

・第十回所内連絡会（研究所）

・分室会議（京都分室）

・「日常勤行式の現代語化に関する基礎的研究」（研究所）

六月二十一日

・「国際交流に関する基礎的研究」第二回合同会議（東京事務所）

六月二十五日

・第十一回所内連絡会（研究所）

六月二十三日

・「現代布教」研究会（研究所）



- ・第二五回所内連絡会(研究所)  
十月十五日
- ・第二六回所内連絡会(研究所)  
十月十八日
- ・分室個人研究発表会(佛敎大学)
- ・分室会議(京都分室)  
十月二十二日
- ・〔現代布教〕研究会(研究所)
- ・第二七回所内連絡会(研究所)  
十月二十四日
- ・講座「浄土宗実践僧侶学」(大正大学)  
(講師 鷺見・坂上)
- ・〔伝承儀礼〕第五回研究会(研究所)  
十月三十一日
- ・〔現代布教〕研究会(研究所)  
十一月五日
- ・〔現代布教〕研究会(研究所)
- ・第二八回所内連絡会(研究所)  
十一月七日
- ・講座「浄土宗実践僧侶学」(大正大学)  
講師 大蔵・細田・後藤・佐藤  
十一月十二日
- ・第二十九回所内連絡会(研究所)  
十一月十五日
- ・分室会議(京都分室)  
十一月十六日
- ・専任研究員会議(研究所)
- ・〔国際交流に関する基礎的研究〕第四回合同会議(東京事務所)  
十一月十九日
- ・第三十回所内連絡会(研究所)  
十一月二十一日
- ・講座「浄土宗実践僧侶学」(大正大学)
- ・オープンセミナー「そう、だから法然」(よみうりホール)  
十一月二十六日
- ・〔現代布教〕研究会(研究所)
- ・第三十一回所内連絡会(研究所)  
十一月二十七日
- ・〔伝承儀礼〕第六回研究会(研究所)  
十二月三日
- ・専任研究員会議(研究所)
- ・〔葬祭仏教〕研究会(研究所)
- ・第三十二回所内連絡会(研究所)  
十二月五日
- ・講座「浄土宗実践僧侶学」講師(大正大学)  
佐藤(晴)・長谷川上人  
十二月十日
- ・第三十三回所内連絡会(研究所)  
十二月十一日
- ・〔現代布教〕研究会(研究所)  
十二月十三日
- ・分室会議(京都分室)  
十二月十七日
- ・〔法語集〕編集会議(研究所)
- ・第三十四回所内連絡会(研究所)  
十二月十九日
- ・講座「浄土宗実践僧侶学」最終講義(大正大学)  
講師 鷺見・全講師  
十二月二十五日
- ・〔現代布教〕研究会(研究所)  
一月七日
- ・〔法語集〕編集会議(研究所)
- ・第三十五回連絡会(研究所)
- ・専任研究員会議(研究所)  
一月九日
- ・〔現代布教〕研究会(研究所)  
一月十一日
- ・〔生前法号授与式の基本と実践〕(研究所)  
公開講座打合せ  
一月十五日
- ・分室会議(京都分室)  
一月十六日
- ・〔伝承儀礼〕第七回研究会(研究所)  
一月十七日
- ・第三十六回所内連絡会(研究所)
- ・専任研究員会議(研究所)  
一月二十一日
- ・〔現代布教〕研究会(研究所)  
一月二十八日
- ・〔基本典籍の現代語訳〕編集会議(東京事務所)
- ・専任研究員会議(研究所)



- ・第二七回所内連絡会(研究所)
- ・「葬祭仏教」研究会(研究所)
- ・「仏教福祉」編集会議(東京事務所)
- 二月四日
- ・教団付置研究所間の懇談会(NCC宗教研究所)
- 二月六日
- ・「現代布教」研究会(研究所)
- 二月七日
- ・第三十八回所内連絡会(研究所)
- 二月十四日
- ・第三十九回所内連絡会(研究所)
- ・専任研究員会議(研究所)
- ・「日常勤行式の現代語化に関する基礎的研究」研究会(研究所)
- 二月十八日
- ・「現代布教」研究会(研究所)
- ・第四十回所内連絡会(研究所)
- ・「葬祭仏教」研究会(研究所)
- 二月二十一日
- ・分室会議(京部分室)
- 二月二十五日
- ・第四十一回所内連絡会(研究所)
- ・「葬祭仏教」研究会(研究所)
- 二月二十八日
- 平成十三年度第二回運営委員会(宗務庁)
- ・「葬祭仏教」研究会(宗務庁)
- 三月四日
- ・「浄土宗基本典籍の現代語訳」研究会(研究所)
- ・「現代布教」研究会(東京事務所)
- ・第四十二回所内連絡会(研究所)
- ・専任研究員会議(研究所)
- ・「教化儀礼」公開講座打合せ(研究所)
- 三月五日
- ・「浄土宗基本典籍の現代語訳」研究会(研究所)
- 三月十一日
- ・第四三回所内連絡会(研究所)
- 三月十四日
- ・公開講座「生前法号授与式の基本と実践」(大本山増上寺)
- 三月二十五日
- ・「現代布教」研究会(研究所)
- ・第四四回所内連絡会(研究所)
- ・「国際交流に関する基礎的研究」(東京事務所)
- 三月二十六日
- \* 分室会議(京部分室) 六名
- 三月二十七日
- \* 「葬祭仏教」研究会(研究所) 七名

# 平成十四年度 研究課題・担当者

平成十四年七月一日現在

研究課題		研究課題担当者			
		研究代表	研究主務	研究員	講師・研究スタッフ
一、浄土宗義と現代	① 浄土教比較論 〔浄土宗大辞典の点検〕含む	石上善應	林田康順	福西賢兆 大蔵健司 戸松義晴 西城宗隆 袖山栄輝 柴田泰山 細田芳光 村田洋一 鷺見定信 石川琢道 吉田淳雄 和田典善	今岡達彦 ジョナサン・ワッツ
		石上善應 梶村昇(副)	袖山栄輝 善 裕昭	林田康順 柴田泰山 真柄和人 千古理恵子	
二、現代葬祭仏教研究	② 浄土宗基本典籍 の現代語化 A 浄土三部経 B 四十八巻伝	伊藤唯真	善 裕昭	林田康順 柴田泰山 真柄和人 千古理恵子	
		伊藤唯真	善 裕昭	伊藤茂樹 斉藤舜健 曾田俊弘	橋本初子 松永知海
三、伝道(布教教化)の研究	③ 浄土宗典籍・版木の研究	伊藤唯真	竹内真道	伊藤茂樹 斉藤舜健 曾田俊弘	橋本初子 松永知海
		伊藤唯真 福西賢兆(副)	大蔵健司 西城宗隆	武田道生 坂上典翁 佐藤良文 能井康雄 細田芳光 鷺見定信	
④ 葬祭仏教	⑤ 教化儀礼の研究 〔伝承儀礼研究〕	福西賢兆	坂上典翁	熊井康雄 田中勝道 廣本榮康	八百台啓人
		福西賢兆 伊藤唯真	坂上典翁	熊井康雄 田中勝道 廣本榮康	八百台啓人
⑥ 現代布教の検討	⑥ 現代布教の検討	八木季生	正村瑛明	斉藤隆尚 佐藤晴輝 後藤眞法 中野隆英	
		八木季生	正村瑛明	斉藤隆尚 佐藤晴輝 後藤眞法 中野隆英	

九、編集	八、日常勤行式の現代語化	七、ホームページ教化情報提供	六、仏教福祉の研究	五、現代宗教・社会問題への対応		四、開教の基礎的研究		
				⑩新しい宗教動向への対応	⑪生命倫理の諸問題	⑨国際交流	⑧海外開教	⑦国内開教
⑯「教化研究」「総研叢書」 「研究成果」他	⑮現代語化に関する基礎研究	⑭英語によるホームページ運営	⑬日本語によるホームページ運営	⑫仏教福祉	石上善應	田丸徳善	⑧海外開教	⑦国内開教
	石上善應			長谷川匡俊				
大蔵健司	福西賢兆	戸松義晴	今岡達雄	坂上雅翁	武田道生		水谷浩志	武田道生
細田芳光 石川琢道 村田洋一 吉田淳雄			小沢憲雄 齊藤隆尚 佐藤良文	上田千年	戸松義晴	武田道生 水谷浩志 戸松義晴 吉田淳雄	武田道生 驚見定信 戸松義晴	戸松義晴 和田典善 水谷浩志
	山田隆昭 佐山哲郎	ジョナサン・ワッツ			今岡達彦	松涛弘道 生野善応 佐々木良法 岩田斎肇 佐藤良純 松涛誠達		

## 編集後記

▽教化研究十三号をお届けする。

▽今回掲載の成果報告は八木季生研究代表の現代布教研究班による「人材データベイスの活用と結縁五重相伝会のあり方」である、特に結縁五重相伝会は研究ノートとして同研究班の公開講座「五重相伝の基本と実践」講師上田見有師の講録を掲載した、あわせてご覧頂きたい。

▽研究ノートは前述の公開講座の他、葬祭仏教研究班による「葬祭に関するアンケート」静岡教区アンケート第一次分析結果報告を記載した。

▽その他の研究については、研究継続中のものも含め、それぞれの概要・研究経過等を「研究活動報告」に記載した。

▽なお研究所のホームページアドレスがドメイン取得により変更された、新アドレスは名簿欄に掲載してあります。

(大)

## 教化研究 第13号

平成14年7月15日 発行

発行人 石上善應

編集・発行 浄土宗総合研究所

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 照明会館内

電話(03)5472-6571(代表) FAX(03)3438-4033

印刷所 株式会社共立社印刷所



**JOURNAL  
OF  
JODO SHU EDIFICATION STUDIES**

**(KYŌKA KENKYŪ)**

No.13, 2002

*Published by*  
**JODO SHU RESEARCH INSTITUTE**  
(Jōdo Shū Sōgō Kenkyūjo)  
**TOKYO, JAPAN**